第八十二圖　東金剛神像

第六十三回　保良弗佞正祚奏天便

第六十三圖　清太祖肖像（北京）

安（道安書を善くし又彫刻にも巧なり）財を抛ちてこれを修補す。されば今見る所の外面は建久と永祿との修覆に成りしものなり。唯蓮座のみは幸に此の數度の災害を免れ、外部の蓮瓣二十八葉中四五葉は損傷せらたれども、其の餘の二十三枚には大千世界佛菩薩の圖ありて、天平建立當時の彫刻を見ることを得べし。

第五節　建　築

當代の建築は前期を繼續して益發達し、終に圓滿なる成果を見るに至れり。其の伽藍建築の制度は前期と相異なる所なしと雖も、一般に規模壯大にして往々規矩を超え、其の手法は前期より一歩を進めて完全の域に達したり。卽ち組物は完全なる「三手先さ」の構架法を生じ、小天井支輪の用法を生じ、虹梁の形漸く生じ來り、一般に木割强大にして雄健堅實の相を備ふるに至れり。建築内外の裝飾は前期と其の方法を均うすと雖も、其の模樣には自ら一種特殊の性質あり。又當末期に於ては色彩に高次の間色を用ゐるものあるに至れり。

宮殿建築は元明天皇平城遷都に當りて大内裏の制を布き給ふや、大に發達の機を得たらんも、其の規模未だ完備せるものに非りしならん。されど皇居及び諸官衙は丹楹碧甍の大建築ありしこと信ずべきが如し。聖武天皇の御宇五位以上及び庶民の資力あるものは、瓦を以て屋を葺き、丹堊を以て之れを塗らしめたる傳記あり。爾後瓦の應用頗る行はれたるが如し。傳へ云ふ奈良唐招提寺の講堂は、大内裏の朝集堂を賜はりしものなりと、夫れ或は然らん。

當期に於て本地垂跡の說起り、神佛漸く混合せんとせり。而して當時の神社建築の形式を考ふるに、猶未だ佛寺の形式を加味せざりしが如し。寶龜二年藤原百川が勅を奉じて制定せる造殿儀式を按ずるに、當時の大中小社共に千木葛緒木を上げたる神明造りにして、屋蓋の輪廓は未だ曲線形をなさゞるものなりしが如し。

遺　物

東大寺法華堂

南都東大寺の法華堂は當代建築の遺物なり。其の外形は古來屢修繕せられて、多く古式を失へりと雖も、其の内部は依然として千餘年の舊觀を存し、柱、組物、虹梁、天井の手法悉く當代の皓皙を表示し、其の構架亦能く當代建築の眞相を現はせり。

大和　東大寺

唐招提寺金堂

第六十四圖は南都唐招提寺金堂の圖なり。七間四面の堂にして土壇の上に立ち、屋蓋は四注形をなし、棟の兩端に鴟尾を上げたり。是れ蓋し全く古式を保存するものなり。組物は完全なる三手先きにして、極めて低く前方に挺出せる支輪あり。軒は甚だ深く地垂木は圓形を成せり。內陣は三間二面にして格天井を具へ彩色を加へたり。外部は悉く丹を以て塗りたれども、支輪の間には極彩色の唐草を畫ける痕跡あり。本邦建築の外部に極彩色を施すことは當代已に之れあるものゝ如し。凡そ本邦伽藍建築の細部に於て最も主要とする所は、軒廻り及び組物にあり。組物の「プロポーション」のみを以てするも、猶能く建造物の年代を區別し得るなり。招提寺金堂の組物及び軒廻りは、卽ち當代の樣式を代表するものと謂ふべし。

南都東大寺及び西大寺は當期の建立に係る大伽藍なり。西大寺は全く古の規模を存せざるも、東大寺は猶幾分の古式を存す。南大門、東西兩塔、中門、廻廊、金堂、講堂の跡今猶辨ずべし。金堂は卽ち大佛殿にして其の大なること古今に絕せり。

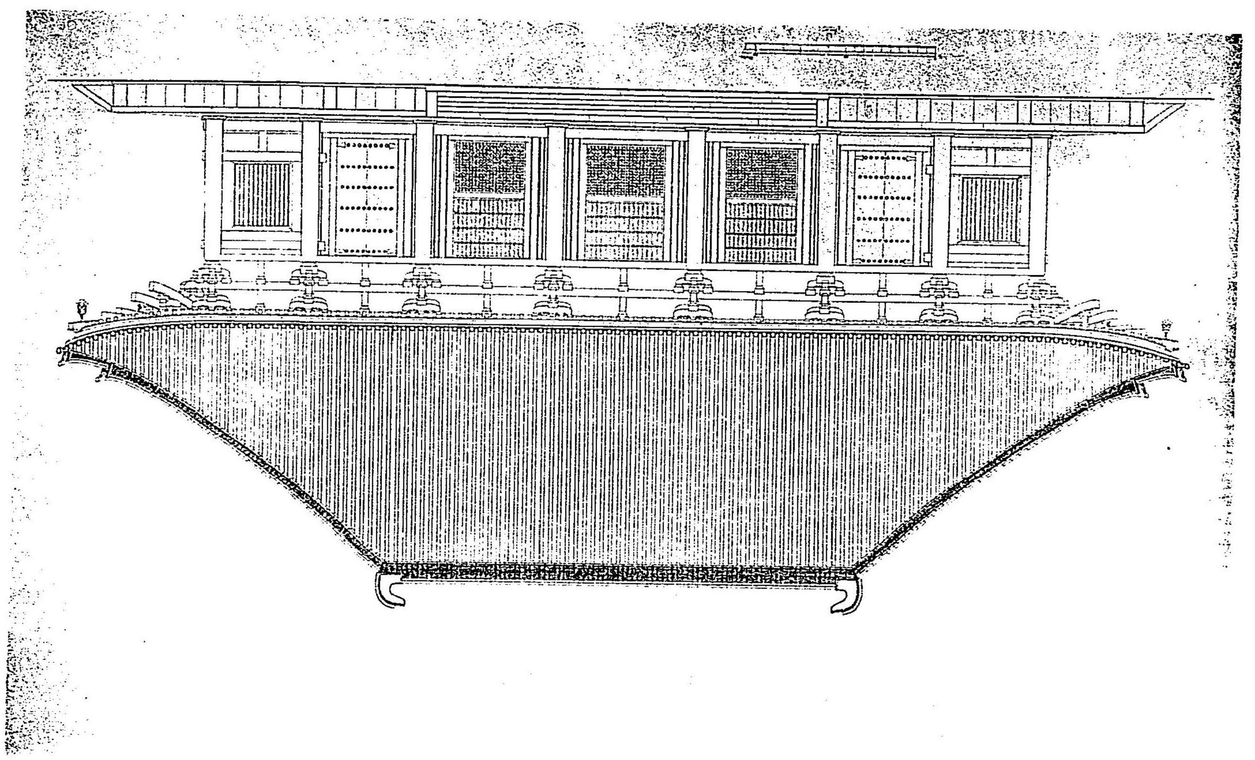
南都新藥師寺も亦當代の遺物なり。當麻寺の東西兩塔亦當代の遺物にして、其の形式手法共に招提寺の金堂と酷肖する所あり。

之れを要するに推古、天智、聖武天皇の三期は之れを寧樂朝建築の名稱の下に總括すべきものにして、其の建築界に致せる著名の事項は、奈良六宗の伽藍建築を大成せし事是れなり。

第六節　美術的工藝

一たび東大寺正倉院の寶庫を窺ひ、その充滿せる幾多の珍器寶玩を觀たるもの、誰れか當代技工の非常なる發達に驚かざるものあらんや。其の製作品の種類に就きても、通常の彫刻、雜鐵鑄物、抹漆、繡織の類は勿論、七寶あり、玻璃あり、螺鈿あり、平文あり、末金鏤あり、蜜陀畫あり、金銀莫臥爾あり、腐繡、夾繡等の染物あり、殆んど作し能はざる製作なく、其の技術の如き後世及び難き精巧を盡しゝもの少なからず。而して裝飾圖の意匠に至りては、富贍なる知識を以て各種器玩の種類に應じて、何れも適當なる圖樣を選み、佛器には佛說に由れるもの、樂器には樂に因緣あるもの、武器には武を表は

第六十四圖　唐招提寺金堂



(法隆寺金堂 立面) 圖四十六第

せるものを取り、其の配置の如きも形の長短方圓に從ひて適當なる主眼點を定め、彼此對照の妙を得せしめ、瑣細なる局部の裝飾に至るまで一々適應せざるはなし。一片の模樣といへども偶然に描れたるはなし。其の注意の周到綿密なる實に人をして半點の批難をも下すこと能はざらしめたり。殊に諸器物の形狀は凡て奇拔にして峻嚴雄壯の觀を表はし、大さ寸を超えざる金具の一片と雖も其の形狀の美なる山高く谷深く雲騰り風動くの趣あり。かく緻密なる點に精神を注ぐは我が國技工の特長なれども、此の時代の如き鋭敏なる注意は、後世非凡なる作家におらざれば爲し能はざる所なり。憶ふに我が國の技術家は古來其の職を世襲し、子孫相繼ぎて幾多の鍛錬を重ね、殊に文武天皇の世よりは朝廷に畫工司、織部司、鍛冶司、典鑄司、營陶司、漆部司等を置き、各職工を保護せられたるを以て、何れも生計の艱苦なく、專ら其の技術を磨くことを得て、遂にかゝる大進歩を表はすに至りしものなるべし。

今正倉院寶庫に納まれる寶器は其の數無慮三千點、刀劍あり、鏡鑑あり、服飾品あり、圖書あり、文房具あり、樂器あり、翫弄具あり、藥品あり、香料あり、又武器あり、佛具あり、儀式の具あり。嘗て天平勝寶八歳に聖武天皇の御遺物を東大寺盧舍那佛に獻納せられし時、これに添へられたる獻物帳なるものありて、細かに其の目錄を記されたり。この目錄に由れば、中には天武天皇又は元明天皇の世より傳はりしものある由を記されたれども、其の他は多く聖武天皇の世に製作せられしものと認めざるべからず。又目錄中大刀の內數點畫屏風の內數點は唐作、又厨子一口並に畫屏風一叠は百濟製の由記されたれば、其の他は固より本邦作の物と認むべし。此の獻物帳の外東大寺古文書中に鏡其の他の物品を製作せし許多の徵證ありて、其の樣式趣致に於ても亦明かに日本製なることを見ることを得べきなり。今各種の技工に就きて其の製作の一斑を擧ぐれば、

金工

鑄造及び彫鏤等凡て當代金工の進歩せしことは、彼の大佛建立の如き大製作ありしことを以て知ることを得べし。特り巨大なる佛像類の製作のみならず、鏡又は刀劍類の緻密なる裝飾の如き、鑄造には蠟型を用ゐ、彫には各種の鑿刀を用ゐて肉合の美、模樣の巧を顯はせり。

白銅圓鏡　（第六十五圖）　正倉院寶庫　御物

白銅の鑄物にして徑一尺九寸四分あり。寶庫中最大の鏡なり。背面に四神八卦十二支（何れも方位を示せるものなり）の圖あり。鈕は獅子形なり。

平螺鈿圓鏡　（第六十六圖）　正倉院寶庫　御物

背面に螺鈿及び紅琥珀を以て鳥獸草花文を嵌裝せり。徑一尺二寸九分あり。

白銅八葉鏡　（第六十七圖）　正倉院寶庫　御物

背面に蟠龍山形雲形文あり。緣には八卦を圖す。鈕は龜形にて徑一尺七分あり。

漆背八葉鏡　（第六十八圖）　正倉院寶庫　御物

背面に漆を施し、鳳鶴又は草花の文樣あり。模樣は卽ち平脫文とて金銀の薄片を貼して毛彫を施しゝものなり。

七寶十二稜鏡　（第六十九圖）　正倉院寶庫　御物

表は銀裏は純金地に七寶を以て花形の模樣を裝せり。線は後世のものより太き金線を用ゐたり。七寶の工は文武天皇の世大寶令を定められ、工藝を保護せられし頃より、典鑄司に於て製造せしめられたりといへり。されば當代に入りては其の技術の一層進歩せしことなるべし。

金銀鈿裝太刀　（第七十圖）　正倉院寶庫　御物

此の太刀は最も裝飾の巧を盡しゝものにして、長さ二尺六寸七分。鋒は偏刄にて、把は鮫皮を貼り、鞘は黑漆塗に末金鏤卽ち磨出蒔繪にて、獸及び蔓草の模樣を描き、金物は金銀彫刻にて、玉を嵌裝せり。

金銀平文横刀　（第七十一圖）　正倉院寶庫　御物

長さ一尺七寸九分。鋒は偏刄なり。把は香木を以て作り、鞘は黑漆に獸草花などの金銀平文あり。金具は金銅にて七子地に蔓草の彫あり。

紫檀金銀平文柄香爐　（第七十二圖）　正倉院寶庫　御物

これは手に執るべき香爐にて紫檀製にて金平文を施し、又大小の玉を嵌せり。火蓋は金銅柄尾は金銀の獅子形を

第九十六圖(宋織錦)

(獻御錦形式)圖四十九第

第九十九圖(烏獸花卉文織錦屏風)

第百三圖(蓮花形彩繪盤)

第百五圖(人物彩繪盤)

第九十二圖(烏獸花卉文錦)

第八十九圖(蒔繪鏡)

第八十四圖(鏡)

第八十八圖(玻璃椀)

第七十五圖)斤尺)

第八十七圖(玻璃皿)

第八十二圖(瓶)

第七十三圖(金銅鏡)

第八十六圖(淡青人物鏡)

第八十一圖(五鈷鈴)

(刀柄部銀金)圖十七第

(刀柄部銀金)圖一十七第

第六十六圖(白銅四面鏡)

第六十五圖(白銅四面鏡)

第七十七圖(尺人)

(盛寧和文平銀金柄)圖二十七第

第七十八圖(笙)

第七十四圖(木彫像)

第六十七圖(白銅八葉鏡)

第八十五圖(陶製花瓶)

第八十圖(淡青釉陶壺)

第七十六圖(木造裝飾菲屋)

第七十九圖(淡青釉壺)

第九十一圖(寢獸文銅鏡)

第百圖(鳳文銅鏡)

第八十六圖(陶製鏡)

第九十一圖(山羊文銅鏡)

第九十三圖(瓶)

第九十七圖(花鳥文銅机鏡)

第八十三圖(鑑)

(盛寧和文平銀金柄)圖四百第

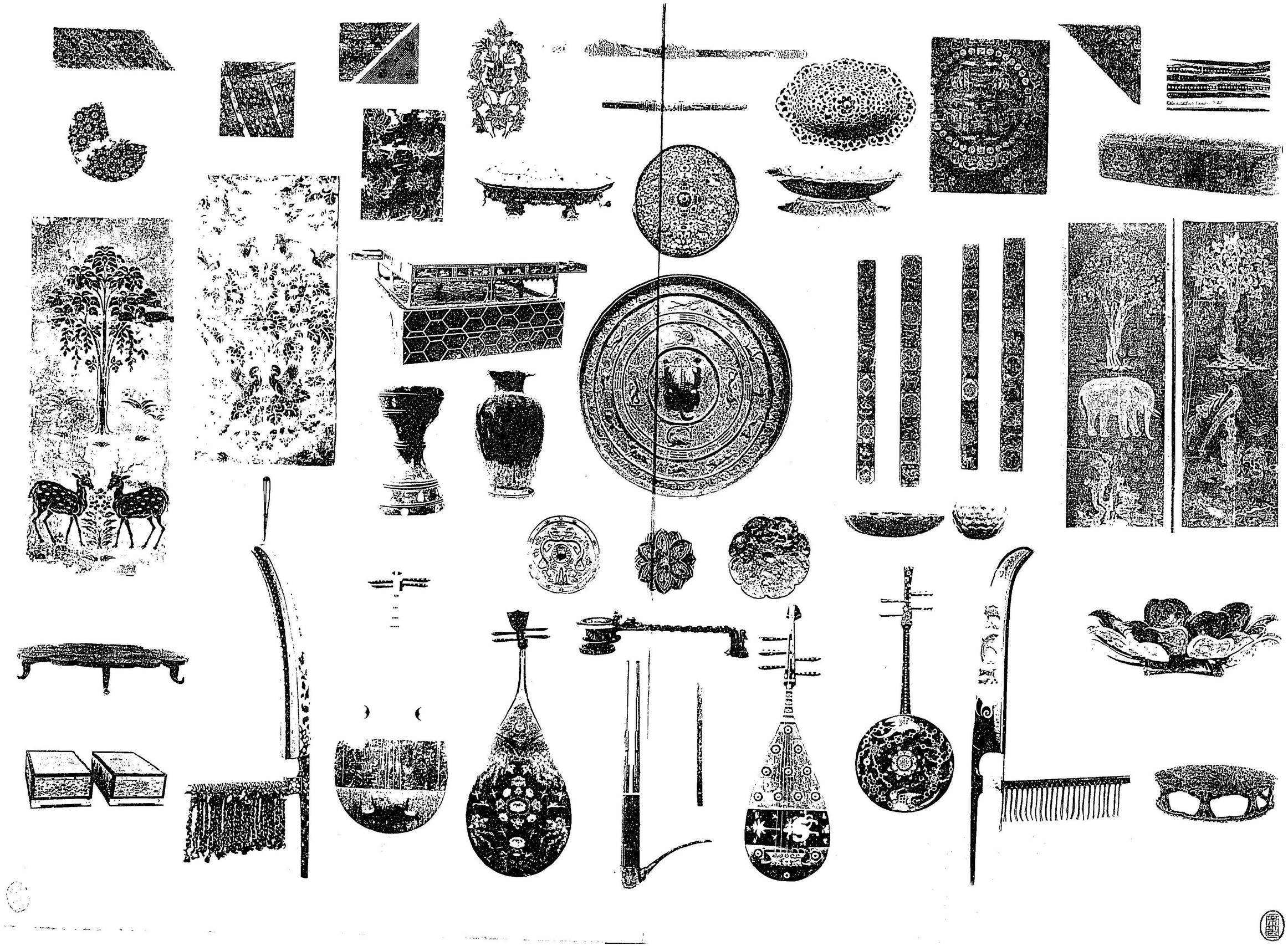
第九十五圖(花卉文銅鏡)

第百一圖(龜甲花形銅鏡)

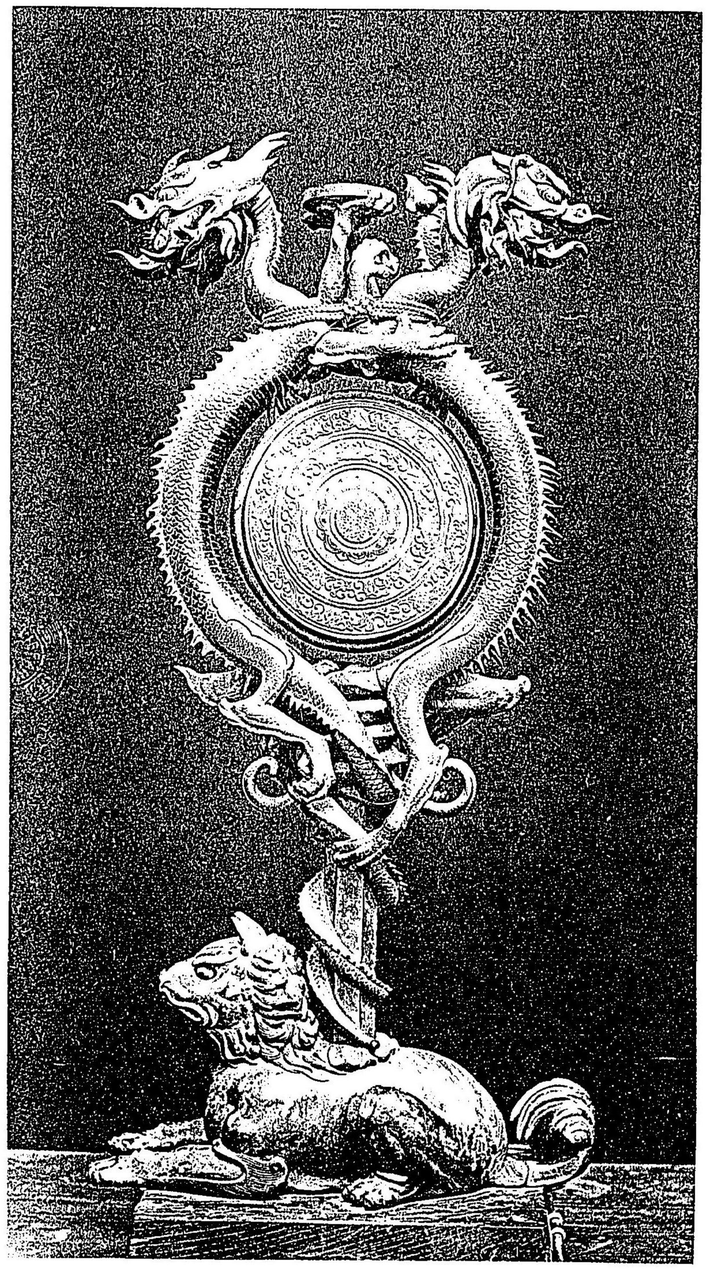
第九十八圖(烏獸花卉文銅屏風)

第百二圖(銀地彩繪盤)

(蒔繪形花)圖四百第



第百六圖（華原磬）



第百六圖（青銅器）

裝せり、其の彫刻殊に精巧なり。全體の形も亦よく整ひ、裝飾に對して十分の美を表はせり。

金銅盤　（第七十三圖）　正倉院寶庫　御物

金銀反花形の盤にして（食器なるや又は佛器なるや詳かならず）身には細かなる毛彫を施し、蓋は透彫に毛彫を加へたり。その形狀殊に美なり。

華原磬　（第百六圖）　大和　興福寺藏

正倉院御物の外に忘るべからざる當代鑄銅の名品は、興福寺の鉦鼓並に臺なり。これを華原磬と名づけしは、華原は支那の名石を產する地名にして、其の石にて作りし磬の世に賞せられしより起りしものなり。されど、此の物たる全く鉦鼓にして磬に非らず、唯其の佳名を取りて假りに負はしめたるものなるべし。高さ六尺二寸五分ありて、全體銅鑄物なり。金鼓は四つの龍のからめる中に吊るされ、中央の柱は狛犬の背に由りて支へられたり。其の形狀よく整ひ、鑄造亦巧にして、實に端嚴にして雄麗なる趣を顯はせり。其の樣式は全く春日神社並に唐招提寺の甍太鼓と相類似し、同時の日本作たること疑ふべからず。

彫刻及び雜篋類

彫刻の技も當代は造像の盛なりしが爲め大に發達して、殊に裝飾的の技術は圖案の進歩と相伍して精妙を顯はすに至れり。雜篋も亦夙に外國の製を摸せしが、自然の熟練を重ねて、當代に至りては非常の精巧を極めたりき。

遺品

木彫盤　（第七十四圖）　正倉院寶庫　御物

身及び蓋とも木彫にて「アカンサス」の葉に類せる草花式の彫刻を施し、金銀泥の彩色を加へたり。別に同樣の蓋の如き殘缺あり、共に薄作にして彫透あり。形狀の美、技術の精大に見るべきものなり。

牙尺　（第七十五圖）　正倉院寶庫　御物

この時代の一尺の尺度にて（現時の九寸七分八厘に當る）牙製にて二枚は紅色他の二枚は綠色に染め、精密なる彫刻模樣を施せり。

木畫紫檀碁局　（第七十六圖）　正倉院寶庫　御物

此の碁局は紫檀製にて方一尺七寸二分高さ五寸二分あり。盤面の界線側面脚部の裝飾何れも象牙を嵌裝し、實に精美を極めたり。其の側面の染象牙にて嵌せる圖は、獅子狩又は駱駝を牽ける樣などあり。又碁子を納るべき筒は二つとも龜形をなし、環を摘みて其の一を引き出だせば同時に他の一方の筒も突き出ださるゝの裝置を設けたり。又この碁局の筥は鼈甲張にて金銀彩色の模樣を施し、象牙にて龜甲形の界線を嵌せり。

尺八　（第七十七圖）　正倉院寶庫　御物

竹製にて細かなる模樣を彫せり。中に婦人の琵琶を彈じ、又は草花を摘めるなどの圖あり。

笙　（第七十八圖）　正倉院寶庫　御物

管は竹製にて、壺は木製に漆を施し銀平文にて伽陵頻伽の笙を吹ける樣又小兒の花形の上に遊べる樣などの裝飾あり。

染牙紫檀琵琶　正倉院寶庫　御物

紫檀に染象牙の模樣を嵌裝せり。第七十九圖は其の表にて、撥面は皮に狩の彩色畫あり。上に漆を施したり。第八十圖は背面にて、卽ち染象牙の花鳥模樣あり。圖樣よく調ひて牙の染め方も至りて巧なり。

五絃琵琶　（第八十一圖）　正倉院寶庫　御物

紫檀に螺鈿の模樣を嵌し、五絃を張れり。撥面は鼈甲に螺鈿を以て駝背に跨りて琵琶を彈ずるの圖を裝せり。全體の製作精緻を極めたり。

阮咸　（第八十二圖）　正倉院寶庫　御物

紫檀に螺鈿を裝嵌せり。撥面は皮に三婦人の阮咸を彈ずる彩色繪あり。背面は華蔓を啣みたる鳥の圖の螺鈿模樣あり。

箜篌　正倉院寶庫　御物

西洋の立琴の類にて長さ凡そ五尺三十三絃あり。正倉院にはこの箜篌二個の殘缺あり。卽ち此の圖に出だせるは、二つとも此の破片に據りて、正倉院寶庫御物整理擔任の稻生眞履天平當時の古圖を參して自ら製作せしものなり。裝飾は二個とも相類し、胴には鳥獸草花などの彩色模樣あり。棹の本にも獅子首又草花の彫あり。第八十三圖は頭を吊るし、第八十四圖は柄を地に立てゝ彈ずべく製作せられたり。

陶工並に玻璃工

陶工は他の技術に比ぶれば頗る幼稚を免れざりしも、綠色黃色紫色など種々なる釉を施すことは、此の時代に創意せられしものゝ如し。玻璃器の製作は古くより開けたりしが、當代に至りて大に精巧を加へ、綠色瑠璃色の各種器物を製し切子形又は彫刻模樣をも施すに至れり。

遺品

陶製花瓶　（第八十五圖）　正倉院寶庫　御物

高さ一尺三寸八分、其の作交趾窯に類し、土は白色製にして質脆し。綠色釉の斑文あり。緣高臺など缺損あり。

陶器鼓胴　（第八十六圖）　正倉院寶庫　御物

高さ一尺二寸六分、同じく交趾窯に類し、白地に綠並に黃釉文あり。此の他寶庫內に同種の陶製佛餉器皿及び小塔など數十點あり。

玻璃皿　（第八十七圖）　正倉院寶庫　御物

淡綠色の玻璃にて楕圓形をなし、底には高臺なし。腹部に鰯魚に水藻の彫刻模樣あり。

玻璃椀　（第八十八圖）　正倉院寶庫　御物

白色にして外面全體に龜甲凹形を顯はせり。製作至りて精巧なり。

織工並に染工

嘗て元明天皇の世、織部司の挑文師を諸國に派遣して、錦を織ることを敎授せしめられしより、諸國の織工何れも錦綾を製するに至り、殊に支那との交通は次第に頻繁を來たし、新たに種々なる唐製の織物をも舶來し、我が織工に好模範を與へしことなるべし。今正倉院寶庫又は法隆寺等に傳はれる織物には、日本製と認むべき各種の錦裂其の數甚だ多く三四種より十種に至る色糸を組み合せ、鳥獸草花の模樣を造り、或は金銀糸を交へ眞珠を織り込み、又は綴織の巧を

用あたり。

染工に至りては纈纈、萬纈、夾纈等の巧夙に發達し、天智天皇の朝既に國産として外國の使人に贈遣せしことあり。纈纈は糸を以て繪を絞り、これを染めしものなり。萬纈は繪に蠟を以て模樣を畫き、染めて後ち蠟を脱し、文を顯はしゝものなり。この染め方は支那の製より精巧にして、二重三重に各種の色を染め込みしものあり。夾纈は板に模樣を鏤り、其の板二枚を以て繪を夾み、彫り透かしたる分を染むるものにて、これも二重三重に染みて色を加へしなり。

遺品

狩畫錦裂　（第八十九圖）　正倉院寶庫　御物

所謂倭錦にて織り方柔かなり。畫樣は法隆寺に傳來せる支那錦獅子狩の圖を摸したるものなるべきも、種々の新意をも加へて其の樣を改めたり。

山羊文錦裂　（第九十圖）　正倉院寶庫　御物

倭錦にて山羊に草花を配せり。精巧にして圖樣鮮明なり。

霰窠紋錦裂　（第九十一圖）　正倉院寶庫　御物

霰に類する縞を地とし、大小の窠紋を織り出だしゝものにして、意匠斬新なり。

鳥獸草花文錦　（第九十二圖）　正倉院寶庫　御物

山羊鶴草花雲形を縱横に配し、圖樣頗る巧なり。

長斑錦御軾裂　（第九十三圖）　正倉院寶庫　御物

これは軾に用ゐし錦裂にて、其の圖樣甚だ巧にして、段を斜めに設け、其の間に鳥と花との同じ斜なる窠文を配し、各段交互に配色を分ち、長く展べたるものを遠見すれば、斑文の如く頗る美觀を呈す。これ長斑錦の名ある所以なるべし。

鳳形錦御軾　（第九十四圖）　正倉院寶庫　御物

これも軾に作られたる鳳凰を圍らすに葡萄唐草を以てし、其の間に又寶花を配せり。配色頗る美なり。

唐花斜文錦裂　（第九十五圖）　正倉院寶庫　御物

此の錦は十二種の色を配し、織り方甚だ精巧にして、圖樣を斜に取り、其の模樣は唐花（日本にて牡丹に類する六瓣の花文を唐花と稱せり）及び他の草花蝶より成る。此の錦を以て褥の緣となしゝもの正倉院寶庫中に見ゆ。

畫綱錦　（第九十六圖）　正倉院寶庫　御物

其の圖は日光の雲に映じて緣に各色相重りて濃淡を顯はすものに擬せるなり。正倉院寶庫中には猶數種の畫綱錦あり。

花鳥文夾纈机褥　（第九十七圖）　正倉院寶庫　御物

青綠黃茶色等を交へし夾纈にして、其の模樣寶花水禽雲形より成る。圖は左右同形なり。

鳥獸草花文夾纈屏風　（第九十八圖）　正倉院寶庫　御物

これは夾纈にて張れる屏風の一扇にして、樹と鹿とを染め出だせり。他の五枚は花鳥の類なり。

鳥獸草花文萬纈屏風　（第九十九圖）　正倉院寶庫　御物

こゝに出だせるは屏風の二扇にして、大形の染物なり。圖樣は頗る奇異にして、故らに變化の巧を弄して物の大小遠近に關はらず、主眼物たる花喰鳥象の類を大形に中央に据ゑ、笙を吹き鳳を舞はせる人物、騎馬にて鹿を狩れる人物等は小形にして、色をも暗からしめたり。この圖は日本及び支那の式にあらず、恐くは印度樣を取りしものなるべし。

鳳文萬纈裂　（第百圖）　正倉院寶庫　御物

鳳文の描き方線細く形よく整へり。

龜甲花形萬纈袋裂　（第百一圖）　正倉院寶庫　御物

袋の裂なるべし。羅に龜甲花形を染めたり。

彩色裝飾品

當代繪具を以て器物を粉飾するを彩繪と稱せり。繪畫の部にいひしが如く、當代畫工司の畫師は專らこれ等の粉飾を

業とせしものなれば、色の配合模様の描き方極て巧にして、其の美麗なること後世の及ぶ所にあらず。且其の繪具は容易に剝落せず。又薄く面に漆を施しゝものもありて、一千百餘年の久しきに耐へ、今日猶新調の物を見るが如し。

遺品

絲地彩繪筥　（第百二圖）　正倉院寶庫　御物

木製の小筥にて地絲青にて塗り、花鳥の模樣を畫けり。裏は錦にて張りたり。

蓮花形彩繪盤　（第百三圖）　正倉院寶庫　御物

蓮花形の盤にて一對あり、佛器として供物を盛りしものなるべし。每瓣表裏とも極めて美麗なる彩繪を施せり。其の圖には菩薩あり、伽陵頻伽あり、鳥獸草花あり菩薩の天衣、鳳凰の羽翼の如きは木葉を以て巧に其の形に模擬せり。

花形彩繪臺　（第百四圖）　正倉院寶庫　御物

縞柿にて造り、緣と脚とは蘇芳色に塗り、金銀の泥畫を施せり。甲板並に脚の形狀彩色畫に對して、よく調和の宜しきを得たり。

八角彩繪臺　（第百五圖）　正倉院寶庫　御物

十數種の極めて濃厚なる色を以て緣及び脚部に寶花を畫けり。花形の緣は盡く畳綱にして、一段の美觀を呈せり。

第二編　桓武天皇時代より鎌倉幕政時代に至るまでの美術の變遷

第一章　桓武天皇時代

第一節　當代美術に及ぼせる社會の情況

前代の末葉に方りてや、昇平の久しき、上下恬安に忸れて、侈靡の風おのづから之れに從ひしに、又唐土侈麗の觀を慕ひ、其の虛文を輸入せしかば、驕奢益募りて、風俗亂れ、綱紀弛廢せり。加ふるに朝廷篤く佛教を崇信し、洽く勸奬し給ひて、或は佛寺に鉅萬の財を寄せ、或は不急の土木を起して堂塔伽藍を建立し、租稅を消糜せしかば、國帑空乏を告げたるのみならず、政敎の別全く混じて、僧侶いたく跋扈し、朝政に參し、宮禁に出入し、驕放專恣、忌憚する所なかりき。光仁天皇登極し給ふや、精勵治を圖り、多く煩苛の法を除きて前朝秕政の匡正を力め給ひしも、人心の浮華、社會の頽敗未だ容易くは匡濟せられざりき。されど是れより反動の氣運日に熟して、時勢將に一變せざるべからざる兆を現はせり。此の時に際して桓武天皇位に卽き給へり。天皇天資英邁なりき。故に時の趨勢に察して、益革新的思潮を鼓吹し給ひ、銳意積習弊政を肅清し、且乾綱を振ひ坤維を肅べんとて、恣唯暴戾屢國家の安寧を害せし蝦夷を征し、東陲平かなるに及びてや、乃ち都を山城に遷して（西紀後七百九十四年）新たに平安京（今の京都なり）と號し、經國の洪猷を鞏め、萬世不易の基を建て給ひき。是に於てや時勢全く變轉し、人心愈奮激活動して、社會の面目頓に更まれり。以ふに遷都は帝が施政の便運輸の利に稽へ給ひし結果ならんも、又蒼生を南都因習の積弊より救濟し、其の心懷を一新して、更に大業を恢弘せんの宏謨に出でたらんこと疑はれじ。故に遷都は民に新希望新理想を與へ、典章文物又其の雄圖に伴ひて益煥發せしのみならず、新京は南都の制を擴張し、唐都長安の制を參酌して經營せられしかば、其の規模頗る宏壯にして、皇居及び大極殿豐樂院其の他夥多の官省曹廳の如き、又皆悉く壯麗を極めたり。故に諸國の名工鉅匠此處に聚居して、各其の妙技を競ふを得て、建築術裝飾術をも進歩せしめたり。又奠都後離宮後院の設け各所に起り、搢紳はた此等に摸し、第宅の外、京洛四邊の地をトして別墅山莊を造營し、鑾輅の臨幸を仰ぐも少なからざりき。而して此等の院宮及び別業は、何れも疊石穿池の妙、花木泉石の美を以て、其の名今に高し。園藝術はた遷都に伴ひて未曾有の發達を爲しゝや知るべし。

桓武天皇の後平城、嵯峨、淳和、仁明、文德の諸帝又皆叡聖の資を稟け、且文藝に長じ、政治に力め、或は學校を興して經學を奬勵し、或は唐に參して格式典禮を撰修し、或は殖産興業に運輸交通に、只管大業の恢張を企圖せられ給ひ、英俊特達の士亦輩出して、獻替する所多かりき。故に災害疾疫數ありしも、奎運常に隆々たりしのみか、當時の一大文明國たる唐朝の文物絶えず輸入して、人智を啓發し、人心を作興せしかば、文化はた駸々と行はれたり。

案ずるに前代以來我れと使槎往來せる者、獨り唐のみならず、渤海（今の滿洲及び東蒙古の邊に當る）あり、新羅ありきされど當時外より我が文明を促進せしもの、唐に如くはなかりき。時に唐は政綱既に紊れて、藩鎭内に跋扈し、吐蕃外に窺ひ、且安祿山の變あり、騷擾紛々、政弊具に極まれり。故に其の制度に資する所なかりしも、韓愈白居易を始め、有名の文士朝野に充ちて、尚文の風なほ熾に行はれ、高僧名衲多く出て、玄理妙法を顯揚し、李白杜甫の詩、李思訓王維の畫、張旭顏眞卿の書の如き又相去ること遠からざりしかば、文學宗教美術等依然盛觀を呈し、文學の如き亂離の刺激に却りて異彩を放ちたりき。而して此の際たる文華や、我が歴代舉朝の嚮慕嘆賞せし所、其の影響の大なる異むに足らんや、況や嵯峨天皇の如き、唐風景慕の餘、或は衣服禮儀を彼れに准ぜしめ、或は宮殿の障子に彼の國の聖賢及び昆明池荒海の圖を畫かしめ、民をして親しく唐の文物を睹堵せしめ給ひしをや。さはれかく唐風を欽慕せしも、前代に於ける如く全然唐風摸倣の結果を來さゞりき。是れ蓋し時勢一變人心爲めに活動し、故態舊棄に局促して、漫然他の糟粕を嘗むるを屑とせず、且や滔々たる革新の思潮に國民の自覺心增進し、自他の國性及び國體を意識して、漸く國粹を發揮せんとするに至りしに因らんも、亦唐の文華を我れに融和して、更に爛熟たらしめし、高僧の勞力にも因らずんばあらず。蓋し當時入唐の僧侶は概ね才器非凡、識見高邁、又從來流布の佛教に甘んぜず、大乘祕奥の妙理を窮めんがため、入唐の志念を起しゝ者、曩日入唐求法僧の比にはあらざりき。故に一とたび法を唐僧に聽くや、忽ち其の蘊奥を悉くして、更に創見を闡き、文華燦然目を眩するものあるも、よく其の眞相を看取して、國家を利し衆生を導きしこと大なりき。就中才氣唐人を凌ぎ、名聲唐土に藍きし最澄（傳教大師）空海（弘法大師）を以て然りとす。是れより先き本邦の佛教に三論法相華嚴律、成實、倶舍の六宗あり、各朝廷の擁護を恃みて隆盛を致せり。されど此等權小の教を外にして、未だ一乘幽妙の義を顯揚せるものなかりき。最澄出でて獨り思を三觀の理に潛め、入唐して天台未渡の經籍を求め、其の奥旨を求めて歸朝するや、三諦一如の妙教始めて我れに布き、比叡の伽藍は輿衆の仰ぐ所とはなりぬ。空海は最澄と世を同うし、延曆二十三年（西紀後八百四年）又行を同うして入唐せり。恰も唐には天台教淅江の天台山を本山として、其の勢十道に盛に、天竺僧金剛智、善無畏、不空等布教の結果、密教はた隆盛の頃なりき。而して前者は最澄の傳へし所、密教の祕鑰は全く空海の握る所とはなりつゞさはれ最澄は支那天台に更に密禪の二宗及び菩薩の圓戒を加へ、空海は他の密教家の撰に倣はず、密教の爲めに教相判釋を爲し、佛教全體の密教に對する關係を知らしめ、佛教全體の究竟する所密教に在ることを明かにせり。故に最澄の天台空海の密教は支那の天台、印度支那の祕密教と同一視すべきものにあらで、更に善美を盡し、進歩したるものなりといふべし。かく二宗の教理は高遠靈妙にして、よく時人の新信仰たるに適し、高德之れを剛揚して、眞雅、實慧、圓仁（慈覺大師）、圓珍（智證大師）等の名僧益、弘演し、政治と分離並行して國家を鎭護し、除災消厄を旨とせしこと、恰も當時の趨勢に適合し、且政治の中心となれる新京に勃興して、頗る皇室貴權の崇敬を得たれば、其の盛なる旭日の天に冲するが如く、世人の歸依せること、草木の之れに嚮ふに似たりき。加ふるに最澄空海等神佛同體説を大成して、或は神號と佛名とを混ぜしめ、或は神祇官にも誦經を用ゐるに至らしめ、上下敬神の心を移して、佛法崇奉の軌轍に就かしめたるのみならず、神社に神宮寺を設け、佛寺に鎭守の神を祭りて、神社佛寺の兩建築にさへ、大變更を起さしめつゝ、殊に密教の如き他の美術にも亦頗る影響せるを見る。蓋し眞言密教は顯教（驛迦の説法は悉く隨他意方便的にして、識知し易きが故にかく名づく。法相、三論、天台、華嚴等皆然り。）の如く、迷情を拂ふを旨とし、言語道斷、心行處滅を至極とする所謂遮情門ならで、法身大日如來（顯教の教主釋迦の應身なるに對して、密教の教主大日如來を法身といふ。應身とは應機接物の身なるにいひ、法身とは理法を聚集したるをいふ。）の妙德を現示せる表德門なり。故に其の根本義に表象必須の理存して、美術と關係深きのみならず、法身大日如來は理智の二德を有し、此の二德より恒沙の諸尊を現じて、利生化物の益を爲し、此等無量の諸尊各、四曼相を具して無邊際なるを以て、此等の標幟として所謂種々の曼荼羅及び寶器等を多作せしめて、大に美術界を賑はしたり。而して密教は顯教の如く空を以て實理とし、萬法之より生起すとの立説に反して、地水火風空識の六大（そが普遍の德に約して大といふ。）を萬有の本體となし、六大卽大日法身の理智の德故なるが故に、一切の諸法悉く是れ大日如來の妙德ならざるはなしとす。而して此の六大の上に現ずる緣起所生の狀無量無數なるも、概括するに四類を出でずとし、無限の六大各、無礙圓融すれば、これはた相互に交渉攝入せざるべからず、卽ち諸佛の四曼は吾人に具足し、吾人の四曼は諸佛に完

備せざるべからすと說く。故に密敎の多作せしめたる作品は（多くは曼荼羅と謂ふ畫圖なり。曼荼羅とは一法に萬德を圓滿具足すとの義、卽ち個物の圓滿平等相を具へたるをいふ）自ら含蓄的にして、一種莊重森嚴の致を帶び、布置排列に愼密精緻を極めたるを見る。惟ふに密敎の影響や、美術殊に繪畫を全然標幟的たらしめ、儀軌と謂ふ標相の範型を以て作家の思想を羈束し、品題を褊狹ならしめし失なきにあらず。されど高遠深邃なる思想表顯の理義を明かにし、其の方法形式を示して、佛畫佛像の類を富まし、又個相中平等圓滿相の具備するを敎へて、一種の趣致形相を創せしめしが如き、其の功として一般の認むる所なり。さなきだに繪畫彫刻の技は報恩濟度若しくは觀想の標的たらしめんが爲めに、佛法修業中の一部の業とせられ、僧徒之れを兼修しつゝに密敎更に之れが必要の理を證して皷舞せるや此の如し。加ふるに空海、最澄、圓珍等の名僧此等の技に通じ、空海はもとより圓行、常曉、圓載の諸僧唐より夥多の繪畫佛像、寶器、道具（密敎灌頂用の）等を齎持し、又己れが歸依する高僧名衲の像を描きて壁間に懸くること、當時緇林の間に行はれ、且淸和天皇貞觀年中に勅して一萬三千の畫佛像七十三鋪を宮中太政官及び全國に頒ち、之れが需要を熾んならしめ給ひしが故に、佛畫盛行を極めたりき。而して僧侶の描きし諸曼荼羅因果報の畫圖が、能く衆生を化度し利益を與へしより、貴族高門の人々はた之れに倣ひ、餘暇あれば繪畫を作りて以て功德とせしかば、描畫漸く上流社會に流行し來たれり。加ふるに唐畫の美なる見る者をして摸倣の念を促すあり、繪畫と根元を同うせる書道の蔚興して之れに造詣せる名手の概ね餘力を畫事に灑ぐあり、僧徒の餘力ある者山水花卉、人物鳥獸等をも描き、之れを寺院僧坊の屛風障子に貼して裝飾とするものありて、作家品題の全く類を異にせる、非宗敎畫の一新派を現出するに至りぬ。畫工司の畫所となりて、自然の物象を宮殿の裝飾に描くに至りしが如き、之れが結果の一例なり。恰も此の新畫派の如く、漢學亦當代に佛敎と離れて、獨立的發展の徑路に就き、大に勃興するに至りぬ。是れ蓋し大學寮に明經、紀傳、明法、算の四道を設け、歷代の天皇學を好みて、或は學田を大學寮に寄せ、或は生徒に漢語を習はしめ給ひ、博學鴻識の士頻々輩出して、才を鬪はし、書を著し、王氏名族又競うて發舍を設け、子弟を薰陶せし結果なり。而して漢學の獨立及び之れが普及は、漢文漢詩の盛行を喚びて、詞辭想像を富贍ならしめき。殊に漢詩の如き白氏文集の舶載に會ひ、且賦詩を考課に充て、禁中權門にも常に詩會ありければ、士人爭ひて之れを學び、遂には詩意を美術に寓せしむるに至りぬ。是れより先き漢字を用ゐて國語を寫すの不便なるより、漢字の偏傍を省略せる片假名の發明ありしも、漢學盛に、漢文行はるゝ折とて、洽く用ゐられざりき。されど漢字は點畫複雜なれば、之れが用の盛なるに隨ひ、自然そが草體文字のみ重用せられしが、此の草體漸々變じて一種簡易なる字體とはなれり。之れを平假名といふ。而して空海之れを當代に今樣のいろは歌に綴るや、其の字體略一定し、僅々四十七文字だに知了せば、いかに複雜紛糾せる思想感情をも、自由に表顯せらるゝを得たり。是に於てや國文學俄然蔚興し、そが奔放飛躍の餘勢大に美術に影響するに至れり。而して此の粲然たる國文學と經緯して、所謂藤原攝關時代以降の文化の素を織成せる音樂の如きも、亦當代に蘊育せられたるもの頗る多し。是れ蓋し唐風我が上下に薰染し、其の文華社會の四隅に彌るや、彼れが音樂をも傳承し、之れを改作修補せしのみならず、或は其の萃を拔きて新曲とせる妙手少なからざりしと、我が國固有の樂を始め、神樂、催馬樂、東遊等の如きも大に修整せられしとに因るべし。而して此等の音樂を儀式、神事、齋會、宴遊等に用ゐしこと、當代風俗の著例なり。之れを要するに當代は僅々百有餘年間に過ぎずと雖も、前代末葉の弊風を刷新し、頻々輸入したる唐風文物を我れに融化し、以て大に制度文物等を更張發達せしめんと力めし時なりき。換言せば前代の醇疵內外の長短を分別し、意識し、長は益燦發せしめ、短は愈補足扶掖して、以て國粹と爲し、之れを將來に大成發揮せしめんとせしこと、當代に著き思潮なりけり。概して當代美術の活動的たり、含蓄的たり、獨創的たる豈故なしとせんや。

第二節　當代美術の變遷及び特質

前にも言へるが如く、桓武天皇の都を山城に遷さるゝや、我が國の嗜好習俗は自ら一轉化を來たし、二百年來專ら崇重欣仰せし支那の文物も、遂に此の神洲の風土氣習に適應せざるの感を起し、過半は頹舍廢園と共に奈良の舊都に遺留して、平安の新都には文藝美術の如き、漸く自國固有の風尙を揚ぐるに至れり。然れども未だ遣唐使は來往して兩國の交聘絕えず、空海傳敎等の高僧の、新たに唐朝の宗義を齎らして歸るあり、大內裏の造營法律式典の制何れも唐に擬せざるはなし。但し此の時代に及びては、支那の事物を取るや、これを日本化し、其の大體の規模は唐式に據るも、皆多少の改修を加へざるはなし。美術に於ても亦唐代の新樣を取りたれども、筆端刀鋒には自ら日本固有の溫雅優美なる趣致を出だし、彩色の如きも沈鬱にして然かも妖艶ならざる配合を用ゐたりき。

今桓武天皇時代の美術の樣式を他の各時代に比較するに、特に莊重なる風趣ありて、氣宇の高邁なるを見る。是れ當時

東洋に古今の隆盛を極めたる支那に交り、その四夷八蠻を循へ、世界の富を集めて威儀を莊嚴せし唐朝の文華を慕ひ、殊に此の時勢に相應せる眞言密教の教旨に鑄陶せられしを以て、自らかくは莊重なる風貌を顯はすに至りしものなるべし。當代に行はれし壯大にして綺縟なる語を聯ねたる駢儷體の文章、雄大にして嚴重なる音調を具へたる唐樂の如き、亦何れもその趣の同じきを見るべきなり。

技術の巧に於ては、前に聖武天皇時代の大發達あり、材料豐かにして技術の練磨を重ねたれば、如何なる精微の作をもなすべからざるにあらざれども、當代人心の傾向は凡て巧緻なる細技を喜ばず、諸般の製作は局部に意を用ゐるよりは、全體の結構を善美ならしめんことを欲し、技術の巧を示さんよりは、直ちに精神氣魄の物に顯はれんことを求めたりき。されば佛像佛畫の如き一見其の作は粗雜なるが如き觀あるも、其の良作に至りては、風貌靈活にして神采人を射るの趣を出だせり。

第三節　繪畫

桓武天皇時代の繪畫は前代に比較せば、明かに進歩を顯はしゝのみならず、日本繪畫の獨立せる樣式は、始めて此の時代に胚胎せしものといふべきなり。當代繪畫の殘存せるものは、東寺七祖像、高野山勤操僧都像並に高野山明王院の赤不動尊像、三井寺の黃不動尊像等に過ぎざれども、その作圖は何れも前代に比ぶれば、趣味を增し、活動加はり、運筆自在にして、其の描法の鋭利なるものは尖刀を以て刻めるが如く、飄逸なるは烟縷の風に飜へるが如く、殊に彩色の如きは暈染の法大に發達して、巧に濃淡を作り、又各種の混合色を施し、その畫面をして沈著にして優美ならしめたり。この進歩は全く我が獨立の發達にして、同時の支那畫にもかゝる特異の進歩は認むること能はざりしが如し。

今又聖武天皇時代より當代に亘れる畫蹟を鑑し、これを後世の畫風に對照するときは、自ら二派の畫流の此の時に濫觴せるを見る。卽ち一は古代の支那及び朝鮮畫に由りて、一派木邦風の筆法を創せしものにして、後世此の一派より土佐及び春日などの畫風を擧ぐるに至れり。又一は唐朝の畫風を受けて、當代の初より平安に於て專ら唐式の筆意を畫きしものにして、卽ち後世巨勢及び宅間の畫統をなすに至りしものなり。甲は古く日本に起りしものなれば倭畫派と稱すべく、乙は近く唐風を學びしものなれば唐畫派と稱すべし。倭畫派の方は筆を斜に操り、輕儁にして自在なる運用をなし、彩色は一般に淺くして、配合も淡泊なり。又唐畫派の方は筆を眞直に立て、端正にして細大の變化なき描法を用ゐ、彩色も亦倭畫に比ぶれば、濃厚にして各種の色を多く並べ用ゐたり。

當代名僧の支那に渡りしものは、毎に多くの佛畫を齎して歸れり。今其の請來目錄の傳はれるもの一二を數ふるも弘法大師は大同元年に各種の大曼荼羅畫、祖師の畫像等十種三十六幅を請來し、其の中には一丈六尺の畫十四幅あり。同行は承和六年に釋迦觀音各種の畫像十二品、圓載は貞觀七年に佛像祖師影廿七品を將來せり。されば、これより以下の時代に於て佛畫を作るもの、皆模範をこの將來の畫像に仰かざるはなく、殊に眞言宗は造像の法を重んじ嚴密なる圖式を傳ふ。弘法大師此の道の大匠として、普く圖像を輯め、又其の法式の書儀軌を傳へたり。されば造像の法亦此の時代に於て整頓し、永く儀型を後世に遺したるなり。

當代の畫家も佛像を畫くものと、其の他鑑賞的の畫を作るものとは、自ら其の業を分ち、佛畫は多く僧侶又は佛寺に緣故ある畫家の手に成り、鑑賞的の畫は文藝音樂と等しく上流社會に藝術の一として玩ばれ、其の中に專門家を出だすに至りき。又前代に盛なりし裝飾畫家は、當代の半ば頃よりは其の業稍衰へたり。是れ近く唐制に倣ひて造營せられし大內裏には、其の屛障を裝飾するに模樣を以てせず、これに代ふるに專ら圖畫を以てし、紫宸殿の障子には聖賢の像を圖し、淸涼殿には昆明池（昆明池は西域にある靈沼なりといふ）荒海の圖、又唐人騎馬打毬圖、白澤王鬼を斬る圖などを畫かれ、これより一般の室內裝飾などにも專ら純粹の圖畫を用ゐることとなりしが爲め、彼の專ら華文を畫きし裝飾畫家は、其の業自ら衰へて僅に器物類の裝飾にのみ從事するに至れり。平城天皇の大同三年に畫工司は內匠寮に合併せられて、名も畫所と改めらる。これ卽ちその一變化として見るべきの徵候なり。

當代畫家の名を傳へし人々は、佛畫の筆者としては、僧最澄、僧空海、僧智泉、僧貫慧、僧圓珍、僧光空等にして、鑑賞畫の筆者としては百濟河成、巨勢金岡等なり。

僧最澄は我が國天台宗の始祖、比叡山延曆寺の開山にして、傳敎大師と諡せらる。最澄畫を善くし、自ら藥師佛の像を布に畫き、これを携へて唐土に航し、又自畫の像を比叡山に留めしといふ。僧空海は卽ち弘法大師にして、入唐して惠果阿闍梨に眞言密敎を受け、歸朝の後大に此の宗を登揮し、遂に高野の地に金剛峯寺を創す。空海素より博識宏才文學諸藝

に通達し、圖像の法を傳へ、後世造佛の模範を垂れしのみならず、又自ら許多の畫を作る。卽ち鎭西に於て少貳某の爲めに千手千眼の像外十三尊の畫像を畫き、高雄山神護寺に於て宇佐八幡の神影を寫し、又神泉苑に雨を祈りて善女龍王の像を寫す等、其の他一代の間に各種の佛像曼荼羅類を畫きしこと少なからず、現に高野山普門院に藏する其の師勤操僧都の像は、正しく空海の筆と認むべし。又僧智泉は空海の姪にして、初め神護寺後ち東寺に居り、弘仁中灌頂の二尊、一は天冠を捧ぐる圖、一は寶瓶を捧ぐる圖を畫きしといふ。僧實慧は空海の弟子にして、河內の觀心寺を創し、熾んに密敎を布く。これ亦畫を善くし佛像を畫きしといふ。僧圓珍亦弘法大師の姪にして、入唐して顯密二敎を學び、歸りて延曆寺の座主となり、又近江の園城寺に道場を開く。後ち智證大師と謚せらる。一代の間多く不動尊の像を畫き、延曆寺園城寺等に傳へらる。殊に高野山明王院に存する有名なる赤不動と稱する像は、其の作中の巨擘となす。光空は仁明天皇の時の人にて、能く佛畫を畫く。承和中圓珍夢中に感得する所の不動尊を寫さしむ。世にこれを黃不動と稱し、現に近江國園城寺に傳ふ。かく當代顯密二敎の高僧は、皆自ら佛像を畫き、又畫工をして筆を操らしむるも、一々其の圖案を授けしものなり。故に今日遺存する當代の佛畫中には、其の筆は稍熟練を缺くも、圖樣自ら凡を脫し、氣韻極めて高く、奕々たる神采の人に逼るが如きものあるを見るなり。

鑑賞的の畫家中名聲世に高きは、河成と金岡となり。百濟河成は其の祖先百濟より歸化せし人なり。繪畫に巧にして又武藝に長じ、仁明文德の二朝に仕へて百濟朝臣の姓を賜り、播磨介に任ぜらる。屢宮中に侍して畫圖を作る。寫す所の古人の像及び山水草木皆精妙にして眞に逼るといふ。此の人の傳記に就きては、一二著名なる話あり。河成が家に使傭せる小僮曾て逃走し、百方搜索すれども得ず。依りて或家の下僕に囑してこれを探らしむ。僕の曰く、命を奉ぜんされど未だ其の面貌を識らざるを如何にせんと。河成帖紙を展べ仔細に小僮の顏面を寫し、これに據りて東西の市場都人輻輳の地に求むべしと。僕これを懷にして市に行き徘徊してこれを窺ふに、偶小僮の走り來るものあり、密かに圖を出してこれに照らすに、實に相似たり。卽ち捕へ來りて河成に示すに、果して其の僮なりしといふ。又河成と同時に飛驒の內匠といへる建築の名工あり。或時河成と互に其の得意の能を誇り、其の技を鬪はさんと約せり。內匠河成に告げて曰く、予が家に小堂を造れり、敢て來觀を煩はし、且壁土に君が名筆を揮はれんことを乞ふと。河成諾して內匠が家に至りて

第百七圖　百濟河成筆四天王畫像

に通達し、圖像の法を傳へ、後世造佛の模範を垂れしのみならず、又自ら許多の畫を作る。卽ち鎭西に於て少貳某の爲めに千手千眼の像外十三尊の畫像を畫き、高雄山神護寺に於て宇佐八幡の神影を寫し、又神泉苑に雨を祈りて善女龍王の像を寫す等、其の他一代の間に各種の佛像曼荼羅類を畫きしこと少なからず。現に高野山普門院に藏する其の師勤操僧都の像は、正しく空海の筆と認むべし。又僧智泉は空海の姪にして、初め神護寺後ち東寺に居り、弘仁中灌頂の二尊、一は天冠を捧ぐる圖、一は寶瓶を捧ぐる圖を畫きしといふ。僧實慧は空海の弟子にして、河內の觀心寺を創し、熾んに密敎を布く。これ亦畫を善くし佛像を畫きしといふ。僧圓珍亦弘法大師の姪にして、入唐して顯密二敎を學び、歸りて延曆寺の座主となり、又近江の園城寺に道場を開く。後ち智證大師と謚せらる。一代の間多く不動尊の像を畫き、延曆寺園城寺等に傳へらる。殊に高野山明王院に存する有名なる赤不動と稱する像は、其の作中の巨擘となす。光空は仁明天皇の時の人にて、能く佛畫を畫く。承和中圓珍夢中に感得する所の不動尊を寫さしむ。世にこれを黃不動と稱し、現に近江國園城寺に傳ふ。かく當代顯密二敎の高僧は、皆自ら佛像を畫き、又畫工をして筆を操らしむるも、一々其の圖案を授けしものなり。故に今日遺存する當代の佛畫中には、其の筆は稍熟練を缺くも、圖樣自ら凡を脫し、氣韻極めて高く、奕々たる神采の人に逼るが如きものあるを見るなり。

鑑賞的の畫家中名聲世に高きは、河成と金岡となり。百濟河成は其の祖先百濟より歸化せし人なり。繪畫に巧にして又武藝に長じ、仁明文德の二朝に仕へて、百濟朝臣の姓を賜り、播磨介に任ぜらる。屢宮中に侍して畫圖を作る。寫す所の古人の像及び山水草木皆精妙にして眞に逼るといふ。此の人の傳記に就きては、一二著名なる話あり。河成が家に使傭せる小僮曾て逃走し、百方搜索すれども得ず。依りて或家の下僕に囑してこれを探らしむ。僕の曰く、命を奉ぜんされと未だ其の面貌を識らざるを如何にせんと。河成帖紙を展べ仔細に小僮の顏面を寫し、これに據りて東西の市場都人輻輳の地に求むべしと。僕これを懷にして市に行き徘徊してこれを窺ふに、偶小僮の走り來るものあり、密かに圖を出してこれに照らすに、實に相似たり。卽ち捕へ來りて河成に示すに、果して其の僮なりしといふ。又河成と同時に飛驒の內匠といへる建築の名工あり。或時河成と互に其の得意の能を誇り、其の技を鬪はさんと約せり。內匠河成に告げて曰く、予が家に小堂を造れり。敢て來觀を煩はし、且壁土に君が名筆を揮はれんことを乞ふと。河成諾して內匠が家に至りて

第百七圖（百濟河成筆四天王畫像）

(後百力國 合掌向孔雀王菩薩)

れを見るに、方一間の小堂にして四面の扉悉く開かれたり。やがて南方より内に入らんとするに、其の扉忽ち閉づ。依りて廻りて西より入らんとすれば、西方の扉閉ぢて、南方の扉自ら開く。北に廻り東に旋るに開閉前の如く、遂に入ることを能はず。内匠これを見て大に笑ふ。其の後ち河成内匠を己れが家に招く。内匠前日の報あらんことを慮りて、行くことを肯ぜざりしが、使者數度に及びて止むことを得ずして河成の家に至り、廊の遣戸を開けば、内に死人の臥せるものあり、其の體黑色に變じ膨脹して腐汁流れ出づ。内匠大に愕き走り逃げんとす。河成その樣を見て大に笑ふて曰く、何ぞ恐るるに足らんやと。内匠再びこれを熟視するに、死屍は障子に畫きしものなりしといふ。これをもて河成が寫生に巧なりしことを知るべきなり。されど河成の畫蹟今に現存せるものなし。唯もと高山寺に傳はりて今東京柏木氏の藏なる四天王の扉畫なりしと思はるゝ四天王の畫像あり。其の一圖の裏書に「以四天王寺第二傳木寫之新羅國河成筆」とあり。今こゝに其の一圖第百七圖を掲ぐ。素書にして彩色を略したれども、其の筆致に由りて河成の作を窺ふことを得べきなり。

巨勢金岡は巨勢中納言野足の裔にて、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐天皇の五朝に歷事し、采女正となり、從五位下に叙せらる。天性繪畫に巧にして人物、山水、鳥獸、草木皆精妙ならざるはなし。勅を奉じて大學寮の先聖先師九哲の像を畫き、又御所の南庇東西の障子に、弘仁以後の鴻儒の像を畫く。共に有名のものなり。（太平記卷十二大内裏造營の條に賢聖の障子をば紫宸殿に被立ける畫圖は金岡が筆とあれどこれより前の史籍に徵據なし。）又宇多天皇の讓位の後御室の仁和寺にありて、金岡に命じて馬を殿の壁に畫かしむ。その畫眞に逼れり。其の頃夜夜近傍の田を荒し稻を嚙むものあり。諸人怪み居けるに、後ち壁畫の馬蹄に泥あるを見て、其の所爲たることを知り、其の眼睛を劇りしより、田圃を荒すこと止みたりといふ。又清凉殿朝餉の間の障子に駿馬の圖を畫きけるに、毎夜出でて萩の戸の萩を嚙みければ、勅して其の馬を繫ぎたる體にかき改めさせければ、遂に止みたりといふ。固より奇怪の說なれども、金岡が妙技を證するに足る。金岡の畫はかく寫生に巧なりしのみならず、濃淡を以て遠近を分つに巧なりしと見え、有名の學者大江匡房金岡の畫を評して、金岡は山を疊むこと十五層なるも、曾孫弘高は纔かに五六層に過ぎずといへり。金岡は又作庭の法に通じ、神泉苑監に任ぜられ、佳絕なる景色を造り出せりといふ。唯憾むらくは金岡が畫蹟と稱するもの今日に傳はらず、世に其の筆なりといへる佛畫類少なからざれども、何れも畫樣新しくして當代のものと

は認むべからざるを。

この他當代に畫名ありし人少なからず、殊に平城天皇は丹青を好ませられ、親ら僧正善珠の形像を圖して秋篠寺に置かれ、又文學を以て當代に有名なりし小野篁も繪畫に巧にして多くの地藏菩薩の像を畫きて諸寺に納めたりき。又源信は嵯峨天皇の第七の皇子なり、性風流を好み博く學藝に渉り、圖畫に巧にして殊に馬形を寫すに妙を得たりしといふ。

遺品

眞言七祖畫像　　京都　東寺藏

眞言宗を唱へし龍猛龍智、金剛智不空善無畏、一行惠果の七祖の畫像にて、各長さ八尺三寸、幅六尺五寸あり。淡彩畫にして上に木筆飛白の梵漢字の題名下に讃語の文字あり。此の七幅の內龍智龍猛の二幅は、弘法大師の筆、他は唐の畫工李紳の筆にして、唐に於てこれを畫き、大師携へて歸朝せしものなりといふ。又題名と讃語とは共に弘法大師の筆なり。固より密畫にあらざれども、筆致雄渾にして、祕密莊嚴の大威儀を顯はし、殊に龍智龍猛の二幅は、權作たるの品致を具へたり。（此の七祖像慨むらくは畫面剝落し且色暗くして寫眞板に上すことを得ず。）

勤操僧都像　（第百八圖）　　紀伊　高野山普門院藏

勤操僧都は京都西寺に住し、空宗を唱へ又密法を說きし名僧にて、弘法大師の師なり。天長五年僧都示寂の翌年、弘法大師自ら其の影像を畫きしものにて、上に同筆の讃あり。淡彩にして密畫にあらざれども、筆致頗る適逸にして氣品自ら高し。

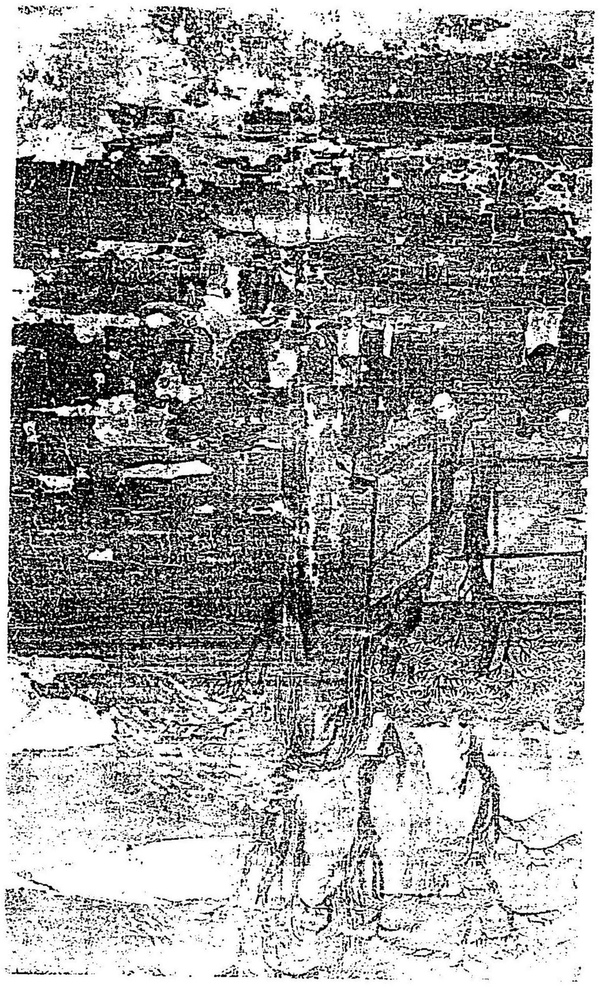
赤不動像　　紀伊　高野山明王院藏

此の赤不動像は、智證大師橫川の谷に明王の影現せしを、直ちに筆寫せしものと稱し、世に最も尊信せらるゝ所の像なり。圖樣は不動明王手に俱利伽羅とて龍の纏へる劍を持ちて巖上に座し、矜羯羅（こんがら）、制多伽（せいたか）の二童子左右に侍す。その明王の身より熾んに立ち騰る火燄四邊を照らして、童子も巖石も皆これに映射せられ、全幀赤色をなし、神采奕々として殆んど正視すべからざるの趣あり。實に尋常畫工の作にあらざるなり。

第百八圖（弘法大師筆勤操僧都像）

蒙古人圖（忠武王和林遺蹟）

第百九圖（山水屏風圖）



第百十四図（十一面観音菩薩像）

山水屏風圖　（第百九圖）　　京都　東寺藏

山水屏風は眞言宗に於て灌頂の時阿闍梨の背後に立つる屏風にして、靈山を圖するを例とす。この東寺に傳へしものは、山中に廬を結べる隱者ありて、こゝに貴紳の來訪せるが如き樣を圖せり。寺傳に弘法大師唐より將來せるものと稱すれども、山水草木の趣圖中人物の服飾など日本樣にして、其の筆の柔かにして優美なる、亦明かに倭畫の特徴を表はせり。憶ふに當代末期の作なるべし。

十一面觀音畫像　（第百十圖）　　伯爵　井上馨藏

此の畫はもと大和國某寺にありしものにして、今井上伯に珍藏せらる。實に我が國古佛畫中最優最美の絶作にて、氣品の高邁なる、筆致の靈活なる、彩色の富麗なる、一たびこれを展ぶれば神采四邊に充ち、大光普照の妙相さながら觀世音の出現に遇ふが如く、邪念忘想忽ちに霧散し、威靈の身心に透徹するを覺ゆ。恐くは凡庸畫工の作にあらざるべし。此の畫の時代に就きては鑑識家各說を異にし、古きは臺徴の筆なるべしといひ、又金岡などの作なるべしといふ。其の彩色の十分調和を得て、且肉身には紅玻璃樣の色を用ゐたる、又多くの截金模樣を置きたる、又光背天蓋に龍膽唐草を裝飾せる、其の時代を徴すべき證據は盡く一致するものあり。殊に此の如き氣魄あり、品位ある佛畫は平安の初期より中期に至るまでの間にあらざれば、他に作り得べき大匠を求むることを得ず。其の時代を知ること敢て難きにあらざるべし。

第四節　彫　刻

造像の法嚴密にして形相の種別に精しき眞言密敎の興隆に由りて、佛像の彫刻は當代に入りて面目を一新せり。其の面相印象持物より各部の莊嚴に至るまで、一千年來圖像の模範は多く此の時に作り出だされしものなり。且つ當代の作たる特り形相の正しきのみならず、其の面貌姿勢にはよく諸佛の性格氣象を表はし、殊に密敎のものは何れも非凡なる大威儀を具へたり。是れ前述せるが如く、これが敎旨の自然の結果なるべしと雖も、多くは高德明知識の自ら刀を下し、又は意匠を授けしものにして、凡庸なる技術者の手に成りしものにあらざるが故なるべし。凡て當代の作たる一般に莊大の趣を有し、その刀を用ゐること粗放にして粗畧を免れざるも面貌手足姿勢の如き要點に於ては深く意を

用ゐて威靈の人を感ぜしむるに足るものあり。

聖武天皇時代に於ては造像に銅を始め乾漆塑などの材料を用ゐしが當代の作は木彫のもの多けれども塑及び乾漆の作も亦少なからず、憶ふに塑及び乾漆の作は當代の末までは其の技工の命脈を維持せしものゝ如し。

當代佛師として其の名を傳へたるものは、武藏村主多利丸、高男麻呂、志比古麻呂、僧興運等なり。多利丸は紀伊國能應寺の十一面觀音を造り、高男麻呂は多武峯の鎌足公の像を彫し、志比古麻呂も亦多武峯の佛像を作る。又僧興運は長谷寺の佛像を作る。其の他弘法大師は造像の軌範を立て、各種の圖式を傳へしのみならず、又自ら刀を執りて多くの佛像を彫刻せり。今日に現存する東寺の不動像は、正しく弘法大師の作なりといふ。世に傳教大師智證大師などの作と稱する像も亦少なからず。台密二教當代の名僧が、其の技の巧拙に係はらず、何れも造像の事を以て其の業の一となしゝは疑ふべからざるなり。

遺品

不動明王像　（第百十一圖）　京都　東寺藏

此の不動は弘法大師一刀三禮の作と傳へらる。其の刀痕を檢するに、佛師の作としては熟練を缺きて鋭利ならざる點あれども、全體の形狀は雄偉にして自ら高邁の氣象を帶び、眞に弘法大師の作として信ずるに足るべきものなり。

技藝天女像　（第百十二圖）　大和　秋篠寺藏

頭部は乾漆製、體軀は木彫にて、高さ七尺五寸あり。體軀に後世の修覆あり、彩色模樣は鎌倉時代に補ひしものと見ゆ。されど其の面相といひ、姿勢といひ、大に日本的の高雅なる風趣を現はし、然かも製作豪放にして一も細巧を用ゐず。恐くは是れ亦當代高僧の作と見るべきものなるべし。

救脫菩薩像　（第百十三圖）　大和　秋篠寺藏

其の作技藝天女に類し、頭部及び胸部は乾漆製、胸部以下は木彫にて、體軀には多少後世の補修あり。救脫菩薩は藥師瑠璃光如來の供養の法を說き、衆生の苦惱を救脫すといふ。其の嚴たる狀貌よく無量の威德を表はせり。刀法亦

第百十一圖（弘法大師作不動明王像）

第五十一回　金剛火焰門本尊

第百十二回　接踵天女使

第百十二圖（異雅天文鈔）

第百十三圖（救脫菩薩像）

第百十三圖（雙獅若獅）

雄拔にして此の時代の特風を見るべし。

此の他桓武天皇時代の作品は東寺の四天王像、太秦廣隆寺の大日像、山城一樣庵藥師像等にして、何れも雄壯にして端嚴の趣あり。

第五節　建　築

桓武天皇都を平安に定め給ひて、大內裏の制を布き給ふや、其の制を唐に取り、周圍に十二門を開き、中に皇居、八省院、豐樂院、武德殿、太政官及び諸省寮あり、而して其の特に建築の優秀を極めたるものは卽ち八省院なりき、八省院又朝堂院と云ふ、卽ち國家至大の典を擧ぐる所にして、其の主なる建築物を太極殿と稱し、其の他蒼龍白虎の二樓、龍尾壇、十二の堂舍及び諸門廻廊等あり、皆丹楹にして碧瓦を葺き、床は氈毯を布き、棟上に鴟尾を上げ、屋蓋は多くは四注なり、豐樂院の建築亦殆んど之れに類似せり、之れを要するに八省院、豐樂院等の規模は、卽ち唐土の直寫にして、是れ卽ち彼れの官衙建築の制度なり。

皇居卽ち內裡は又周圍に十二門を開き、內に紫宸殿以下十七殿及び七舍あり、各宇皆單獨に立ち、之れを連結するに廊を以てせり、蓋し斯の如き配置法は素と純乎たる支那式にして、後世の寢殿造りと謂ふもの亦實に其の起源を爰に有せり。

第百十四圖は八省院平面圖なり、其の豪壯なる規模は實に本邦無比と稱する所、而して其の應天門外の翔鳳栖鸞の兩樓、龍尾壇上の靑龍白龍の兩樓の形狀の珍奇なる、亦實に空前絕後と稱すべし。

皇居及び皇城建築は蓋し此の時を以て始めて大成せるものにして、普通住屋の建築亦之れに由りて大に發達を幇助せられたり。

次に神社建築は當代に於て著しく變更せられたるが如し、是れより先き、本地垂跡の論起りて神佛混淆の端を生じ、空海最澄の世に至りて全く之れを成就せり、而して其の結果として神社を伽藍の內に建て、神社に神宮寺を置きたるのみならず、神社の規模及び形式さへ亦大に伽藍に類似するに至りたり。

第百十五圖は大和奈良の春日神社の「プラン」なり。一見其の甚しく伽藍の配置に似たるを觀るべし、其の入口には三間

の樓門あり、是れ豈南大門に當るものにあらずや。更に進めば一廊あり、廻廊を以て之れを繞らし、正面に樓門あり、是れ卽ち中門に相當するものなり。廊の內部には四宇の殿堂あり、卽ち是れ金堂と相應すべきものなりとす。其の形式を以てすれば本社は所謂春日造りと稱するものにして、其の起源を討究すれば、是れ神明造りの妻入りなるものに向拜を加へ、屋蓋を曲線形にせるものに外ならざるなり。今若し神明造りを平入りとし、之れに向拜を附加して屋蓋を曲線形ならしむれば、卽ち流れ造りを得るなり。

當時代の創建にかゝる平野神社は春日造りの二宇を連結せしものにして、祇園の社は全く佛寺と同式を有せり。流れ造りの標品たるべきものは山城の加茂神社、松尾神社等あり。

佛寺建築は當代に於て新たに一面を開きて大に旺盛を致したり。卽ち空海は眞言宗を創めて、金剛峰寺を高野山上に建立し、最澄は天台宗を開きて、延曆寺を比叡山巓に建てたり。これより先き奈良朝に於ける伽藍制度は常に南面して立ち、其の配置は常に嚴正なる「シムメトリー」を保ち、多くは平地の上に立ちて山に倚らざりしが、天台眞言の伽藍に至りては、其の教義の上よりして多く森林鬱蒼たる深山の巓に建築し、其の配置も亦從うて嚴正なる「シムメトリー」を保つことを得ざるなり。而して建築の形式及び手法等は、之れを前期に比して著しき差違を發見せず、只其の裝飾模樣等に於て顯著なる區別を見るを得るなり。

遺物

室生寺五重塔（第百十六圖）　大和　室生寺

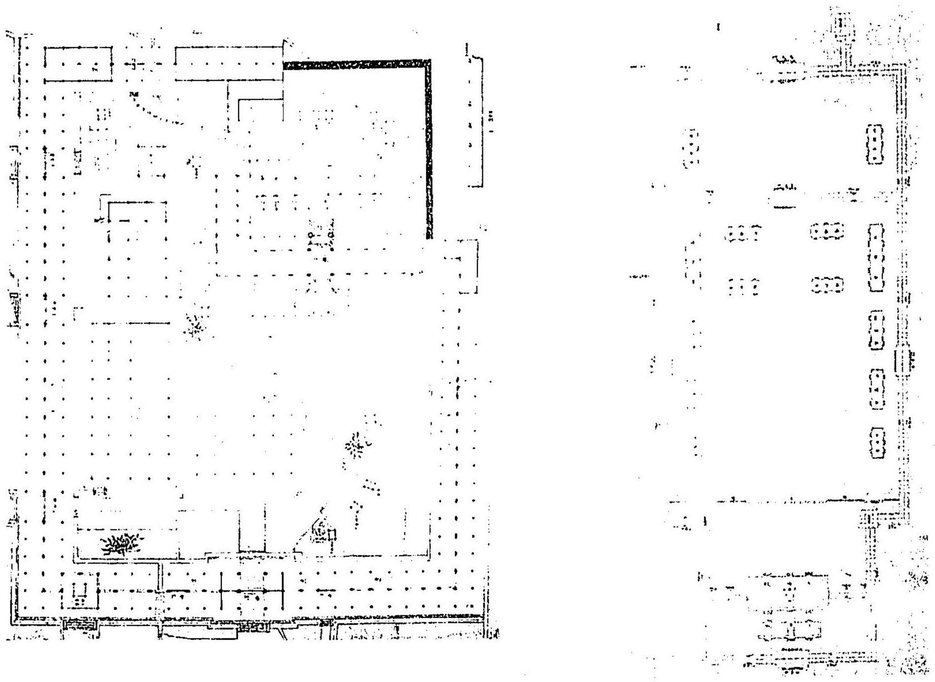
こは實に天長年中の建築にして當代に於ける木邦唯一の遺物なり。其の軒の組物の形式は洵に能く唐招提寺金堂に於けるものに類似したり。九輪の形式は最も奇にして水煙に代ふるに天蓋を以てせり。全體の「プロポーション」を以てすれば、奈良朝に於けるものゝ如く強固堅實の觀なく、却りて稍柔弱なるが如き性質を有せり。蓋し是れ當代の嗜好なり。

之れを要するに當時代に記憶すべき建築界の新事項は、一、唐式の宮城建築を創めし事、二、天台眞言兩宗の伽藍を生ぜる事、三、神社建築に各種の樣式を生ぜる事、是れなり。

第百十四圖（入省院平面圖）

第百十五圖（春日神社プラン）

第百十六圖（室生寺五重塔）



第百十四圖（大谷寺平面圖）

第百十五圖（大谷寺遠景）

第百十六圖（宇治平等院鳳凰堂）

第六節　美術的工藝

桓武天皇時代は遷都と共に政治宗教、文學、藝術等、何れも舊態を革めて、一新の進歩を見るに至りしや、前述せるが如し。されど美術的工藝に於ては、此の際風俗の變遷に伴ひ、多少其の製作を改めしものも少なからざれども、百五十年來久しく奈良の地に居りて鍛錬を重ねたる工匠は、一と度諸般の便宜を異にせる平安に轉じてより、未だ新都に發達の成を揚ぐること能はず。これを他の繪畫建築等の美術に比較すれば、其の技巧は一籌を輸せざるを得ざりき。但し漆工は當代に於て明かに進歩の實蹟を擧げ、又金工の如きも眞言密壇の莊嚴修法具等の製作盛なりしが爲め、自ら特異の進歩を顯はしゝことなるべし。現に高野山及び東寺醍醐寺等に傳へたる杵、鈴、金剛盤寶瓶の類に其の製作精巧にして最も形狀の勝れたるものあるを見ればなり。

漆　工

漆器並に蒔繪は我が國特有の技工にして、其の業夙く國初に開けしが、當代に入りて初めて精美を顯はすに至れり。殊に蒔繪は平塵とて細末の金を器物の全面に滋く撒きしもの、又末金鏤とて漆の上に金の鑢粉を撒きて畫模樣を作り、再び漆を塗りて其の模樣を磨ぎ出だしゝもの、又後世平蒔繪と稱するものなど並ひ發達し、或は金銀を交へて巧に模樣を彩どれるあり。その模樣の描き方に於ては始めて日本的の趣味を顯はし、彼の支那風の規則的に相並びて變化に乏しく、配色繁雜にして眼に煩はしきものと異にして、自然の筆に任せて變化を弄し、一輪の花、一羽の鳥、餘情を圖樣の外に呼び起さしむるが如き一種の裝飾圖は、全く當代の末年より描き出だされたるものなり。

遺　品

蒔繪法文册子筥　（第百十七圖）　京都　仁和寺藏

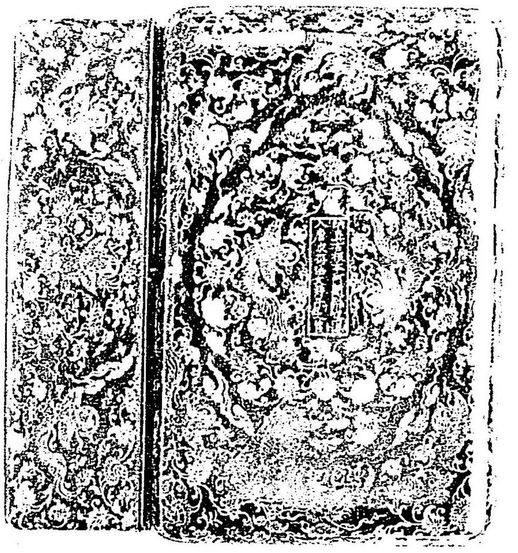
この蒔繪の筥は、弘法大師が入唐の時求め來りし眞言密教三十帖法文の册子を納るゝ爲めに作りし筥にして、蓋の表にその銘あり。全體黑漆に金銀蒔繪を施せり。卽ち末金鏤卽ち磨出にて附書をも交へたり。圖は寶相花中に伽陵頻伽の鳥ありて、或は吹奏し、或は舞ひ遊べる樣なり。其の圖式は唐風なるも、筆趣は大に日本的の優美なる樣を表はしゝものなり。

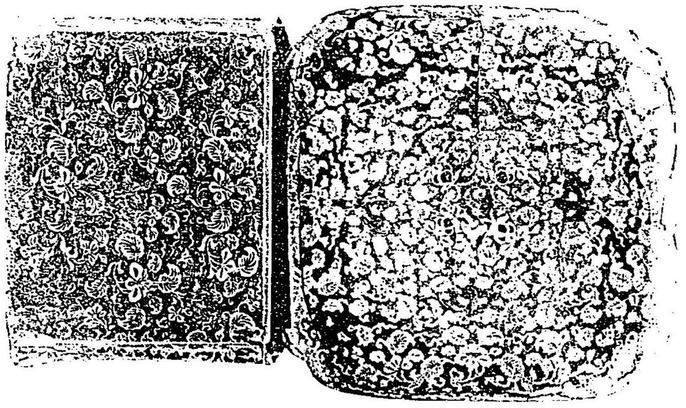
蒔繪寶珠筥　（第百十八圖）　京都　仁和寺藏

この筥は宇多天皇の御遺物と稱し、寶珠を納れたる筥なり。全體損傷少なからざれども、墨塗に平塵を撒き、金銀蒔繪を磨き出だしゝものにて、間附書を以て圖を補へり。その寶相花と鳥との描き方は、筆輕くして一層日本樣を表はせり。其の製作は當代の末年にして、前の法文册子筥よりは稍後の作なるべし。

第百十七圖（蒔繪法文册子筥）

第百十八圖（蒔繪寶珠筥）





第二章　藤原氏攝關時代

第一節　當代美術に及ぼせる社會の情況

當代は宇多天皇の寛平元年(西紀後八百八十九年)より安德天皇壽永四年(西紀後一千一百八十五年)に至るまで、二十三代二百九十七年、文物を外に俟たず、嘗て醞釀せる文化内に成熟して、優に國風の發展せる時代なり。儼に言はゞ、藤原氏の攝關は前代の後半より當代に亘り、凡そ一百四十餘年に過ぎざるに、猶ほ泛稱せんは國史時代區別上頗る妥當ならざるに似たり。されど自餘の年代に於ける美術は、藤原氏攝關時代に煥發せし餘光の唯時勢境遇等の背景を多少異にせるのみ。故に之れが沿革を叙せんに、藤原氏攝關時代の名稱を用ゐるも、不可なからん。

當代初葉の頃は桓武天皇の雄略鴻圖を去ること遠からざれば、有爲の氣象尚消耗せず、且聰明なる天皇上に相繼ぎて至治を圖り給ひ、賢臣碩儒下に輩出して、治道に力め、風敎を奬め、漢學又盛行して一般の人智を開發せしかば、治蹟頗る見るべかりき。されど昇平の久しき俗日に文華に趨き、文華の弊は浮華柔懦となり易きに、宇多醍醐の二帝賢明におはしながら歸佛に勇みて、早く國家を遺落し給ひ、藤原氏又賢臣右大臣菅原道眞を排して、獨り國に當り、財力と權力とを恣にしてより、益遊宴豪華を競ひ、政事を省みざりしかば、時俗愈華奢に奔り、幾もなく、紀綱弛廢、皇室陵夷して、平將門藤原純友等の亂を釀せり。加ふるに海賊强盜又諸國に蜂起して、或は官物を掠奪し、抑留し、或は良民を劫掠するあり。故に一旦兵亂鎭定すと雖も、諸國の良民尚多く業に就かざりしかば、嘗て醍醐天皇保護奬勵して調貢と定め給ひし種々の工藝品及び其の物料の產額減じ、作物所(朝廷に用ゐる諸器物を製造する所)の業衰へ、鋭利なる刀劍却りて時好に投じて陸奥備前大和、山城等に多く製作せられ、其の名工の現はれしを見るに至る。村上天皇の御代に至りては、則ち災異益多く、螫殺の下盜賊横行し、又宮闕を火く。遷都以來百六十六年、始めて此の災あり、累代の重寶多く燼けたりといふ。世道の陵遲、政事の寛縱想ふべし。此の如く當時人事繁く、天災飢疫また少なからざりしかば、前代に著く發揚せし國民の美術製作力一頓挫の觀を呈せり。されどこれに淪みし國民の妙想美感は文學に現じて空前の盛を極めたり。是れ蓋し菅原道眞、紀長谷雄、在原業平、紀貫之等の如き、非凡の天才輩出し、錦思繡心を聯ねて、漢文學又は國文學の範を垂れ、村上天皇の如き又深く詩歌を好み、常に心を翰墨風月の間に玩び給ひ、搢紳化を承け、競うて辭藻を事とせしに因るべし。

きはれ藤原一門の人々が生民の苦樂國家の休戚をも顧みず、日に榮華を極め、風流韻事を專とするに及び、諸美術及び工藝品の需用頓に增加して、大に作興せられたり。蓋し藤原氏の勢權は鎌足に根ざし、世を累ね良房基經父子に至りて、益盛となり、或は后を納れ或は帝を廢して其の出を立て、帝幼冲なる間は大臣攝政となり、長じ給へば關白と稱して尙政柄を握るが如き、上古より先蹤なき種々の典例を開けり。而して是等の創例は皆藤原氏專權の媒助となりて、其の權力を益熾んならしめたり。且や當時歷代の天皇多くは藤原氏の私第に降誕し、其の閨闈中に成長し給ひ、又禁內の炎上にかゝる每に、多くは其の第宅に寢蹕を駐め給ひ、所謂里內裏建築の名稱を起因せしめしを見ても、其の富盛なりしことを知るべし。されば冷泉天皇以後天皇は唯垂拱して其の制を受け給ふに至り、基經の曾孫兼家の如き私第を清涼殿に擬して造營せりと云ふ。兼家の子道長の世となりては、累代の威福に加ふるに、其の五女を四帝一皇子に納れ、三帝の外祖父となり、樞機を典ること三十餘年、勢朝野を傾け、富皇室に過ぎたり。されば藤原氏の榮華は道長に極まり、道長畢生の榮華は其の晩年造營せる法成寺に竭く。法成寺や實に藤原氏の榮華の極點たりといふべし。之れが建立頗る美術界及び工藝界を振興せる宜ならずや。

是れより先き、淸和天皇の比、唐の國勢衰へ、宇多天皇の初め、李克用、朱全忠等權を爭ふに及び、爭亂益甚しく社稷殆んど危し。故に天皇の寬平六年遣唐大使菅原道眞が遣唐使の得失、行路の艱難、國家の利害を上奏するや、天皇之れを嘉納し給ひ、明年五月詔して遣唐使を罷む。推古天皇始めて支那へ使を遣し、給ひしより、實に二百八十餘年なり。此の間派遣の使、留學の徒、世として之れなきはなく、彼れが文物絕えず輸入し、我が文明に頗る貢獻したりしもの、今や其の國凋弊して反亂絕えず、其の制度文物の醇や我れ幾んど探得して、東洋當時の文明的事物既に我れに充備せり。使を派せんも、巨費を捐てゝ其の漓を收めんのみ。且や海洋浩渺、風濤測られず、飄蕩沈溺前後相繼きて、遙用せる材賢を失ふや多し。よし幸に生還するを得んも、扁舟の往反常に辛慘を極む。故に父母妻子際離の情、死別の悲よりも慘にして、固より仁君の忍ぶ所にあらず。遣唐使の廢止せられたる豈偶然ならんや。爾來支那は五代を歷て宋興り、國を立つる三百餘年。此の間商客私に往來し貴品を求めて、搢紳が華奢の意向に投ずるあり、僧侶又商船に搭じて遊學し、經典及び宋製の佛像佛畫等を齎來せしこと少なからざりしも、公には使聘修好のことなかりき。かくて唐國と交通絕ゆるや、頻々注流し來りて寧ろ應接に遑なからしめし外國の思想及び外交上不時の事件の我れを警破攪拌することなく、久しく邦人の思想を抑制し、好尙を凝聚せしめたる唐風の摸倣、漢文學の流行、日を逐ひて冷却し、國文學之れに代り蔚興して、優に國民的感想を喚起せしかば、文化は國風の儘に發展して、日に圓熟の途に就きぬ。此の靜安無爲の時に方りて、藤原氏の門葉社會の上流を占め、富饒充實せる文物を占有し、明媚なる山河襟帶して、自然に城を作し、春や艷麗、秋や幽靜なる勝地に偏安して、ながく文化の中心たり、世の風尙爲めに高雅優美となり、文學美術等に煜映するに至れる、異むに足らんや。

蓋し藤原氏天皇の外戚となり大權を恣にするや、一門の人々をば要職に充て、國內豐饒なる土地をば莊園として多く占領せしかば、啻に政權のみならず、國內の貨財はた幾んと其の門に聚まれり。故に各宏麗なる第宅を構へ、土木水石の巧を凝し、宴飮に遊嬉に華奢風流を競ひ、綾羅錦繡を飾り、歌舞音樂に耽り、菁粱美味に飽くを常とせり。されば詩歌管絃の會、蹴鞠鬪香、園碁、雙六、遊獵、騎射さては曲水の宴、紅葉の賀など、四季折々の遊興盛に行はれ、或は神社勝地へ行幸啓の折々、車馬絡繹として行裝の美を盡し、或は河水園地に龍頭鷁首の舟を浮べて、屢人目を惹きたり。華奢の風かくも繁き、佳品の製作を促し、種々の遊嬉に因める品類をさへ起さしめたり。而して是等需用者は華冑の家に生れて、實務の煩なく、居常人界の興を極む。優悠樂天、春晨秋夕、花に歌ひ月に舞ひ、以て人事を了せりと思念せしかば、其の嗜好に投じて、專ら淸玩せられし文學美術果していかゞなりしか、容易に推知せらるべし。

試に文學に徵するに、散文には、物語、隨筆、日記、紀行、史傳の文など、前古未聞の名作多く出で、歌謳には古今集、後撰集、拾遺集等、勅撰和歌の名篇あり。男女の作家の秀俊なる者一時に輩出し、紫式部、淸少納言殊に閨閤の秀才として古今倚なく、其の作最も世に賞せらる。是等の歌文や多くは貴紳宮媛の手に成りしもの、辭藻の婉麗にして、思想の優美高雅なる、其の分ならんも、必ずや時勢の影響にも因らずんばあらず。亦以て時勢を同うし、且之れに顯はれたる思藻を大に表現せんとするに至れる當代美術の特質を推知し得べし。

時風婉麗纖細に趨き、公卿百官概ね氣慨なく、容儀形式に拘泥し、偸安佚樂を事とせしより、死を懼れ、生を樂ひ、疾病災害を恐るゝこと甚しかりき。されば一方には天台眞言二宗の冲邈なる義理は啻視せられ、皮相の言語虛式のみ遺存せら

れて、眞の感化力殘く失せ、往生の業は念佛を本とすと稱し、極樂淨土に往生するを目的として、修め易く、行ひ易き淨土念佛宗の漸興を促し、他方には物忌方違物怪等の迷信頻りに行はれ、天災疾疫、盜賊兵亂はもとより、瑣々たる怪異だに皆自己の運命に關するものと信ぜられて、僧侶巫祝專ら之れが祈禱厭禳を依賴せられたり。就中僧侶の如き極めて優偶せられ、之れが爲め朱雀天皇は千僧供養を、村上天皇は萬僧供養を爲し、藤原氏は巨刹伽藍の建立に國勢を靡し、白河天皇は前後十數度高野熊野へ行詣し、且法勝寺、尊勝寺、圓勝寺等を建て、無量無數の佛畫佛像及び寶塔を作らせ給ひたり。奥羽俘陬の地に割據せる藤原清衡の如きも、尚生前數多の大伽藍堂塔を建立して、海内屈指の佛界、民心歸向の靈場たらしめ、又延曆園城、東大、興福の四大寺、さては遠き宋國の天台山に於てさへ、千僧を供養して、以て來脱得度の念願を果さんとし、其の子基衡、孫秀衡亦一意其の志を繼ぎて、大に佛刹を增建せしを觀ても、當時佛教深く人心を領せしを知るべし。而して此等宗教史上著明なる事實は、繪畫建築、彫刻を始め、あらゆる諸工藝をも頗る發達せしめければ、美術史上亦注意すべき事件たる言ふまでもなし。

上の如く藤原氏政權を收め、容儀虛飾を修めてより、平安京は榮華の中心となりて繁庶し、文物大に隆興したるも、國家私門久しく混淆したる結果、皇威上に制せられ、賢路下に塞り、鬱塞壅滯、天下の事日に頹廢し、歌舞音曲洋々たる中に盜賊横行し、都外の擾亂更に甚しかりき。而も藤原氏は政務を怠り、武事を賤みて、盜賊兵亂鎭壓の任をば全く武人に委ね、朝廷又唯禁中に修法し、諸國に誦經して調伏を先きとせり。故に諸國の武士日に勢威を得、僧徒護持の功を恃みて、驕傲漸く制すべからざるに至る。後三條天皇資性剛健にして英邁なり、幸に藤原氏の出ならざるを以て、牽制せらるゝ所なく、親ら機務を執り、治圖を精勵し、且つ所謂院政の例を創し、大權を仙院に收攬し給ひしかば、藤原氏外戚の親と攝籙の權とを失ひて屏息し、皇綱再び振張せり。されど白河、鳥羽の二帝次で院中に政を執り給ふや、白河天皇は特に佛教を崇尚し、鳥羽天皇特に華美を好み給ひしが故に、造寺彫像の業大に榮え、風流なる遊嬉頓に類を增したるも、國庫益空耗し、僧徒愈兇暴となりて、院宣亦天下を統理するに足らず、唯源平二氏の武將に依りて幾に小康を保つを得たり。されど一時の小康は保元平治の亂に破れて、源平兩氏權力爭奪の戰となり、源氏敗れて政權平氏に歸するや、形勢將に變じて朔府創立の端を開きぬ。かくて平氏獨り榮ゆるに及び、一門の采地海内に蟠延し、且つ天子の外戚となり、加ふるに兵馬の權を以てせるが故に、其の强盛夐に藤原氏に超え、平氏の族にあらざるものは、人にあらずといふに至れり。而して一族大權を弄して、榮耀を極むるや、事々物々、盡く藤原氏の驕奢を學び、歌を詠み、管絃を弄び、只管風流の遊びに耽りて、武勇の業を忘れ、柔弱なる公卿の如くなりしかば、都は再び華奢の衢となり、人はさながら藤原氏の榮華を再演しつゝに、翻りて他方を觀れば、武士殊に源氏の餘類劍戟を磨して再舉を期するあり、僧徒又驕傲暴慢を擅にし、爭鬪論議止む時なく、劫擾殺伐殆んど至らざるはなし。されば美術にもかゝる二面的時勢の映象現はれ出でゝ、明かに二樣の趣致を呈するに至れり。卽ち一は藤原氏繁榮の餘影をとゞめ優美纖巧にして頗る貴族的なるもの、他は强健遒勁にして大に武士的たる、下に言はんが如し。

第二節　當代美術の變遷及び特質

當代の凡そ三百年は我が洵美なる山川の美術を產み出だし、大に日本的の眉目を開かしめたる時代なり。殊に帝室を擁して藤原氏の一族が占め得たる京都の地は、花明かに月清く、四時の風光坐ろに好尙の念を動かし、人をして文藝に遊ばしめずんば、必ず美術に赴かしめたり。その初期延喜の頃に於ては、政道非繁く、搢紳の遊戲は和漢文學に過ぎざりしも、藤原氏の榮華漸く酣醉の境に入るに從ひ、服飾を始め殿舍園地の如き、互に裝飾の巧を衒ひ、慶賀吊祭には盛大なる儀式を設け、觀花興月には豪奢なる宴會を催し、人々皆心魂を舉げて美術に托し、その賞玩の爲めに夢死醉生してまた餘念なかりしが如し。されば此の時代の美術には雄壯氣拔の大作なきも、全く世の塵俗を離れて遊戲の三昧に入り、繪畫を始め諸般の裝飾、何れも意匠の粹を叩き、情致の極を穿ち、一見恍として至樂なる別世界に遊ぶの興味を起さしむ。且當代の美術品たる、皆貴族社會の賞玩に成りしものなるが故に、其の氣品極めて高く、意匠の巧を凝らすも奇譎に流れ、狂妄に失することなく、又精致の微を穿つも鄙野に涉り醜態を露出するの甚しきに至らず。圖樣といひ、形狀といひ、配色といひ、如何にも穩雅優美にして、恰も朧に匂ふ春の月霞こめたる櫻花を見るが如きもの多し。是れ我が氣候風土の然らしむる所にして、素より日本人の最も嘆賞する所なれども、至高なる當代貴族の好尙に由りて、始めて其の極致を叩き出だされたるものなり。

かくて世に御堂關白と呼ばれし藤原道長の出づるに及び、京城の東北隅に法成寺の大伽藍を建立し、結構奢を盡し美

を極めたりき。此の堂宇は創立後僅かに三十八年にして、大半灰燼に歸したれども、其の莊嚴の世に比類なかりしことは、榮華物語法成寺金堂供養記等に由りて明かに徴することを得べし。卽ち其の構造の大略は、方四町を劃し、東西南の三方に大門を開き、又內に中門を設く。南門を入りし正面に金堂を建つ、大御堂と稱せられしものなり。前庭には加茂川の水を引きて池を作り、池中に中島を築き、三方に橋梁を架せり。又東方には五大堂、西方には阿彌陀堂あり。其の他講堂、釋迦堂、文殊堂、千手堂、戒壇堂、法華堂、眞言堂、三昧堂、圓堂、大塔、鐘樓、經藏及び東北院、西北院、僧坊、浴室等數ふるに暇あらず。金堂には有名なる佛工定朝が一代の丹精を擢でゝ彫刻せし三丈二尺の金色の大日如來、百葩の蓮華に結跏して莊嚴微妙を極め、同じく二丈の金色の釋迦、藥師の兩如來、文殊、彌勒の二菩薩、九尺の梵天、帝釋、四天王等本尊を圍繞して安置せらる。其の他各堂には五大堂に二丈彩色の不動明王、丈六の四大尊、阿彌陀堂には丈六金色の九體の彌陀、釋迦堂には百體の釋迦等、何れも相好圓滿にして威儀莊麗ならざるはなし。又金堂の扉壁面には當時の妙手を選みて、八相成道の圖（釋迦一代の履歷なり）、金胎兩界曼荼羅、天女奏樂の圖等を畫き、阿彌陀堂の扉には、極樂淨土九品蓮臺の圖を畫かしめたり。又大御堂の裝飾に至りては、非常の麗美を盡し、柱楹梁枘は紫檀赤梅檀、又漆塗に金塵を蒔き、螺鈿の花形を裝し、五色の寶玉を嵌し、天井などには金金物を打ちつらね、村濃の組糸にて網を結べり。中央に据ゑたる大寶蓮花の座には百葉に百寶の色相を別ち、每葉寶臺の上に一釋迦を現出せしめ、幾萬の珠玉を飾れり。其の他寶幡、天蓋、各種佛器の類何れも精緻巧妙を盡さゞるはなし。此の法成寺の大工事は恰も彼の聖武天皇が東大寺の大佛を建立せられしが如く、一般の美術に至大の影響を及ぼし、特異の進歩を與へたりき。憶ふに今日に遺存して嘖々莊嚴の美を稱せらるゝ平等院鳳凰堂、中尊寺金色堂、法界寺彌陀堂の如きも、全く此の法成寺造立の餘力に成りしものにして、然かもこれを法成寺の大建築に比ぶれば、僅にその金屑木片たるに過ぎざるべし。

藤原氏の權威漸く衰へ、東國亂れて武人の跳梁を來たし、京紳の夢屢驚かさるゝに及びては、美術も亦これが爲めに振盪せられて、繪畫は自ら其の筆に活氣を生じ、建築物裝飾品の如きも多少新意を著け、奇巧を出だすに至れり。されば晩年平氏の一族代りて朝權を握るに及び、益に藤原氏の豪奢を慕ひ、藝術嗜好皆その翠に倣ひしが、藤原氏美術の渾厚にして寧ろ痴鈍に近き至高の風韻に至りては、自ら脫化して新たに意匠の巧を增し、圖畫も裝飾品も其の趣小說に類し、演劇に近き當代人の行跡をよく如實に代表して、偏へに風流を競ひ洒落を盡したりき。

第三節　繪畫

當代以前の繪畫は殆んど全く佛敎に隸屬して、其の畫く所佛像にあらざれば、寺觀の裝飾に外ならざりしが、平安の朝となりてより、其の畛域漸く擴まり、當代に入りては一般上流社會賞玩の物となり、殿舍の裝飾として壁襖屏風の類に畫かれ、又他に文藝と等しく盛に紳士貴女の手に翫ばれ、繪合とてその展觀品評の會をも催ふさるゝに至れり。されば其の畫題は多く和歌の意、又は物語の趣などを顯はし、名山勝地、觀花賞月の圖、狩獵行旅、男女交遊の樣など、何れも逸樂遊賞に伴ひ、文雅風流に出でざるはなし。而して當代の初期延喜の頃に於ては、未だ漢文學の世に行はれ、唐朝の事物を慕ふの念熄まざりしかば、其の賞玩する所の畫は多く唐土の山水人物なりしが、天曆より以後は大に自國の風尙を擧げ、畫題も純然たる日本的のものとなり、大內裏淸凉殿の御障子畫さへも、荒海の圖に代ふるに、宇治の網代をかゝせられ、毘明池の圖に代ふるに、季綱の少將が嵯峨野に狩せる樣をかゝせらるゝに至れり。かくて晩年に及びては、葦手書と稱して平假名を畫の中に書き交へ、又鳥又は水石などの形に擬して、景色畫中に加ふるなどの遊戲も行はれ、又作畫とて金銀泥、群青、綠青等の光澤ある顏料を以て、世の常ならぬ異彩を雲烟樹石の類に施し、華美富麗の觀をなさしむる一種裝飾的の畫も行はれたりき。

又一面の宗敎畫に於ては、前代專ら唱へられし天台眞言の二宗は、敎理深邃にして容易に人心を感化し難きを以て、當代の中頃より他力を本願とする淨土念佛の宗旨起り、殊に惡心僧都の如きは盛に往生淨土の說を唱へ、自ら畫を著はし、圖畫を作りて、其の弘布を勉め、終に天下を風靡せしかば、佛畫の形相は上品悉地の勇猛を離れて、中品引接の優美に入り、流麗の筆と金光燦爛たる着色とを以て、專ら西方淨土圖、彌陀來迎圖等を畫くに至れり。而して是等の佛畫たる當代他の作品に等しく韻致極めて高く、其の筆は優美なるも、未だ纖弱に流るゝことなく、彩色富麗なるも、配合の宜しきを失はず。其の品位は勿論技術の點に於ても、到底後世畫家の企て及ぶべからざる巧妙を盡しゝもの少なからず。

當代の畫工は佛畫師にして他の裝飾畫をも作り、又鑑賞的の畫師にして傍ら佛像をも畫き、明かに其の業を分ちて專門に一種類の畫に從事せしものは少なかりしが如し。されど其の畫風に至りては、五六の流派ありて、各其の筆致を異

にせり。卽ち巨勢、託摩、春日、土佐及び秦惠心等の流派なり。

巨勢は金岡を祖として相覽公忠、公望深江、弘高、是重、信茂等出で、唐畫の畫統を傳へ、公忠以下相繼ぎて繪所長者に任ぜらる。而して公忠以前の畫は寫實的にして專ら活動を主とせしが、公望より以後は其の筆意も多少日本風に化し、理想上の美を加へ、益優美に流るゝに至れり。當代巨勢派中最も名畫の譽高かりしは弘高にして、六條宮具平親王嘗て藤原道長に語りて曰く、布障子の繪の役などには弘高を召さるべからず、輕々なるべき事なりと。是れ其の技の凡ならざるを貴重せしなり。弘高深く佛を信じ薙髮して僧となる。朝廷其の技藝を惜み還俗を命じ繪所長者たらしめたり。一代の作佛畫多く、地獄圖の如きは最も意匠の妙を極め、其の畫眞に逼りしといふ。又公忠は唐山水を畫きて其の妙を稱せられ、公望も亦名手にして日本の景色畫を作りしといふ。

託摩は後冷泉天皇の永承頃、託摩爲成に由りて一派を創せられ、爲遠其の風を傳へ、專ら佛畫を作る。憶ふに其の畫統は巨勢派に出で、新たに支那宋朝の畫風を參せしものなるべし。爲成は巨勢氏に代りて繪所長者となる。藤原賴道宇治の平等院を建立するに當り、爲成鳳凰堂の壁並びに扉面に淨土九品の說相及び釋迦八相の圖を畫く。此の畫今に遺存して有名のものなり。其の圖樣を觀るに、筆の趣は巨勢風の畫と大差なきも、佛像の裝飾等は大に新意を加へたり。されど此の派が再び宋朝の顏輝、李龍眠等の筆意を學び、描線に變化を顯はしゝは當代以下にあるが如し。又爲遠は近衞天皇の頃多く高野山等の佛像を畫きしといふ。

春日は倭畫の一流に出で、最も細く優美なる描線と華麗なる彩色とを以て世に知られ、多く佛畫を作る。其の圖中には間、宋畫を參せし跡あり。春日の名は南都春日神社の畫所にて、此の畫風を出だしゝに由る。其の始めて春日社畫所預となりしは、藤原隆親なりといふ。隆親は當代末年の人にして、內匠寮の繪所預りとなりし藤原隆能の男にて、中務大輔に任じ、從五位下に叙せらる。彼の有名なる源氏物語の畫卷は、父なる隆能の筆なりともいひ、又は隆親の作なりともいへり。其の詞書の筆者は皆隆親の時代の人なれば、隆親の筆と鑒する方穩當なるべし。春日派の佛畫は次の鎌倉時代に亘りて、盛に畫き出だされしもゝの如し。されど隆親以後明かに作家の名を傳へしものなし。

土佐は倭畫の本流にして、其の濫觴は古く平安朝の初にありしが如し。而して當代に入りて明かに一流の特色を顯はし、輕妙にして自在なる筆の運用と、淡泊にして巧妙なる色の配合とを以て、嚴密なる支那畫の外に一機軸を擢で、專ら此の國の風致に富める事物を寫し、益其の圖の趣味をして多からしめたり。且此の一派の畫は比較的力を寫實に用ゐ、人物鳥獸の如き巧に活動の趣を寫し、又疾く回轉する車の如きは、一抹の墨を施して明かに其の輻を畫かざる等、細かなる點に至るまで意を用ゐたりき。土佐といへる名は藤原隆親の男經隆が土佐權守に任ぜられしより起れるものなるべし。されど固より經隆を以て土佐流の祖とはなすべからず。經隆より以前に出でし僧正覺猷、又經隆と殆んど同時なる藤原光長、藤原隆信の如きも、正しく土佐流の筆にして、然かも並びに當時比類なき妙手として、其の名經隆よりも高かりしなり。

僧正覺猷は大納言隆國の子にして、大僧正となり、保延四年に天台の座主に補せらる。嘗て鳥羽の地に住みしを以て、人呼びて鳥羽僧正といふ。性洒落にして丹青の妙を究め、大に倭畫の一派を發揮す。其の筆飄逸にして然かも寫實の巧を失はず。鳥獸戲畫とて鳥獸が人の動作を眞似たる樣を畫きし卷物の如き、最も意匠の新奇にして、筆の磊落なるを稱せらる。

藤原光長は一代の妙手にして、其の筆跡と稱する年中行事畫卷並びに伴大納言畫卷を見るに、筆の適逸にして自在なるはいふまでもなく、其の心匠の靈活なる、よく物の玄微を穿ち、又よく圖案に變轉離合の妙を顯はし、人をして神馳せ魂飛ぶの興味を感ぜしむ。唯其の傳記に至りては、古來諸說紛糾して明晰なるを得ざれども、從四位刑部大輔に叙任せられ、畫名固より當時に高かりしことは明かなり。嘗て高倉天皇の永安三年に勅に由りて、最勝光院の障子に日吉御幸平野行幸の圖を畫けり。又古今著聞集に後白河院の深く賞玩せられて、蓮花王院の寶藏に祕められしといふ年中行事の畫は、卽ち光長の筆として後世に傳はりし畫卷なるべしといふ。

藤原經隆は春日派の祖なる隆親の男にして、從五位下土佐權守に任ぜらる。想ふに其の始に父の春日風を學びしも、後に鳥羽僧正等の筆意を慕ひ、其の畫樣を變ぜしものなるべし。今世に傳はれる西行物語は、卽ちこの經隆の筆なりといへり。

藤原隆信は皇后宮少進爲隆の男にして、正四位下に叙せらる。圖畫を好み最も寫生に巧にして、多くの肖像畫を作り、皆

能く眞似を得たりといふ。彼の高倉天皇の畫かしめられし最勝光院の障子畫日吉御幸平野御幸の圖も、その供奉の公卿以下の面相は、特に隆信をして寫さしめ給ひしといへり。

惠心風は唐樣と倭樣とを融合して、一種渾厚なる畫趣を出だしたるものなり。惠心僧都は始め延曆寺の慈慧僧正に就きて法を受け、後ち横川に屛居して、一乘要訣往生要集以下七十餘種、一百五十卷の書を著はし、又丹青の妙を究めて多くの佛畫を作り、專ら他力本願往生淨土の敎を弘め、寛仁元年七十六歲にして遷化す。卽ち其の畫く所彌陀三尊圖、來迎圖、淨土圖等にして、世に其の遺跡と稱するもの少なからざれども、多くは信憑し難し。唯高野山に傳はれる阿彌陀廿五菩薩來迎圖は正しく僧都の筆と認むべきものなり。

秦の畫は奈良朝の古樣を傳へしものにして、或は河成と其の畫統を同うせしものなるべし。後冷泉天皇の治曆延久頃、秦致貞といふものあり、法隆寺に居て佛畫を作れり。其の最も有名なるは、聖德太子一代の行狀を畫殿の壁に畫きしものにして、剝落損傷甚だしく、屢修補を重ねたれども、今に屛風に貼して保存せられたり。此の他猶法隆寺綱封藏中には、同人の手に成りしものと鑑すべき佛畫少なからず。

以上其の畫風を徵すべきものゝ外、畫名世に聞えたるも、流派を審にすること能はざる人々少なからず。良親は姓氏を詳にせず、一條天皇の朝、能畫を以て稱せられ、勅に由りて坤元錄（坤元錄は支那の地理書にして卽ちこれに由りて彼の國の名山水を畫きしものなり。）の屛風を畫きしといふ。飛鳥部常則は畫名最も高く、巨勢公望と時を同くし、常則は大上手、公望は小上手と稱せられ、其の畫きし獅子は狗子これを見て驚き吠えたりといふ。應和三年御所の西廂の壁に白澤王鬼を斬る圖を畫けり。又右大臣實資の爲めに冷泉院、神泉院の二圖を作る。其の畫の景致最も優美なりしといふ。又千枝は姓氏官位詳かならざれども、常則と同時の畫工にして、最も裝飾的想像畫に巧なりしといふ。藤原基光は白河天皇の世に從五位內匠頭に叙任せられ、又畫所預に補せらる。信貞は姓氏を知らざれども、鳥羽天皇の世に畫を以て聞え、最も馬を寫すに巧なり。內裏を始め多く公卿殿閣の障子を畫きしといふ。藤原隆能は近衞天皇の世、丹青を以て給所預となる。鳥羽院の宸影を寫し、又鳥羽金剛心院の扉を畫き、勸賞に預りしといふ。其の他當代に於ては、上は天皇を始め、公卿並びに上臈の畫に巧なるもの多く、就中花山天皇は最も意匠に富ませられ、給畫建築等に多く新意を出し給ひ、冷泉天皇、一條天皇も常に畫を以て遊戲とせられ、白河天皇、堀河天皇は佛像を畫き給ひしといふ。又平清盛の長女は畫の妙手と稱せられ、紫宸殿の障子に伊勢物語の絵をかき、又其の妹なる六女も多藝にして、歌の意の畫などをかきしといふ。其の他給式部、中納言局など、畫に巧なりし女流少なからず。

又佛畫の名家は惠心僧都の外、會理僧都は東寺の僧にして、延喜の頃多く眞言宗の佛畫を畫く。僧延圓は世に給阿闍梨と稱せられ、寛仁年中法成寺祈禱會の時、三丈餘の大日像と丈六の阿彌陀像百體とを畫き、金堂の壁に懸け並べしが、其の大日は絕作にて本尊と崇めて供養せらる。其の他一代の作甚だ多かりしといふ。給佛師敎禪は後冷泉天皇の勅願に由り、法成寺に於て百二十一體の佛像を畫き、其の賞として僧綱に任ぜらる。又給佛師良秀は不動の畫を以て聞え、僧覺鑁は眞言宗新義派の祖にして、本筆を以て多く佛像を畫く（通常本筆は梵字をかくに用ふ。）僧珍海は給所預藤原基光の子にて當代の碩德と稱せらる。父の衣鉢を受け、多く佛像を畫きしといふ。平氏の頃に至りては、多く給佛師といふもの世に顯はる。其の名を留めしものは賴聖、良仁、忠算、明業、明順、眞助、正盛、重任、應源、智順等なり。

遺品

閻魔天像　　京都　東寺觀智院藏

この閻魔天の像は會理僧都の筆と稱す。其の筆唐畫の過半日本化せし頃の趣ありて、面相は彼の村上天皇の時建立せられし醍醐寺五重塔內の壁板畫に酷肖し、正しく會理僧都時代のものたることを證すべく、其の畫相は大に森嚴なる眞言一派の風貌を顯はしゝを見る。閻魔天は佛說に地獄の王にして、亡者の魂を司り、賞罰を與ふるものなりといふ。

釋迦再生說法圖　　山城　長法寺藏

釋迦再生し、金棺より出現して、說法をなす圖なり。配景布置少しく自然に背きて穩當ならざる點あれども、筆致優美にして、氣品高く、殊に彩色に至りては最も配合の妙を得たり。其の筆者は固より詳ならざれども、當代初期より中期に遷る頃の作なるべし。

阿彌陀二十五菩薩來迎圖　（第百十九圖）　　紀伊　高野山藏

三幅對にて絹本竪各六尺八寸あり。傳へいふ此の畫もと比叡山の什寶にして、惡心僧都の筆なりと。木尊阿彌陀佛中央に端座して、觀音勢至の二菩薩座前に侍して、威儀最も高く、自餘の諸菩薩は慈容溫藹、悠々樂を奏し、共に雲に駕して來迎す。其の畫趣の莊麗にして、神采の靈活なる、一見人をして欣求淨土厭離穢土の觀念を起さしむるに足る。殊に其の作畫の跡を見るに、描線は倭漢を混和し、一種圓熟なる體をなしゝものにして、縱横に淋漓して毫も澁滯の痕なく、又裝飾模樣と彩色の如きも、故らに細巧を用ゐず、意に任せて塗抹し去りしものなれども、よく自然に配合の妙を得たり。凡て其の作畫の豪放にして氣韻の高邁なる、尋常畫工の企て及ぶ所にあらず。是れぞ正しく惡心僧都其の人の作として、疑を容るべからざるものといふべし。

帝國博物館藏

普賢菩薩像　（第百二十圖）

此の畫像は元と奈良の某古刹にありしものにして、今は帝國博物館の所藏なり。藤原氏時代佛畫中の優逸にして、最も品位あるものゝ一に屬す。其の筆纖細にして縹緲たる趣あるも、然かも軟弱に陷らず、彩色極めて麗美にして、巧に鬱色に鮮色を交へて、所々細かなる截金の模樣を施せり。憶ふに藤原氏の盛なる中頃の作にして、畫派は春日に屬するものなるへし。普賢は由來德利周遍仁慈惠悟の菩薩と稱せらる。此の圖白象に騎れる像にして、今こゝに其の半身を寫し出だせり。

侯爵　德川義禮藏

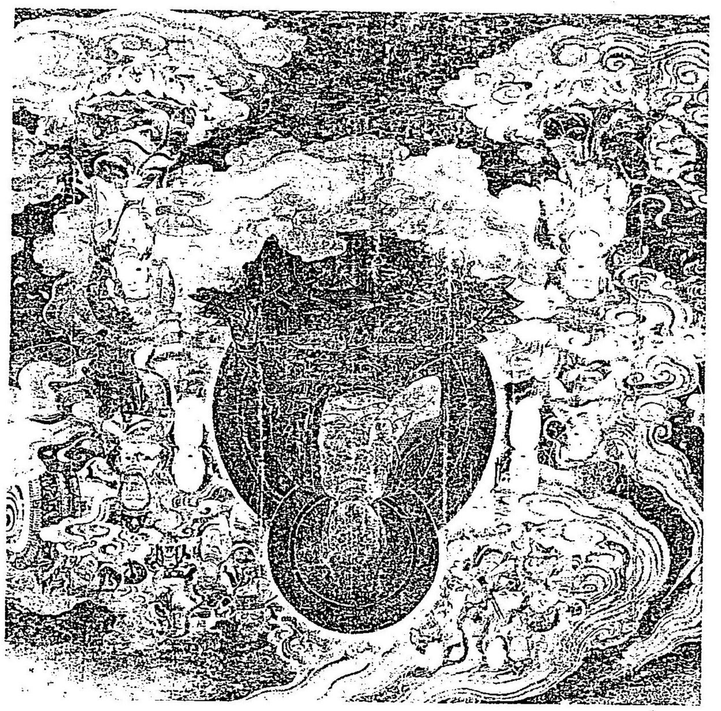
源氏物語畫卷　（第百二十一圖）

この畫卷は當代の有名なる閨秀文學家紫式部の作源氏物語を畫きしものにして、よく當代貴族の逸樂にして遠く俗世界を離れ、觀花賞月偏に風流を翫びし實況を寫し得たり。今こゝに出だしゝは、やどりぎの卷、柏木の卷、あづまやの卷の三段なり。其の畫風は線細く彩色富麗にして、春日派に類し、寫實を離れて專ら物の主眼點と、風尙の嫻雅なる趣とを顯はすを旨とし、一種裝飾畫に近き圖樣をなせり。

山城　平等院鳳凰堂藏

扉畫阿彌陀佛畫　（第百二十二圖）

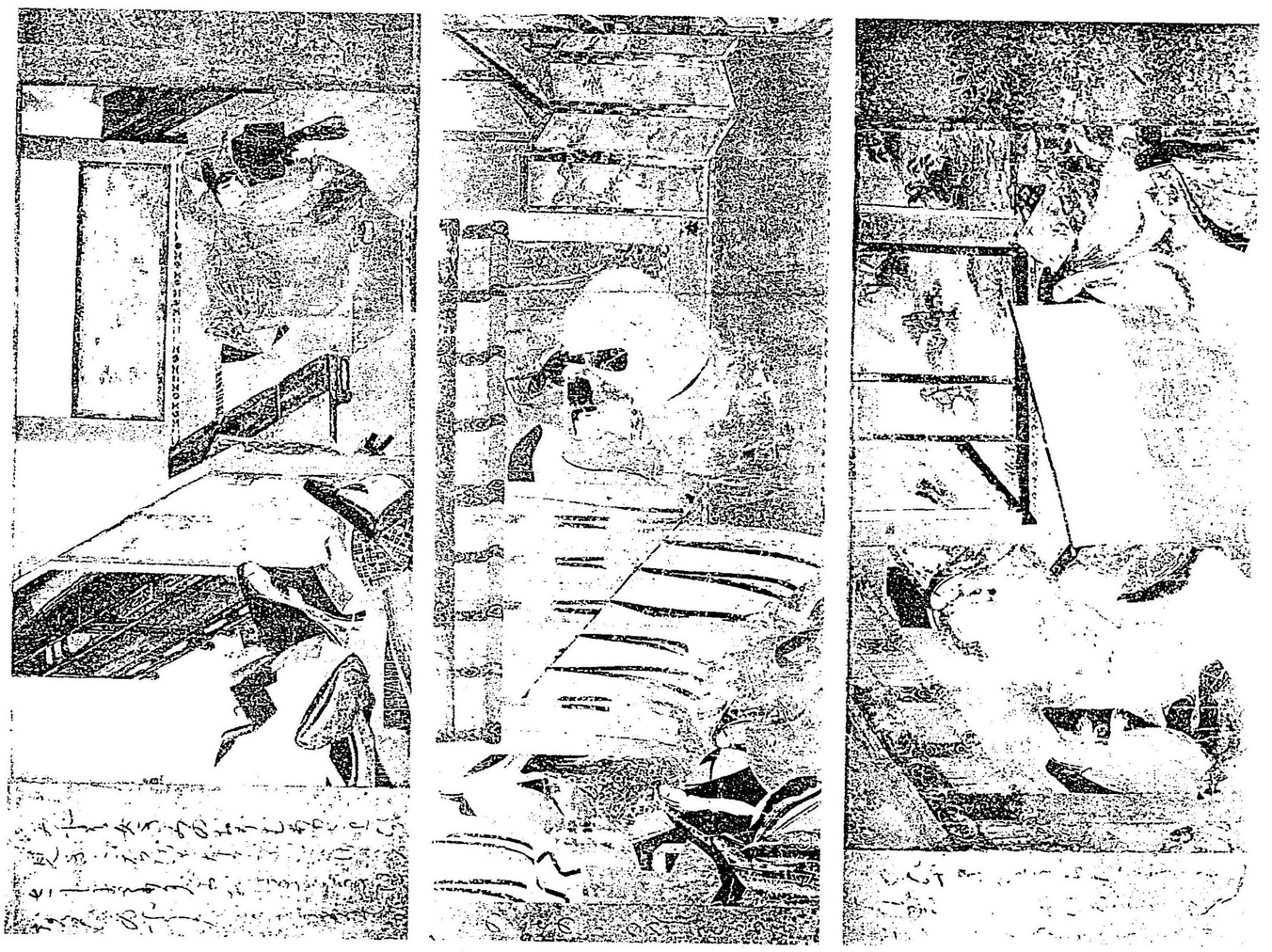
平等院鳳凰堂の扉扇には、九品彌陀圖及び觀經曼荼羅を畫き、後壁には八相成道の圖を畫けり。今こゝに出だしゝは扉畫中上品下生彌陀の圖なり。この畫は託摩派の祖なる爲成の筆にて、圖樣の優美と彩色の華麗とを以て、非嚴



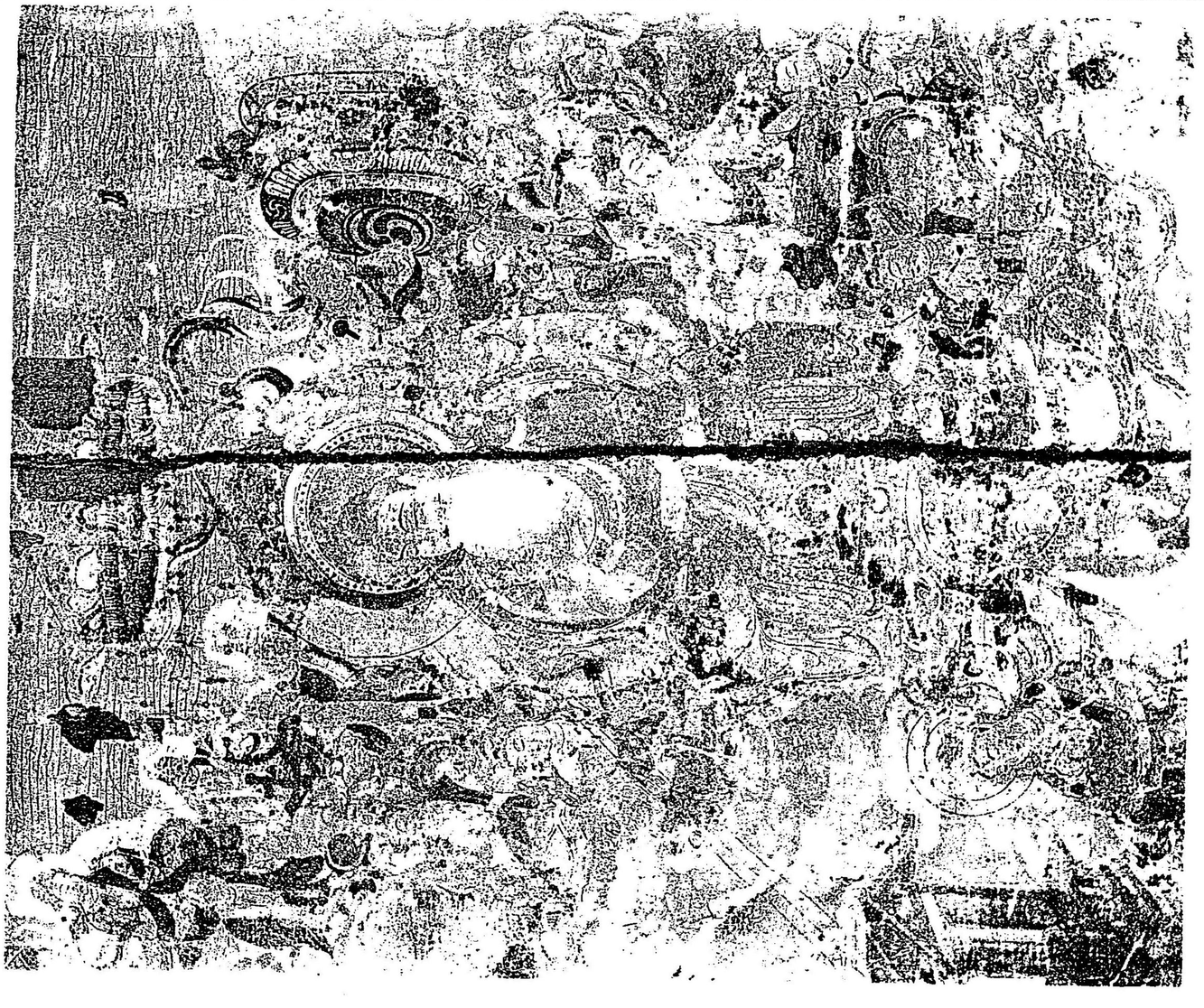
第百二十圖（普賢菩薩像）

第〇二十圖　番陀羅尼菩薩

第百二十一図（源氏物語絵巻）



第百二十二圖　(宝厳寺伝弁慶井阿弥陀堂)



第十二圖　（清帝遜國後紫禁城內之景象）

の美を稱せられしものなれとも、今は殆んと消磨剝落して、僅に其の殘影を留むるのみ。

鳥獸戯畫　（第百二十三圖）　山城　高山寺藏

鳥羽僧正覺猷の筆なる素書の畫は、人物鳥獸など戯遊の樣にして、何れもよく生々活動の趣、座作奔馳の態を寫し、その筆致洒脫輕妙にして、巧に滑稽の意味を顯はし、又間、諷刺の意を寓せしめたり。高山寺に藏する卷物の全部は、道俗相集りて碁を圍み、雞を鬪はし、馬を馳せ、藥を催せる圖並びに牛馬虎豹の圖、又猿兎蛙などの人眞似をなせる圖等にして、こゝに出だしゝものは動物の神祭の樣をなし、車を曳き出だし、躍り狂へる圖なり。

伴大納言物語畫卷　（第百二十四圖）　伯爵　酒井忠道藏

この畫卷は大納言伴善男内裏の應天門を燒き、その罪を左大臣源信に負はせ、己れ其の職に代らんとし、事顯はれて流刑に處せられし物語を畫きしものなり。今こゝに出だしゝは應天門炎上の圖及び右兵衞の舍人（伴大納言が放火を目擊せる人）と大納言の出納の舍人とが兄童の喧嘩より親々の口論となりて、端なく衆人環視の前に放火者を暴露する所の二圖にして、筆者は傳へて藤原光長と稱す。圖樣寫生に成り、筆致勁逸にして頗る活氣に富み、彩色の如きは粗漫にして巧緻ならざれとも、刮りてその虛飾なき施色は畫面をして沈實ならしめ、又大に雄健の趣をも添へたり。

平氏納經卷裝飾畫　（第百二十五圖）　安藝　嚴島神社藏

平清盛以下平氏一族の人々が嚴島神社へ奉納せし經卷は、意匠の巧を凝らし、裝飾の美を盡しゝものにして、其の書畫は多く平氏一族の手に成りしものにして、殊にその畫は彼の清盛の第一第六の女などの筆多かるべし。今現存するものは法華經外三十三卷にして、何れも表紙を始め全卷の表裏には、一種の畫模樣を裝飾せり。その畫樣は卽ち作畫といふものにて、凡て天然人造の諸物に就き最も玩賞すべき美の現象を拔萃し（風雅ある雲、烟流水の類）これを詩歌的に配合して、一種の美觀を顯はしゝものにして、其の趣向は純然たる日本的にして、當代に於て創意せられしものなり。又彼の平假名の文字を畫中に書き交へし筆手畫の如きも、多く此の裝飾畫中に混用せられたり。

此の他當代の名畫として現今に傳はれるものは、大和法華寺に彌陀三尊畫像あり、筆致の渾厚にして品位ある、當代

初の作と認むべく、井上伯爵所藏に孔雀明王圖像あり、東寺に十二天圖像あり、共に當代中期の作なるべし、又醍醐寺の五大尊像、村山龍平所藏釋迦涅槃圖は雄健の筆にして、片野邑平所藏虛空藏菩薩像、大和法起寺の普賢菩薩像は、共に優美の作なり。

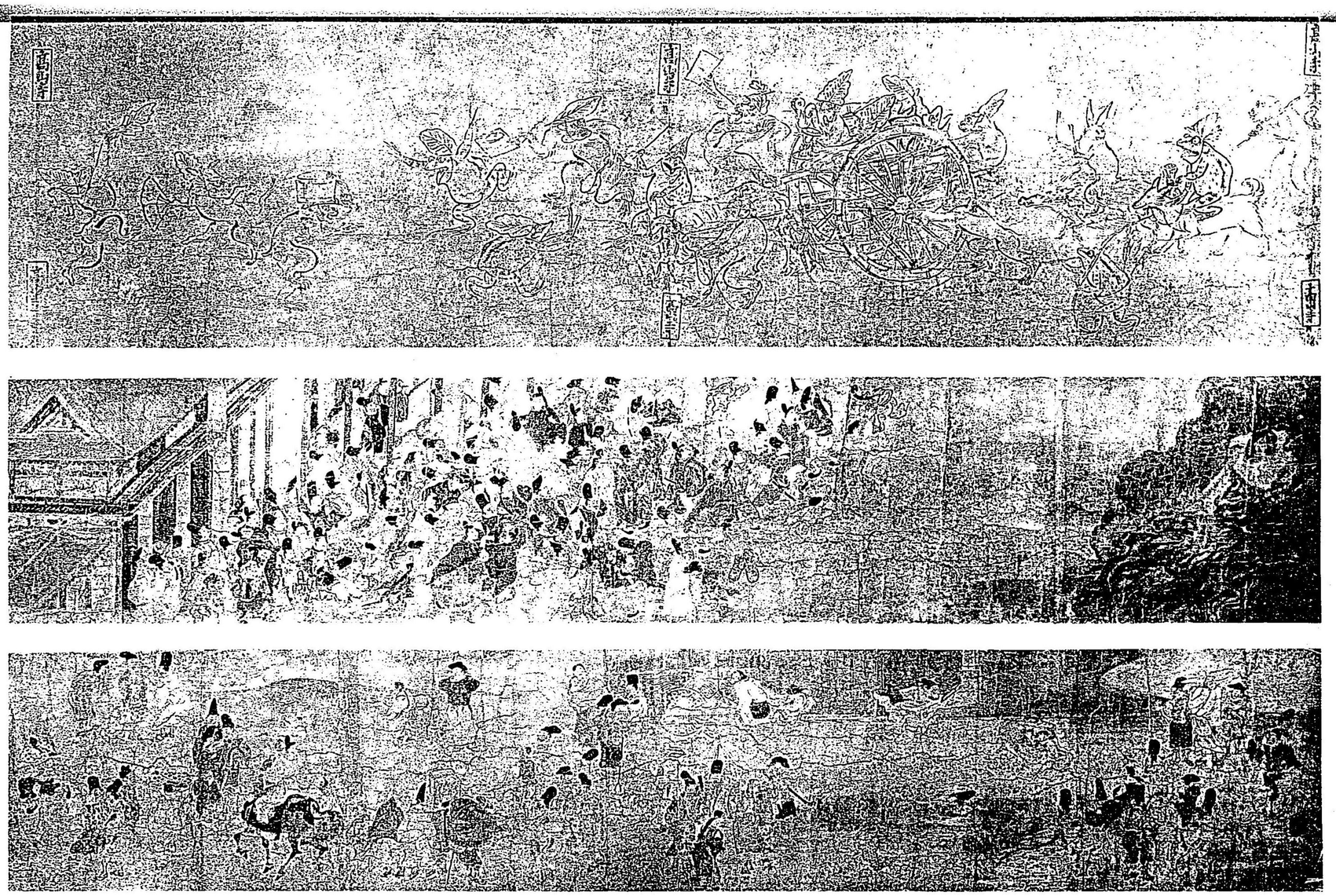
又大和國朝護孫子寺藏志貴山緣起繪卷は鳥羽僧正の筆と稱し、頗る適逸の筆なり、紀伊國粉川寺緣起繪卷は藤原光長の筆なりといひ、高山寺華嚴緣起繪卷、餓鬼草紙、地獄草紙等、其の筆致相類し、圖樣何れも活氣に富めり、又大坂四天王寺及び帝國博物館等に藏する扇面寫經下繪は凡て百十數枚あり、當代の貴紳又は貴女の筆なるべく、貴賤男女各種の風俗及び花鳥等を畫けり。

第四節　彫　刻

當代初期の佛像彫刻は前代の形式を逐ひ、殆んど摸作を事として、技術の點に於ても或は退歩を免るゝこと能はざりしが、藤原道長の法成寺を建造するに及び、名工定朝世に顯はれ、道長の命に由り幾多の弟子を督して、盛に造像の工を起し、三丈二尺の木尊大日像を始め、幾百千體の佛像を彫刻せり。これが爲めに彫刻の技術は特異なる長足の進歩をなし、殊に定朝が當代貴族の優美なる好尚を代表して刻み出だしゝ佛像の相貌は實に古今比類なき至高の品致風韻を盡したりき。かく定朝が好模範を垂れしより、其の子覺助は京都七條に佛所（即ち彫刻場）を開き、弟子長勢も亦京都三條に佛所を開き、永く專門の業を繼續せり。白河堀河鳥羽崇德の數朝並びに寺佛を崇敬せられ、六勝寺（法勝寺、尊勝寺、圓勝寺、最勝寺、成勝寺、延勝寺）外各寺の建立せらるゝに當り、圓勢、長圓、院覺、賢圓、康助、院朝等の佛工、亦盛に彫刻に從事せり。今藤原時代初中末三期佛像の樣式を比較するに、初期卽ち定朝以前の作は專門の彫刻家ならざる僧徒等の手に成りしもの多く、其の面相の一部は威嚴あり、品格ありて、刀を施すこと亦精密なるも、其の體軀の全部は頗る不整頓にして、或は寸尺の權衡を失ひ、或は四肢及び服飾の如き粗漫にして、彫刻の精を得ざるもの多し。藤原道長の法成寺を興し、定朝の大に技を振ふに及び、面貌は勿論全體の姿容に威嚴又は品致を顯はさむことを欲し、寫實の點にも意を用ゐ、寸尺の權衡をも得せしめ、又木割の法彩色の術等もこれより大に精巧を加ふるに至れり。而してその技術上に當代の人の好尚の顯はれし特異の點は、全身豐滿にして、顏面圓く、眉目細長く、襞裙柔かに、すべて高雅の風格を帶びたるにあり。又當代末期の作は技術の巧緻を加

（法隆寺所藏正倉院鳥）圖三十二百第

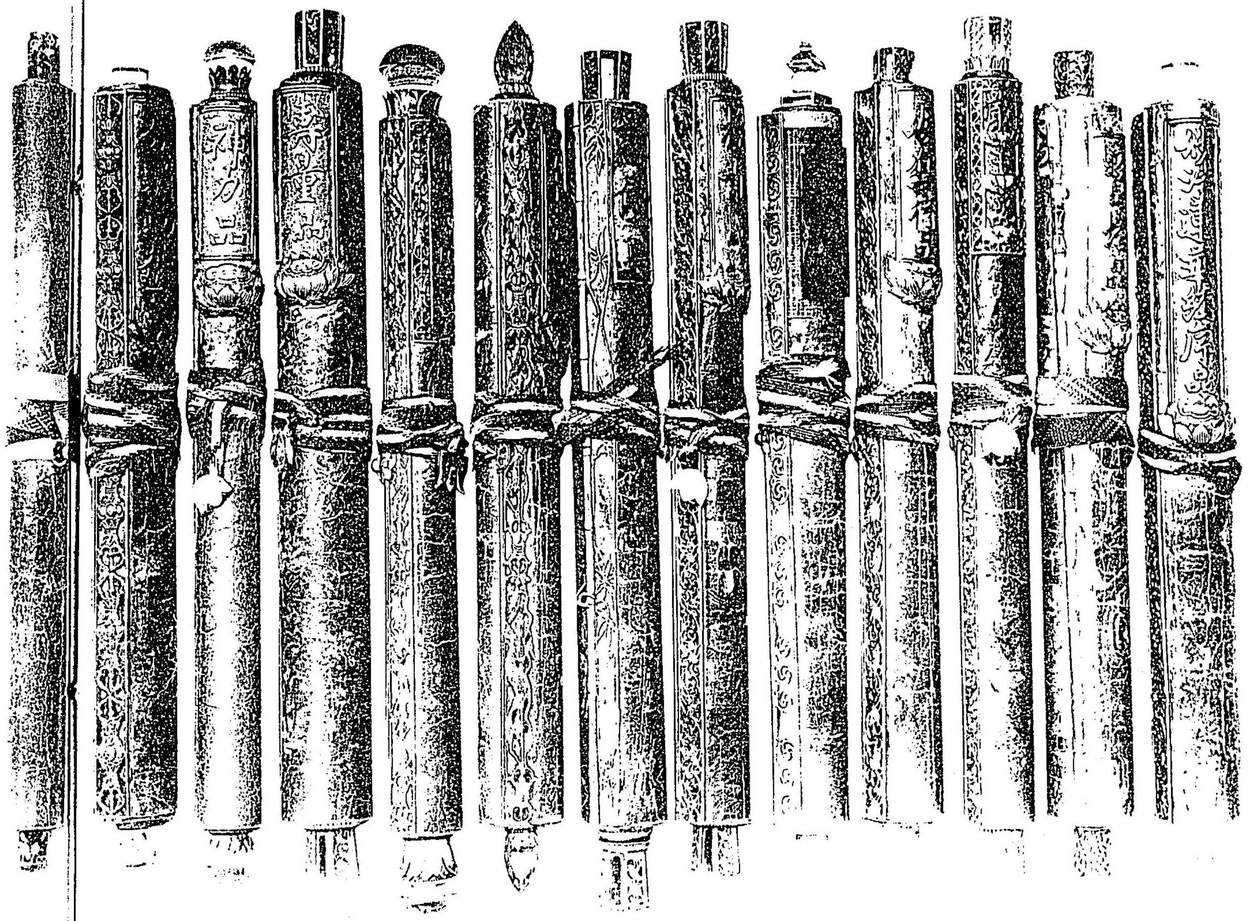
（法隆寺所藏光原藤佛）圖四十二百第

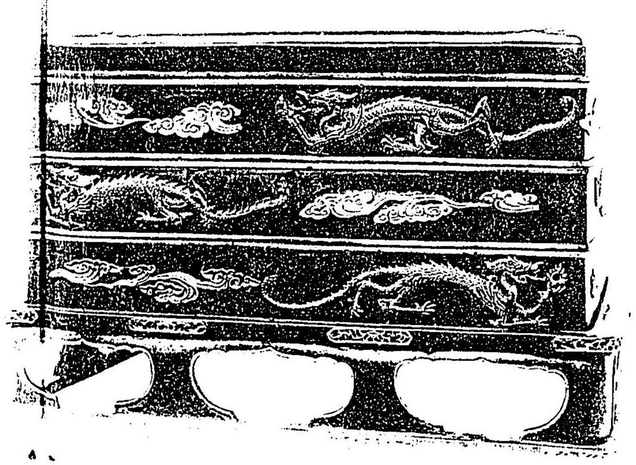


第百二十六圖（平氏納經卷裝飾金物）

第百二十七圖（平氏納經卷圖）

第百二十五圖（平氏納經卷裝飾書）





ふると共に、自ら氣魄を失ひて纖弱に傾き、佛陀も夜叉も羅漢も鬼畜も等しく柔和なること小兒の如く、婦女の如く、唯優美の點にのみ流れたり。又此の時代に及びては支那宋代の影響を蒙り、其の樣式に倣ひて裝飾の如きは大に華縟を增すに至れり。當代彫刻に名あるもの初期に於ては僧に多し。卽ち僧延祚、僧慈世、僧康尙等なり。延祚は延曆頃、慈世は應和頃の佛工にして、康尙は一條天皇の勅命にて多くの佛像を造れり。中期に至りて名匠定朝出づ。定朝は康尙の子にして、一代の間法成寺其の他許多の佛像を造り、治安二年法成寺金堂造佛の賞として、法橋位に叙せらる。是れ中古工人綱位の初なり。當時に於て其の作の世に尙ばれしこと非常にして、須彌の後身と稱せられ、又邦恒朝臣の爲めに造りし佛像の如きは、天下佛體の本體と稱し、永く模範として彫刻家の爲めに仰がれたり。覺助は定朝の子、七條の佛所にて父の業を繼ぎて法橋に任ぜらる。其の長男賴助、次男院助、賴助の子康助、康助の子康朝、又院助の長男院覺、二男院朝、院覺の二男院尊等並びに其の業盛にして、當代の末年に及ぶ。又長勢は定朝の弟子にして法印に叙せられ、三條佛所の祖と稱せられ、其の男圓勢、圓勢の長男忠圓、二男長圓、三男賢圓、長圓の男長俊等亦其の業を繼げり。又僧慢空、明順等も當代の中期より末期間の佛師として其の名を知られたり。

遺品

聖觀音像

陸中　天台寺藏

此の像木彫にして軀體は世に謂ふ鉋作といふものなれども、顏面は彫刻特に精密にして、品位あり、威嚴あり、同殿內なる十一面觀音、阿彌陀佛、吉祥天、四天王の類、何れも狀貌森嚴にして刀法頗る豪放なり。此の寺慈覺大師の開基と稱す。是等の像はそれより少しく後の作なるべく、藤原時代初期の作と見るべき好標範といふべし。

阿彌陀佛像　（第百二十八圖）

山城　法界寺藏

木像にして高さ一丈六尺あり。永承年中日野資業の建立せしものにして、藤原中期の末なれども、所謂定朝式なるものにして、定朝晩年の作とも認むべきものなり。相貌豐滿にして頗る品位あり。臺座光背共に具足して當代の式を見ることを得べし。

釋迦如來像

京都　禪林寺傳法堂藏

木彫にして高さ三尺に過ぎざれども、貌姿優美にして、彫刻極めて精巧に、衣襞の如き細かに眞を寫し出せり。白河天皇の承暦中高德の名ありし永觀が住持の頃の作なるべし。

千手觀音像　（第百二十九圖）　近江　長命寺藏

これも木彫にして、二尺九寸の像なり。面相手足共に精微を極め、氣魄は稍乏しきも、未だ藤原時代の風格を失はず。憶ふに當代末期の作なるべし。その光背臺座寶冠の類は、何れも後世のものなれども、本體は永く厨子中に密せられしを以て、恰も新作を見るが如し。

此の他法隆寺新堂の藥師三尊佛は當代初期の作なるべく、又仁和寺の彌陀三尊は後世の修覆あれども、藤原中期の作と認むべく、鳳凰堂の本尊も後世修覆の點多けれども、同堂と共に建立せられしものなるべし。又今近江國西教寺に安置せる藥師佛は、舊法勝寺の像を移しゝものと稱し、頗る圓滿の作なり。又山城國安樂壽院阿彌陀佛の像は、鳥羽上皇の御念持佛にして、全體よく具足せり。山城國法金剛院の本尊丈六の彌陀佛は、崇德天皇の世待賢門院再興の時の作なるべく、頗る雄大の觀あり。

第五節　建築

當代の建築術は先代の後を承けて、之れが完全なる發達を致したるものなり。此の時に當りて天台眞言の宗派最も盛に行はれ、天皇相將爭ひて佛門に歸依し、或は伽藍を創設し、或は已れの邸宅を捨てゝ寺院となしたり。而して其の裝飾は極めて華美を竭し、末葉に至りては益甚しきを見る。

當時の佛寺建築は二種の相異なれる方向より觀察すべきものなるが如し。其の一は卽ち彼の七堂伽藍の具備したる巨刹にして、其の形式は全く前期以來のものを襲用せり。法成寺、法勝寺の如きは其の最も莊大なるものなり。其の二は卽ち當時搢紳の邸宅を捨てゝ寺院とせるものにして、此の種に屬するものは未だ七堂完備の伽藍の形式をなさず、其の堂宇の如きも純然たる佛殿にあらずして、多少宮殿の趣味を混和せり。宇治の鳳凰堂、日野の藥師堂、大原の極樂院、京都市中なる愛宕念佛寺等之れに屬するものなるべし。此の種の建築は規模常に中庸を得て、曾て尨大雄偉の觀を呈せざるを常とせり。

第百二十八圖（阿彌陀佛像）

第百二十九図（千手観音像）

内部の裝飾は當代に於て最も華美を極めたり。通例内陣に須彌壇を置き、之れを繞らすに勾欄を以てし而して此等は多くは螺鈿を以て鏤めたり。壇上には佛像あり、其の上には天蓋を釣り、天蓋亦優美なる彩色及び螺鈿を施せり。内陣は多くは格天井にして、外陣は化粧屋根裏なり。垂木及び格には寶草花を畫き、格間及び垂木間にも間色彩あり。羽目板上には繪畫を施し、或は壁畫を有するものあり（日野藥師堂の如し）、柱には多くは菩薩の像と唐草とを畫き、長押、貫、組物等には盡く美麗なる色彩を加へたりき。然れども建築の外部は之れに反して甚だ簡素なり。其の多くは丹を以て塗抹せるに過ぎず。其の形式に就て論ずれば、其の全體のプロポーション、寧ろ甚だ低く、屋蓋若し入母屋なれば其の妻甚だ深く、屋蓋の傾斜は寧ろ緩にして、其の曲線亦峻峭の意なく、全體に就て優美の趣味を發揮せるもの多し。其の楹桷棟梁等は要するに過大ならず。繪樣及び彫刻の類は全然之れを缺けり。

宮殿建築に就て言はんに、彼の大内裏は屢火災に罹りて屢改築せられ、改築せらるゝ毎に其の規模に異同を生じたるが如し。而して大内裏と並びて又里内裡の建築起れり。里内裡は元來大内裏の改築に當りて假りに皇居とせる所にして、當時搢紳の第を以て之れに充てたるも、後世永く之れを皇居とするに至りたり。里内裡中其の規模の最も整備せしは、閑院、富小路、土御門等にして、實に彼の大内裏と寢殿作りとの混合物なりしなり。

寢殿作りは當代に於て搢紳の邸宅として用ゐられたる建築形式なり。其の主なる建築を寢殿と名づけ、大さ七間四面若しくは五間四面なり（一間は通例凡そ一丈）、之れを身舍とし、其の周圍に廂を繞らし、廂の外に更に椽を繞らし、高欄を附す。正面及び左右に階あり。屋蓋は四注にして檜皮を以て之れを葺く。身舍は幾多の室に區劃せられ、主人公の起臥する所とす。寢殿より北、東、西（寢殿は南面し、南は庭に向ふ）に廊を作り、北、東、西の對の屋に到る。對の屋は家族の起居する所なり。東西對の屋より南方に廊を出し、其の盡る所に東に泉殿、西に釣殿を建つ。泉殿、釣殿は寢殿と共に南庭を包みて池に臨めり。門は西面に四脚門を開き、釣殿と西の對との間なる廊を貫通して寢殿の前に出づべからしむ。是れ寢殿作りの最も普通なる場合を略述せしものなり。

寢殿内部の裝置は身舍及び廂の外面に格子あり。格子の内面には帷を垂る。身舍は障子にて適宜の數室に區劃せられ、其の主室には中央に帳臺を据ゑ、左右に置畳を設け、三尺几帳を立つ。帳臺は寢床として用ゐられ、置畳は起座の時に用

う。座の傍には二階厨子を置き、日用の雜具を載せたり。

神社に關しては多く記すべきことなし。只前期の形式を墨守し來りたるを知れば足れり。

遺物

山城　平等院

平等院鳳凰堂

第百三十圖は山城宇治の鳳凰堂なり。其の「プラン」尤も奇異にして、木堂、翼廊及び後尾より成り、木堂は三間二面にして、裳階を繞らし、翼廊は重層にして、木堂の左右に連り、折れて前方に向ふ。其の折るゝ所の隅角の上に高閣あり。後尾は單層にして木堂の後に連れり。其の全體の配合、極めて珍奇にして、遙に大内裡の八省院及び豐樂院等の建築配置と相酷肖し、其の輪奐の美絶倫と稱せらる。實に本邦無二の美觀たり。其の本堂内部は第百三十一圖に示すが如く、四壁に精巧なる繪畫を施し、柱、組物、貫、天井等悉く色彩せられ、天蓋須彌壇等には螺鈿を鏤入し、高尚優美の氣韻溢るゝが如し。實に是れ皆當代美術の標品たらざるはなきなり。

大和　興福寺

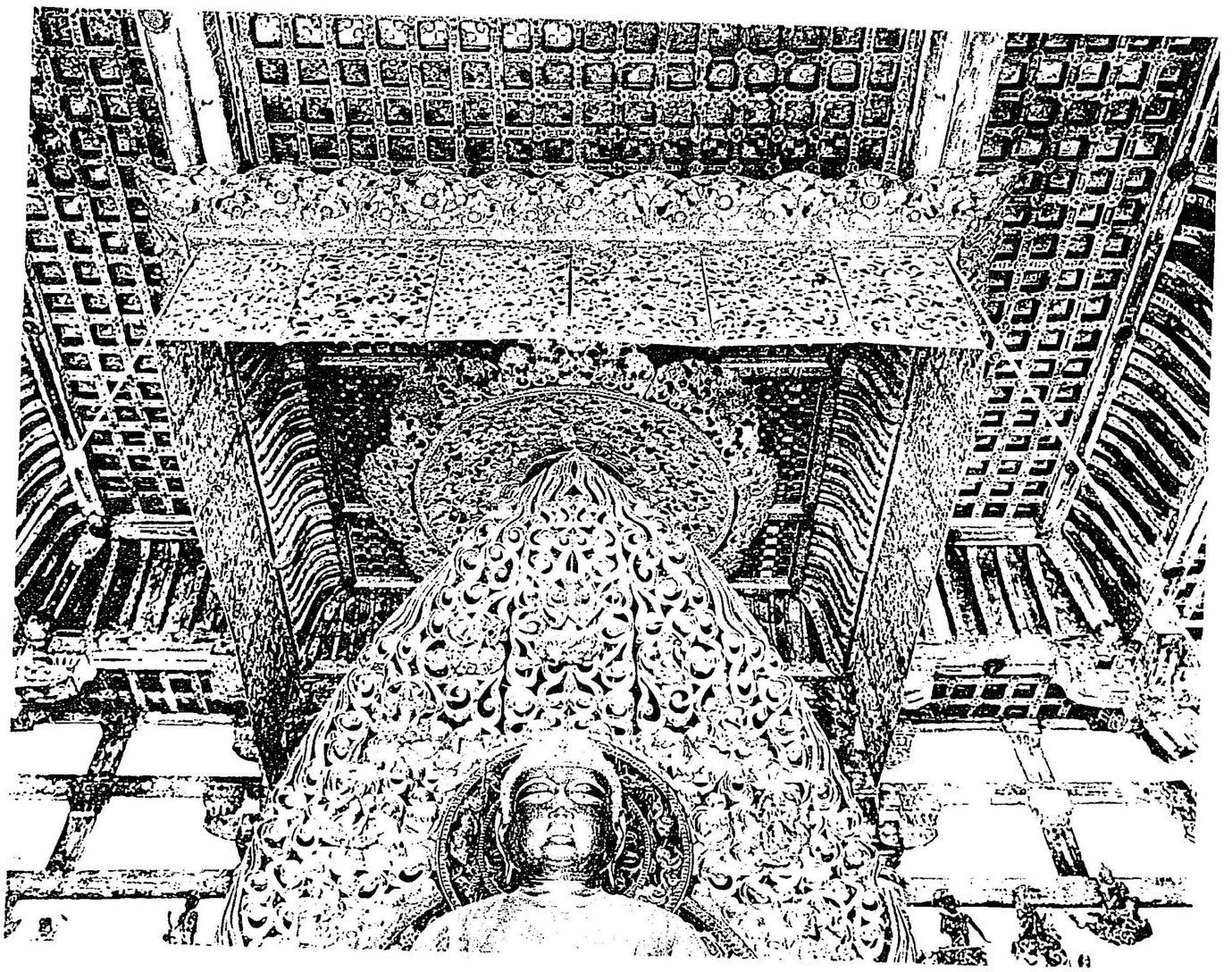
興福寺北圓堂

大和奈良興福寺の北圓堂も亦當代建築の好標品なり。其の「プラン」は八角形をなし、八角の土壇の上に立つ。其の「プロポーション」の優麗なること他に多く類例を見ず。而して其の特に注目すべきものは、其の屋蓋を作る曲線の形狀なり。北圓堂の屋蓋の曲線は普通の「コンケーヴ」にあらずして、却りて「コンヴェキス」をなし、八角の稜に當る所に於て、卽ち「インフレキション」を有する曲線となれり。是の如きは實に平安の嗜好なり。寶珠の形狀の奇にして優秀なる亦稀に見る所なり。

其の他當代の建築にして其の全部若しくは其の一部を存するものは、山城に於ては醍醐寺五重塔、大原三千院、日野法界寺、淨瑠璃寺本堂及び京都市内にある六波羅蜜寺及び愛宕念佛寺の本堂等なり。大和に於ては興福寺の三重塔あり。陸中には中尊寺の金色堂及び經藏あり。就中中尊寺の金色堂は三間四方の小堂なれども、もと内外悉く金箔を以て之れを被ひ、内陣の柱は七寶莊嚴と稱し須彌壇、勾欄より内陣に於ける各部は悉く螺鈿を鏤め、彼の鳳凰堂と共に當代建築の尤も美麗を盡したるものに屬せり。

第百三十圖　平等院鳳凰堂

第百三十一圖（平等院鳳凰堂內部）



要するに當代建築界の創意に屬するもの一寢殿造りを大成せし事、二、宮城建築と寢殿作りとの混合建築を生ぜし事、三、寢殿的佛寺を生ぜし事、四、建築裝飾に螺鈿及び蒔繪等を用ゐし事、是れなり。

第六節　美術的工藝

藤原の時代は宮室衣服諸調度の類始めて日本風の發達をなし、殊に其の裝飾の如きは前代に用ゐられし唐風の華縟なるものを棄て、圖案の淡泊にして情致あり品位ある新樣を創し、大に日本の特色を顯はしたりき。卽ち殿內の裝飾に於ける壁代、簾、几帳、地敷褥及び帳臺、厨子、棚、文房具、化粧道具の物、又官服を始め男女各種の服裝、輿車馬具の類、何れも本邦生活上の便宜に適應し、全體の結構は簡單なるが如きも、形狀よく整ひて彩色美はしく、鳥獸草花の模樣輕く點裝せられて、眼に煩はしからず、然かも其の鳥は皆謳ひ、其の花は皆咲み、風情極めて深く、品致最も高し。又技術の點に於ても自ら此の同趣の風尙に由りて、强て細巧を用ゐ緻密を施さず。宮の如きは身と蓋との正しく相合はざるも、其の製作の自然に出でゝ雅致あるを賞し、織物の如きは密に其の糸の緊らざるも、刱りて模樣の浮き出で、膚に觸れて柔かに感ずるものを愛でたりずべて當代技術家の手指は優美なる意思に任せて自由の働をなさしめたるものといふべし。されば間俗眼には當代の製作を以て技術の幼稚にして粗拙を免れざるものと誤認せらるゝこと少なからざれども、其の殘缺の一片も、廣く名代の美術品を賞鑑し、多くの經驗を積みし人の眼識には、每に必ずや其の雅致に富み品格の高きこと、古今に卓越せるを嘆賞せられざるはなし。

金　工

當代の金工は他の技術と等しく法成寺の建築に由りて、特異の發達をなしゝものゝ如し。其の殘影とも見るべき鳳凰堂並に金色堂の裝飾金具は、形狀の美、模樣の巧、他の時代に比類すべきものなく、且各部面よく對偶して披離の觀なし。平氏時代に至りては一面に服飾の華美を好み、一面に武器製作の進步せしが爲めに、一段の精巧緻密を加ふるに至れり。

中尊寺金色堂は天仁二年藤原清衡の建立せし佛殿にして、內外金箔を貼し、柱梁枓栱何れも彩藻を施し、螺鈿を嵌し、莊嚴の美を窮めたり。世俗呼びて光堂といふ。其の須彌壇を裝飾せる金具の如き(第百三十二圖)殊に精巧にして、香狹間の孔雀形は半肉に毛彫を加へ、上下の緣に打ちたる金物は透彫にて形狀といひ、模樣といひ、すべて穩雅にして品位あり。又この金色堂に鄰れる經藏も、同時の建築にて、其の須彌壇には(第百三十三圖)伽陵頻伽及び佛器の模樣を裝飾し、これ亦精巧を盡したり。

平氏納經卷裝飾金物　　安藝　嚴島神社藏

此の經卷は當代末期の作に屬す。三十餘卷各其の裝飾の意匠を異にし(第百二十六圖)、軸は寶珠形に作りしものあり、又五輪の塔婆に擬せしもあり。緣金物も亦唐草あり、龍あり、竹あり、佛器あり、何れも細かなる透彫にして、精巧緻密を極めたり。又この經卷を納れし函は(第百二十七圖)烏銅にして龍と雲との彫刻置金物を裝せり。

この他當代金工の遺品は河內國土師神社に草帶に飾られし彫金物あり、菅公の遺物にして延喜頃の作なるべし。又伊勢國豐宮崎文庫に藏せる藤原秀鄕の太神宮へ獻納せし飾附の太刀金物は、これ亦當代初期の作なるべし。又鳳凰堂の天蓋及び堂內各部裝飾の金物、紀伊國淨明寺の須彌壇の金物は、殆んど金色堂と同樣の作なり。又大和國信貴山朝護孫子寺に藏する鶴に花模樣ある鏡、春日神社にある葦手畫の模樣を彫せし兜の殘缺等あり。

漆工

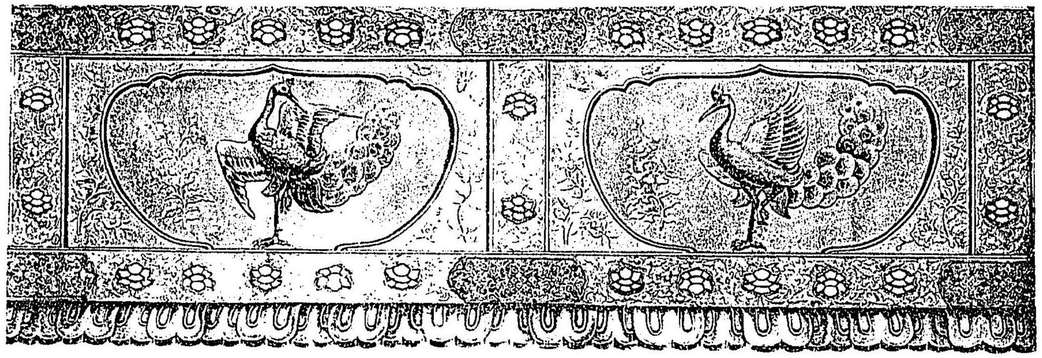
漆塗描金の器を用ゐること當代に入り益盛にして、醍醐天皇の世には延喜式を制せられ、美濃、上野、越前以下十五國は其の產する所の漆を貢せしめ、又內匠寮に於て使役する漆工は他の邑に遷ることを禁じ、漆器の製作を奬勵せられたり。漆工の業これより一層の進步をなし、漆畫蒔畫の技も精巧を加ふるに至れり。彼の繪畫建築等の意匠に長じ給ひし花山天皇は、親ら蒔繪の器をも作らせられ、硯筥に蓬萊山及び手長足長の圖を畫き、時人をして其の技の巧妙なるに驚嘆せしめられしといふ。同天皇の頃より撒繪の華奢に伴ひて蒔繪の工益精密を極め、地は梨子地の外に沃懸地とて金粉を以て全體を塗り塡めしものも製し出され、又磨出、平蒔繪等の外金銀の截金又は螺鈿を挾裝することも行はれて、遂にはこれを器物に施すのみならず、佛寺殿堂の柱梁壇楷等の裝飾に用ゐるに至れり。卽ち今日に現存する鳳凰堂の

第百三十二圖（金色堂裝飾金具）

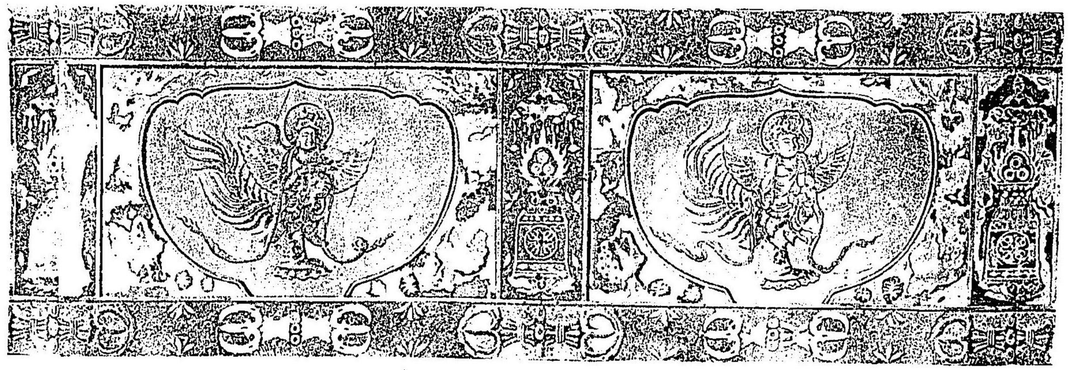
第百三十三圖（金色堂裝飾金具）

第百三十四圖（寶珠文倭錦橫被）

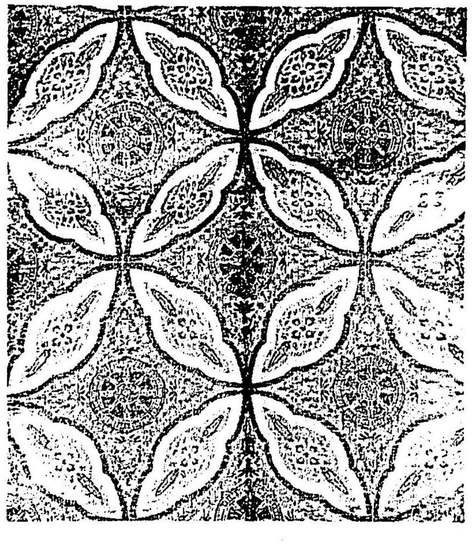
第百三十五圖（七寶文倭錦橫被）



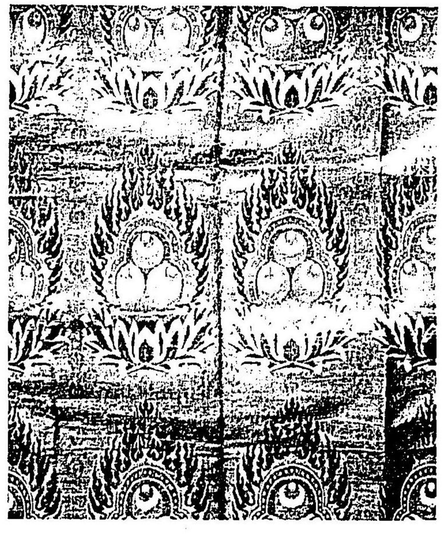
第百三十一圖（金色孔雀）



第百三十二圖（金色鳳凰）



第百三十三圖（金色蓮花）



第百三十四圖（金色蓮花）

（敦煌發現唐代織物）

第百三十五圖（金色蓮花）

（敦煌發現唐代織物）

内部天蓋須彌壇等は、黑塗に螺鈿の寶相花を篏裝し、中尊寺金色堂の内部は、悉皆金梨子地に螺鈿の模樣を施し、其柱のには蒔繪の佛像を描けるを見る。

遺品

蒔繪經唐櫃（第百三十六圖）　紀伊　高野山金剛峰寺藏

經卷を納るゝ小唐櫃にて金梨子地に澤邊に菖蒲の花咲きて、小鳥の飛び遊べる圖を蒔繪にし、鳥と花とは多く螺鈿を用ゐたり、脚部蓋裏等にも蝶鳥唐花の模樣あり、殊に懸子は巧妙の作にして、精密なる金銅透彫の聞き花形模樣を篏し、螺鈿をも點裝せり、藤原時代中世の作なるべし。

俱梨伽羅龍蒔繪錫杖筥（第百三十七圖）　大和　當麻寺藏

これは佛家の用ゐる錫杖といへる杖の頭を納るゝ筥にして、黑塗に俱梨伽羅龍の蒔繪あり（俱梨伽羅龍は不動明王の化現せし形なり）、地は梨子地にて繪はすべて磨出なり。その火燄など巧に濃淡を作り、精緻を極めたり、當代末期の作なるべし。

此の他もと法隆寺に傳はりて、今御物となれる蓬萊山を蓋裏に蒔繪せる筥同じく御物なる螺鈿にて鳳形の丸紋を篏せし大形の唐櫃同じく御物なる水に片輪車を蒔繪せる手箱、東大寺の藏なる螺鈿の寶相花を篏裝せる机などは、何れも有名のものにして、當代中期の作と認むべし。

織工

宇多醍醐の兩朝專ら殖産の道を講ぜられ、織工の如きも大に勸奬を加へられしより、諸國の調物織部司の製する所其に精巧を加ふるに至れり。當時伊勢、尾張、越前等の十二國よりは兩面錦を出だし、伊賀、伊勢、尾張、三河等の二十一國よりは文綾を貢せり。又織部司の製する所は櫟文錦、大暈綢錦、小花兩面錦、高麗樣錦、唐樣錦、又櫟穀綾、蟬翠綾、獅子綾、遠山綾、鷹菫綾等數十種の品類あり。中世藤原氏の榮華を極むるや、服裝の如き最も美を競ひ、文樣配合各意匠を凝らし、或は金銀糸を織り込み、螺鈿を裝し、刺繍を施す等、爭ひて好事を盡したりき。當代に作られし物語ものゝ如き、各章の殆んど其の半ば服裝の記事品評を以て塡められしを見るべし。晩年に及びても此の華奢の風は衰へざるのみならず、鳥羽天皇は衣紋を好ませ給ひ、官服に綾角を作り、平緒の類も華美を加へられ、崇德天皇、白河天皇の如きも、隨從の男女をして、盛裝

を凝らさしめ、屢寺院其の他へ行幸せられたり。これが爲めに織物には種々の意匠を出だし、精巧を增すに至りしことなるべし。

遺　品

寶珠文倭錦横被　（第百三十四圖）　京都　仁和寺藏

三條天皇第四子性信法親王の横被（袈裟の類なり）にして、蓮花臺に盛られたる寶珠の模樣を織り出し、地には密家祕寶を藏する標相たる羯磨（竪横に三股杵を組みしもの）を表はせり。地は藍色にて、羯磨は橙黄色、寶珠は淡青及び淡紫色、蓮の蕊と寶珠の枠とは綠色、蓮瓣と火焔とは赤色にして、配合最も美なり。殊に寶珠及び蓮瓣火焔等緻密なる糸の組み合せにて、其の色をぼかしたるが如き、機織の巧を極めしものといふべし。

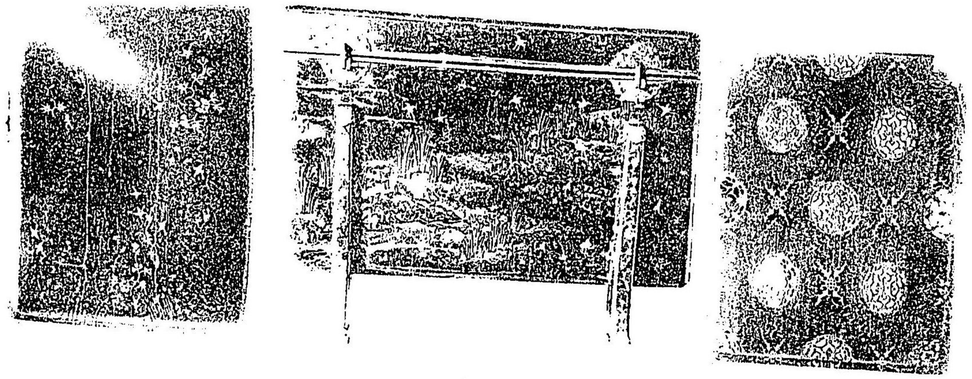
七寶文倭錦横被　（第百三十五圖）　京都　仁和寺藏

これも性信法親王の横被にして、霰形の地に七寶文を顯し、其の中に輪寶と獨杵とを配せり。色は黄赤青綠橙黄紫、淡紅、白等にて織り方柔かなれども、然かも文樣整然として亂るゝことなし。

この外仁和寺には錦の小さき袋裂數點あり。又高野山に祕藏せらるゝ灌頂川の寶冠並びに天蓋を張りし錦、京都東寺に藏する綾錦の小裂數十種、大阪四天王寺の守袋を張りし錦、嚴島神社の安德天皇の御產衣と稱する錦など、並びに藤原時代の物にして、何れも柔かにして文樣皆雅致あり。

第百三十六圖（詩繪經唐櫃）

第百三十七圖（俱梨伽羅龍詩繪錫杖筥）



第百三十六圖　同六十三の裏

第百三十七圖　同裏面の織模樣

第三章　鎌倉幕政時代

第一節　當代美術に及ぼせる社會の情況

平氏武臣より出でゝ、藤原氏の驕奢を學び、專横を極めしかば、二十餘年榮華の夢、忽ち源氏の軍に破られて、一族西海の水沫と消えぬ。源頼朝乃ち政權を收めて朝府を鎌倉に開くや、鎌倉は政治の中心となり、政務は擧げて質直雄壯なる武士の手に歸せり。されば國家の形勢是れより變じ、優柔閑雅なる都風は漸くすたり、素樸剛悍の武士風行はれて、衣食住の有樣より、文學美術に至るまで多少の變遷を見るに至れり。

さはれ京都と鎌倉とは地に東西の差あり、京紳と武士とは性に柔剛の別ありて、文武の能を殊にし、風俗習慣好尚をも異にせり。故に政權の地一旦に變移せりと雖も、前代の末より發現せし京紳武士の二氣風、依然社會に二流をなして、文學に美術に宗教に暫く其の特調を示せり。

惟ふに京都は前代來屢、馬蹄に蹂躙せられ、暴僧偸盗に剽掠せられて、いたく荒廢せりと雖も、猶聳殿の下なれば、月卿雲客安住して、舊觀を保つを得たり。又政權武門に歸して、天皇徒らに虛器を擁するに至り給ひしも、猶官位任命の權を有せられ、幕府の尊崇淺からざりしかば、皇室の尊嚴古へに變らざりき。故に京都は依然萬民景仰の府、文華の中心となり、文藝技工の如きも全く衰へざりしこと、後鳥羽天皇大嘗會を行はせられんとて、齋殿及び衣服器財の製作に召徵せられたる各種名匠、其の地に多かりしにても知らる。殊に歌道に至りては名家彬々輩出して、其の盛なること翊りて前代に軼き、勅撰歌集の世に出でしもの多かりき。さはれ此等當代初葉の京都の文藝は、唯前代を繼承せりといふの外、異采あるを見ず。是れ京都に久しく外來の刺激絶え、當代に入りてより大兵革なかりしがゆゑに、さなきだに儀式位階の事を司り、門閥の家を世々に繼ぐの外、實務なきに至れる卿相、益閑を得て、文藝容飾に耽り、優遊逸樂を事とし、優柔都雅の風を更へざりしに因るべし。

鎌倉を中心とせる所謂武士風とは、如上の優柔都雅、頗る貴族的なる氣風と異なり、雄壯質樸にして平民的なりき。由來武士は僻陬の地に在りて、浮華遊惰の都風に染まざりしが故に、京紳の華奢風流にして、儀式容飾を尚ぶに反し、質樸麁豪にして虛飾形式を嫌忌せりき。加ふるに頼朝武門政治を創するに及び、深く朝廷の虛文繁縟の弊を察し、平氏の驕奢

に鑑みて、或は法度を簡畧にし、或は武辨の風儀を養成し、北條氏次で執權となるも、亦率ね質素勤儉を旨とし、益此の士風を馴致せしかば所謂武士道の極致を見るに至れり。されば武士は都人士の如く綺羅を飾り、施朱涅齒の嬌態を學ばず、遊戯の如きも詩歌管絃を嫌ひて犬追物、流鏑馬、笠懸、相撲等のあら〳〵しきを好み、時には隊伍を組みて那須野又は富士の裾野などに狩獵を試み、士氣の練磨に努めたり。されば鎌倉開府以來諸國の名工こゝに集り、又繁榮の地となるに隨ひ、各地の商賈先を爭ひて移住し、綾羅錦繡を始め、其の他海外の物貨を齎して、此處に鬻ぎたりしも、此の地に萌芽せし藝術は甚だ稀なりき。況や文事に至りては緇徒の外顧みる者なかりしも、偶武士の上流に諷詠せられし和歌の如き調の雅樸にして想の雄渾眞率なる、優麗纖巧の公家風に反して、さすがに武士の意向を示せるを見る。

かく京都と鎌倉とは其の初め氣風習俗を異にせしかど、承久の亂後、京都の警固として兩六波羅の地に關東の武士許多在番するに及び、華奢優柔なる都人は、武士の風に化せられて、漸く剛健質樸となり、射御狩獵の武技を却りて演ずるに至りぬ。加ふるに北條氏陪臣の身を以て朝廷を抑壓するや、憂憤的思想の京洛に鬱勃するあり、元主忽必烈歐亞征服の餘威を以て、敢て我れに臨むあり、さなきだに強暴倜しがたかりし神人僧侶、元寇の役に降伏鎭靖を祈禱せし功に誇りて、益驕傲爭擾を極むるあり、大火內裡に及び、諸國大に饑えて、窮民都下を剽刼するあり、中央文弱の思潮日に振盪せられて、尙武漸く風を成すに至れり。而して此等諸現象及び前代末より興廢治亂の定まりなきが、他面には自然に无常の觀念を皷吹して、宗教思想を甚しく瀰蔓せしめたり。前代文藝の一般に優美にして、樂天的なるに反し、當代中葉の文藝の雄壯にして、而も厭世的傾向を帶ぶるに至れる、是れが爲めなり。

都風は雄壯となれるに反し、鎌倉にては將軍に皇子親王を請ひ、營中に早畫番を置き、和歌管絃騎射等の藝に通ぜる士を撰びて其の員に充てしより關東の將士漸く文藝を弄びて、京紳と其の從來の氣風を代ふるに至れり。但し仔細に觀察せんか、執權北條時賴時宗等尙武の風を策勵するあり、源を宋元に發せし文藝の、かの隋唐に淵源して、京紳優柔の風に化せられたる京都の文藝に對するあり、禪宗と共に大に關東人士の氣風に投ぜる日蓮宗の極力京地の諸宗諸法を破折詆排するあり、道隆普寧祖元西磵、一寧の諸僧修禪の餘閑に、京都從來の書態又は畫風と異なる純粹漢樣の書態又は墨畫を示すありて、鎌倉の風尙俄に變らざりき。されど時宗の子貞時襲職の頃より優柔風をなし、其の子高時暗昏政を權臣に委ね、鬪犬田樂の戯を好み、宴遊驕奢を極むるや、士風跡を鎌倉に絕ち、衆情武門を離れて、大權再び朝廷に歸し、遂に建武の中興を見るに至れり。

建武元年（西紀後千三百三十四年）後醍醐天皇公武を一統して、政事を親らし給ふや、容儀を尙び、土木を起し給ひければ、將に衰頽せんとせる美術及び工藝稍復興せんとせり。されど不幸にも鴻業半ばにして沮喪し、世は南北兩朝に分れて、凡そ五十餘年間擾亂紛糾を極めければ、偶萠芽せる藝術大に阻害せられき。さはれ朝廷南北に分立し、紀綱弛廢せしより、我が邊民又は武士にて私に高麗及び元に航し、種々の物品を齎して、後の風尙を動かしゝのみならず、爭權競武の時勢は權略智謀を貴ぶ風を起し、此の風宋より渡來せる華縟濃麗の佛畫類と共に影響して、美術に纖巧繁瑣の趣を添へたり。

京都鎌倉の狀態の消長せる間に在りて、絕えず人心を刺激して、文藝にも影響を及ぼしゝは宗教思想なりき。當時一般の人心、皇室の衰微勢家の盛衰に無常を觀じ、天變地妖の頻々たるに不安の念を起しゝに、あまつさへ朝廷佛寺を敬し、賴朝以後の武將はた敬神崇佛を施政の一手段となしけるより、宗教思想頗る盛なりき。就中禪宗、淨土宗、眞宗、法華宗及び時宗の如き、上流若しくは下流社會に普く行はれて、最も人心を刺激し聳動せしめたり。禪宗は自力難行、餘は他力易行の宗旨なれども、皆從來佛教の反動として簡單通俗を旨とし、外形を輕んじ、努めて心意の安樂を得んことを期せしが如し。故に諸宗相並びて流行し、當時質素の俗と相合して、美術にも甚大なる影響を與ふるに至れり。就中禪宗の如き建築及び工藝に新趣を寄與し、又入宋若しくは渡來の禪僧一種淡雅なる墨畫を傳へて、茶道に於けるが如く、大に後の風尙を動かしたり。要するに當代美術の質直雄壯、悲哀の致を帶びたる一面の因は、此等諸宗に懸れりといふも不可なかるべし。

第二節　當代美術の變遷及び特質

前代凡そ三百年間、京紳の榮華に養成せられし貴族的美術は、八百年來の今日に至るまで、長く其の影響を及ぼし、高雅優美なる其の趣致風韻に至りては、後世仰ぎて模範とする所なり。殊に當代の如き直に其の後を承けたるを以て、其の美術は概ね前代の摸倣に似て、著しき新機軸を示さゞりしが如し。眞實、吉光、隆兼等の繪卷物、春日託摩の佛畫類、何れも

前代の故式を襲用して、而も其の美を成しゝが如き、其の一例なり。さはれ内には新たに武門政事の起るありて、天下の形勢、社會の情況殆んど一變し、外には宋の文化の人心を刺激するあり、美術はた異調を呈せざるを得ざりき。

案ずるに平清盛宋國の貿易を興し、兵庫港を修め、宋人を福原別莊に延見せし頃より、鎮西諸江津に彼我の船舶相交ばり、我が僧侶の彼處に游學し、彼の僧の我れに來る者絶えざりき。蓋し宋朝は南北を通じて三百二十年、其の間形勢いくたびか變革せりと雖も、五季極衰の反動として興り、後南宋の世となるも、金元の入寇殆んど虚歳なきが爲めに、兵勢大に張り、悲壯激切の情熾んなりき。然れども我が當代初期の美術に影響せるは、此の如き宋の時勢を表現せしものにありて、寧ろ邦人當時の嗜好に投ぜし彼れが精巧緻密なる佛畫の類なりき。故に之れが影響は却りて佛畫師の徒をして其の圖樣を華麗ならしめ、又寫實に傾かしめたり。後に僧徒其の他の往來頻繁となり、又南北朝の爭亂起り、個人的通交行はるゝに及び、漸く宋の特色たる禪宗と文學とに由來せる恬淡瀟洒なる風尚を輸入し、我が美術界に一大變化を來たすに至れり。

又質素剛健なる武士風の國内に普及するや、時尚は漸次前代の纖巧惰弱なる風習を排して、美術の上に一段の活氣を加へ、筆致を雄健ならしめ、刀法を端嚴ならしめたり。然れども、武人勁勃の氣の發する所、動もすれば峻嚴に過ぎ、俗了に陷ることを免れざりき。殊に北條氏の執權以降武人次第に木強粗豪の性質を失ひて、智巧と權略とを增し、一般の事物おのづから緻巧繁密の傾向を現はし、美術は大に閑雅優長なる趣を失へり。

又彫刻を初め美術的諸工藝の如きも、特異の意匠を示し、新趣を發揮すること能はざりしも、其の技術の點に於ては頗る精巧緻密を極め、佛師快慶、運慶等が、案出せし彫刻木寄法の如き、其の技の巧妙なる、長く佛工の範となり、甲冑工明珍家の作品の如きも、後世及ぶべからざる細技を盡しゝを見る。

第三節　繪畫

當代は學理に暗く文藝に疎き武斷政治の世にして、其の中代以下の如き、思想の泉源は涸燥し、美術の如き更に獨創の新式を出だすこと能はずして、徒らに前代の製作を摸倣せしに過ぎず。されど繪畫に於ては藤原氏の末年より自然に力を寫實に用ゐるの傾向を生じ、人物鳥獸皆其の姿態を究めて生々活動の趣を寫し、一般の衆俗の目を歡ばしむべき圖樣を描き出だせり。殊に佛畫の如きは支那南宋の精巧縟麗なるもの次第に輸入せられ、自らこれに倣ひて作圖も彩色も益緻密を加ふるに至れり。

當代に製作せられし繪畫は固より佛畫最も多し。次に多く畫き出だされしは繪卷物にして、特り小說史話などの物語ものゝみならず、社寺の緣起、神佛の靈驗記、名僧の傳記等大に其の種類を增せり。これが爲めに、この卷物に適合する一種の圖立大に發達して、展舒の間次第に圖樣の變化し、或は前後に於て自ら照應をなす等意匠の巧を弄せしもの少なからず。

當代の畫風には大約五派あり、卽ち一は巨勢派、一は託摩派、一は春日派、一は土佐派にして、又一は末期に至りて起りたる宋元墨畫派なり。然るに當代に於て最も盛なりしは土佐と託摩とにして、春日の如きは僅に其の畫統を維持せしも、多くは土佐の爲めに變化せられて、兩派折衷の如き圖を作り、晩年に及びては明かなる區別をなすこと能はざるに至れり。此の他二三の流派を混合して專ら佛像を畫きし畫佛師の徒少なからず、中には其の筆の老熟を得たるもの大にありしなり。

巨勢派は前代以來唐の古風を傳へ、温雅にして細大の變化なき線を用ゐ、專ら佛像の類を畫きしが、託摩の筆致時好に適し、其の畫の盛に行はるゝに及びては、自ら其の下風に立ち、多少筆を枉げて託摩の風を學びしもの少なからず。されど其の本統の畫家は圖樣並に筆意に一種託摩の爲し能はざる古雅なる風韻を保ち得たりしなり。當代巨勢派にて其の名を傳へたる畫家は、有家、有久、惟久、行忠等にして、有久は多く東寺其の他の佛像を畫けり。惟久は飛驒守と稱し、南北朝初頃の人にて、巨勢より出でて自ら一風を出だせり。有名なる後三年記の畫卷は其の筆なりといふ。行忠は佛畫雜畫共に善くし、南北朝の頃に名あり。

託摩派は當代盛に佛像を畫けり。此の一派は爲成以來漸々其の筆致を變じ、當代の中頃なる榮賀の頃に至りては、專ら雄健にして華麗なる宋畫の筆法を學び、全く古格を失へり。此の派の當代に名ありし畫工は、勝賀、成忍、爲行、榮賀、了尊等なり。勝賀は鎌倉初の人にして一代の間許多の佛像を畫き、これより此の派の盛大を惹き起しゝが如し。榮賀に至りて宋人李龍眠、顏輝等の筆法を學び、多く羅漢の像などを畫き、殆んど支那畫再興の端を開きたりき。

土佐及び春日の二派は本邦畫の特風として、共に其の筆を斜に運用せしも、土佐は太くして沈實なる線を描き、春日は細くして輕儁なる線を描きしが、當代に入りては二派混合して、遂に區別すべからざる畫趣を生ずるに至れり。殊に土佐派は名家踵を接して起り、各多少の新意を出だし、頗る變化の巧を弄せり。而して此の派の畫工は藤原時代に起りし穩雅優美なる風韻を維持し、益日本的の意匠を發揮せしなり。土佐派に出でし當代有名なる畫家は信實、慶忍、邦隆、行長、吉光、光秀、光顯、圓伊、豪信、行光等にして、又始め春日より出で土佐に等しき畫樣に變ぜし一流には、長隆、隆兼、隆相、長章等あり。

藤原信實は隆信の男にして、正四位左京權大夫に敍せらる。圖畫に巧にして其の筆品致に富み、殊に肖像畫に名あり。又和歌に名ありて頗る當代に重ぜられたりき。

慶忍は從來其の名を誤りて慶恩と傳へられしが如し。攝津住吉神社に仕へし人なるべし。介法橋慶忍筆と記るされし因果經の畫卷あり。又有名なる平治物語畫卷も此の人の筆なりと云ふ。共に筆力雄健にして圖樣活動の趣を得たり。

藤原吉光土佐と號す。後伏見帝の世に法然上人の畫傳を畫き、又正和の頃南殿の賢聖障子を畫き、名手と稱せらる。

藤原光秀は吉光の男にして、筆致清雅なり。法眼圓伊は正安年中、一遍上人畫傳を畫きて名あり。

藤原長隆は土佐春日を折衷せしものゝ如く、筆鋒頗る鋭利なり。住吉物語畫卷、蒙古襲來畫卷等遺墨少なからず。又力を寫生に用ゐ、其の草花鳥獸の類を寫生せし粉本今に傳はれり。

高階隆兼は延慶頃の人、四位に敍し、給所預に補せらる。當代の妙手にして、精密なる觀察力を以て寫生に意を用ゐ、又圖案に巧にして畫卷の如き各段皆其の趣を變化せしめたり。彩色の富麗なる亦當代此の人の右に出づるものなし。彼の繪卷物の巨擘として世に愛重せらるゝ春日權現驗記は、卽ち此の隆兼の筆なり。

藤原隆相は長隆の男にして、父の筆意を學び一種飄逸なる趣を出だせり。

宋元墨畫派は當代南北朝の時に起り、多くは支那に渡りし禪僧に由りて傳へらる。多くは宋代の馬遠、夏珪、梁楷、牧溪、玉澗などの墨畫を學びしものなり（是れより先き寛元年中道隆禪師は宋國より來遊し、又無學禪師は弘安年中に宋より西硎寧一山等は正安年中に元より來化し何れも畫を作る。これ亦多少墨畫流行の端を開きしものなるべし）。卽ち當代の筆者は可翁、默菴、妙澤等の禪僧にして、全く其の禪餘の墨戲に成る。可翁は名僧にして、支那に渡りて法を求め傍ら墨技を學びて歸る。此の畫の開祖なとも稱すべし。遺墨には觀音又は寒山拾得等の圖多し、何れも十分の禪味を帶び殊に骨法の妙を極む。默菴も亦支那に渡り畫を學びて歸る、專ら牧溪の筆意を慕ふ。妙澤は天龍寺に住し、多く不動の像を畫けり。

遺　品

平治物語畫卷　（第百三十八圖）　男爵　岩崎彌之助藏

平治物語は二條天皇の時藤原信賴源義朝等亂をなしゝ物語なり。この畫卷は住吉慶忍の筆なるべく、筆致勇健にして圖樣活動し、眞に戰亂を目擊するの感あり。こゝに出だしゝは信西入道の首を打ち道路を渡す段なり。

地藏菩薩畫像　（第百三十九圖）　帝國博物館藏

巨勢家の筆にて圖樣端正、着色穩雅なり。衣の模樣の如きは細かなる截金を裝せり。

聖德太子畫像　（第百四十圖）　京都　仁和寺藏

この畫は從來巨勢家の筆と稱せられしものなれども、衣紋の剛き描線といひ、又華麗なる彩色模樣といひ、託摩派の筆と認めざるべからず。

春日權現驗記畫卷　御物

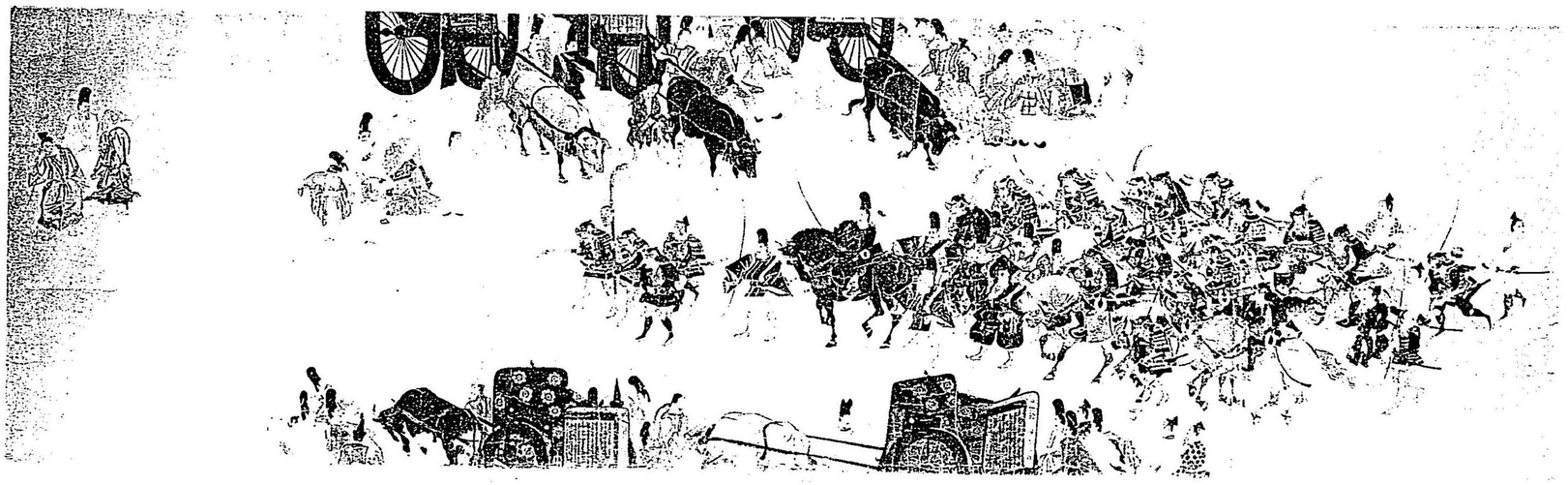
春日權現の種々靈驗ありしことを記るせしものにて、全部二十卷あり。當時給所預なりし高階隆兼の筆にして、當代貴紳の宮室を始め市坊里閭の樣、男女老幼の風俗、又器具調度の類に至るまで、細かに實物を直寫して毫も差ふことなく、其の筆の老練にして、彩色の麗美なる、又各段の意匠を分ち圖樣を變化せしめたる、實に畫卷中の巨擘と稱すべし。第百四十一圖は春日明神齋宮女御の夢の枕に立たせらるゝ段なり。又第百四十二圖の方は京都火災後の樣なり。

此の他當代名畫の現存するもの頗る多く、榮華物語畫卷は傳へて藤原信實の筆といへり。前代の末か當代の初の作なるべく、圖樣優美にして畫品高し。又御物なる畫師草子は亦信實の筆と稱せり。當麻曼陀羅緣起畫不動利益緣起畫卷は慶忍の筆なるべく、知恩院法然上人畫傳は土佐光吉等數人の筆なるべく、又當麻寺法然上人畫傳は四十八卷共

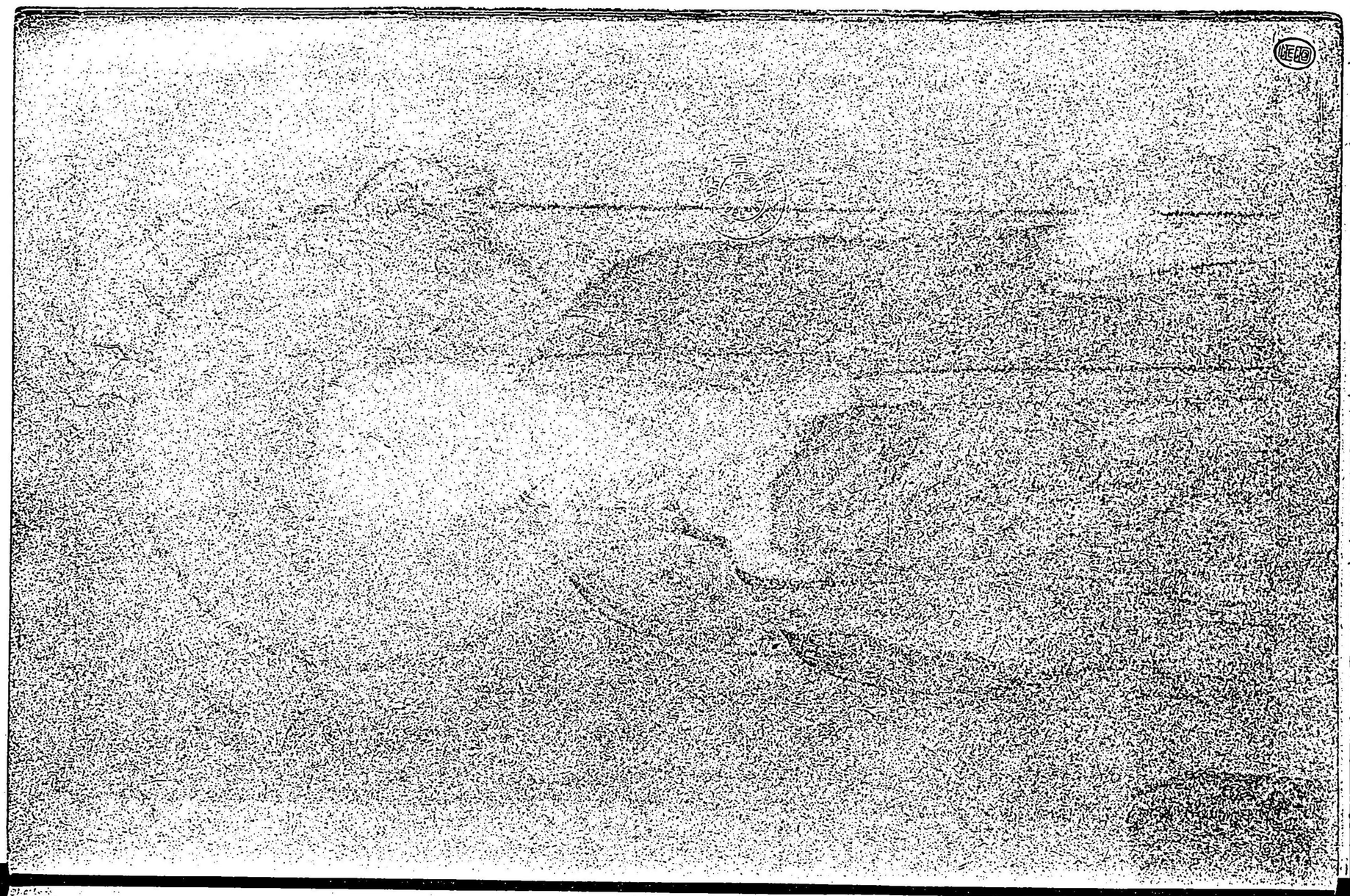
に土佐光吉の一筆に成り、精練の技を見るべく、石山寺縁記の畫は高階隆兼外二人の筆なり、住吉物語畫卷、蒙古襲來畫卷は土佐長隆の筆と稱し、六條道場一遍上人畫傳は法眼圓伊の筆にて、四條道場一遍上人畫傳は土佐行光の筆なり、北野天神縁起畫卷は筆者詳ならざれども、當代末期の作なるべく、圖樣磊落にして筆も亦適逸なり、又近江國來迎寺の十界圖も筆者詳ならざれども、圖樣巧にして地獄餓鬼畜生道など、非惨の樣實況を目擊するが如し、藤田鹿太郎藏二十五菩薩來迎圖は圓熟の筆にして、九鬼男の藏する一宇金輪圖樣は其の筆端嚴なり、井上伯の所藏にて蒙古退治祈禱の爲めに土佐長隆の畫きしといふ不動畫像は、畫趣の勇健を以て稱せらる、又東京護國寺の愛染明王像、遠江大福寺の普賢十羅刹女畫、福岡子爵所藏の瑠璃光藥師十二神將畫像など、何れも名品なり。

第四節　彫刻

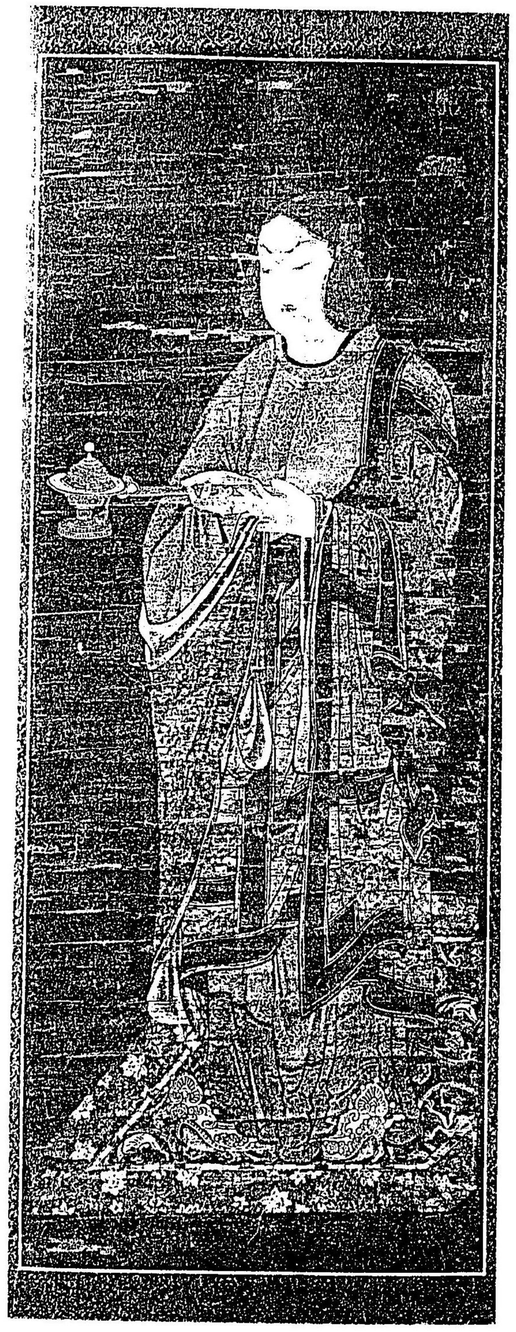
藤原氏隆盛の後を承繼したる當代の佛像は、美術思想の衰頽したるにも係らず、其の技術大に進歩し、前代の圓滿豐富なる樣式を一變して、雄健豪放となり、嘗て佛師定朝が定めし所の木寄法に基き、更に實物寫生の新趣を加へて、細かなる造像の法則を立てたり、之れを快慶運慶となす、而して此の二人は實に當代を代表すべき佛師とす、これより以後佛師は概ね此の法則手法を以て金科玉條となし、各其の家に祕し傳へて今日に至るまで、其の法を墨守して改めざる所以のもの誠に偶然にあらざるなり、惟ふに當代初期の作品は、快慶等のあるありて多少前代の趣味を表示せるのみならず、更に一方には雄健豪放の彫刻起りて、刀法鋭くして深く、褶襞の如きも太くして適勁に、面貌姿勢はいふまでもなく、筋骨逞しく、性格氣象に至るまで前代と全く其の趣を異にせるを見る、こは要するに時勢風尚の然らしむる所なりと雖も、實物寫生の新意が變化を與へたる一源因たらずんばあらざるなり、又彩色に於けるも配色は主に華麗なる色を用ゐ、且つ盛り上げ彩色、截金彩色等を施し、頗る壯觀を究め燦爛人目を驚かすが如きものあり、此等の彫刻物は漸々當代の末期に至り、剛健に失して遂に粗豪に流れたる傾きなしとせず、然れども亦或は定朝風の穩和なる所を傳へて、これに頗る精緻の技工を施し、光背、臺座、天蓋瓔珞等も珠玉を鏤め象眼を施し、或は毛彫を用ゐ、或は透彫を施し、益華麗を極め、剛健雄勁なる佛像と相對峙したる一派なきにあらず、又體軀の甚だ短矮にして強き一種のものあり、又は衣長くして其の裾蓮座外に垂れたるものあり、此の二者はおもに宋元の餘影になれるものにして、嘗て前代に見ざる所の



第百三十九圖　地藏菩薩像

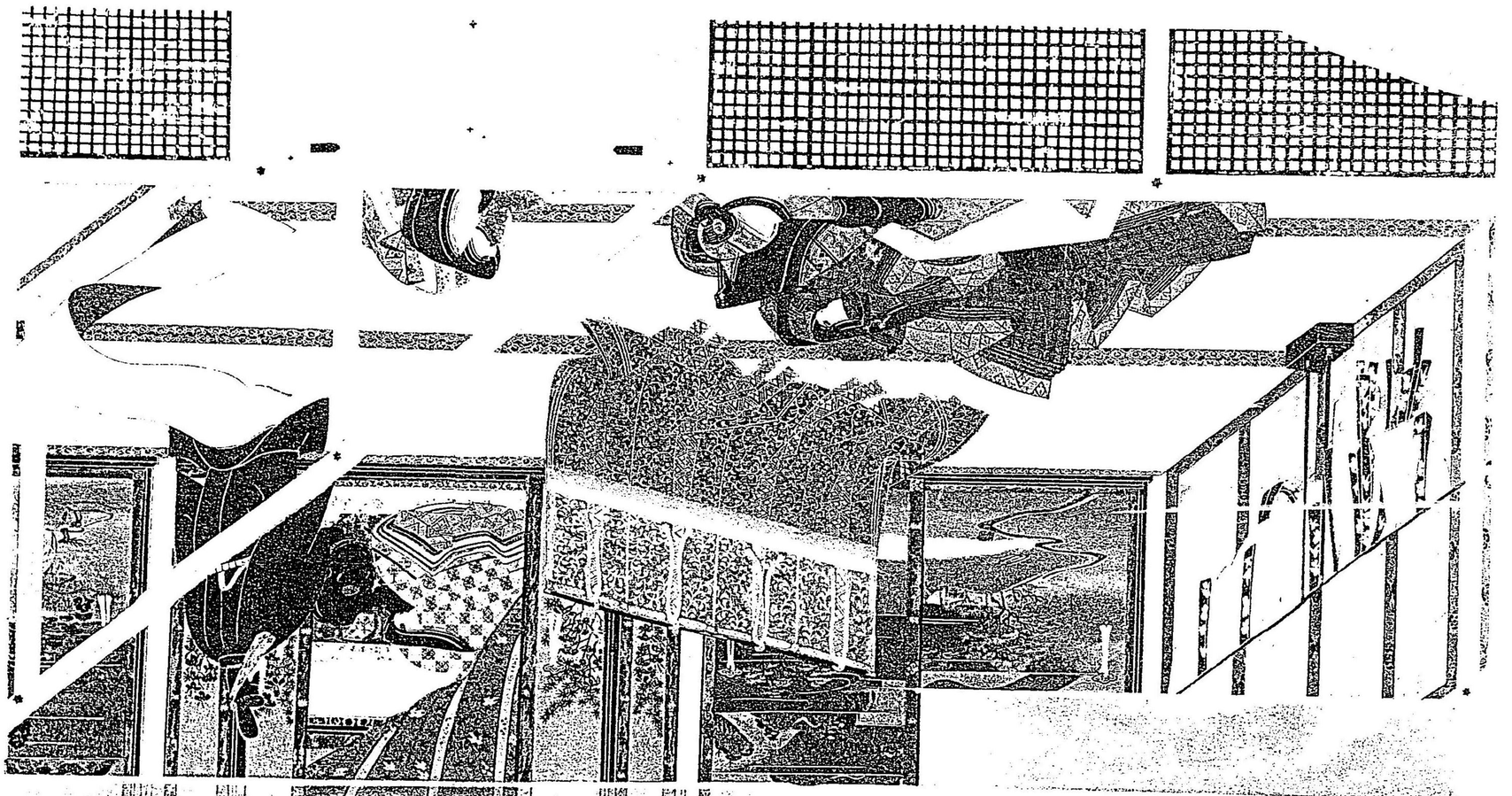


第百四十圖　德仙太子畫像

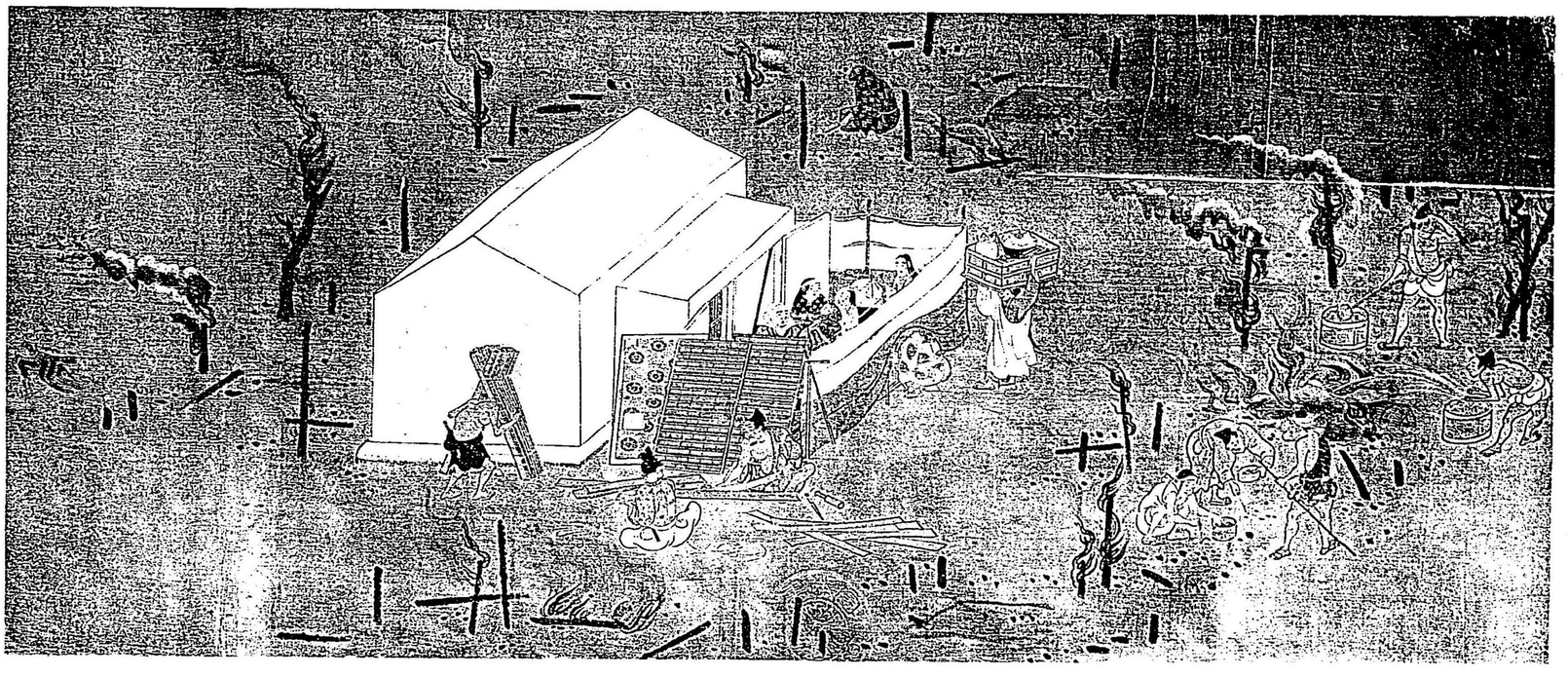


第十六圖 [illegible]

第百四十一圖 (高階隆兼筆春日權現驗記卷)



第百四十二圖（高階隆兼春軍撮影）



第五回十二回（第一回総選挙当日開票場）

ものなり。

當代の佛像は概ね木彫にして鑄物の佛像も少なからず。建長四年相州深草里に建立せし高さ五丈の金銅盧舍那佛の如き、其の精巧なるものなり。こは上總國大野五郎右衛門の作にて、今日に遺存せり。乾漆の作品に至りては殆んど其の跡を絶ち、塑像の技工は僅に其の命脈を維持するに過ぎず。

當代の佛師にして其の名最も著しきものを法印運慶とす。運慶は法眼康慶の男にして、備中法印と號す。是れより先き法眼快慶法名安阿彌といへるものあり、康慶の弟子にして、運慶と共に當代佛師の泰斗と稱せらる。運慶以後に至りては其の弟に法橋定覺あり、其の子に法印湛慶あり、湛慶の弟に僧康運あり、康運の男に法印康圓ありて、何れも其の家系を繼承す。又法眼康辨、僧康俊を中佛所と云ひ、法眼康勝、法印康譽、法眼康尊、法印康祐、僧康榮を西佛所と云ひ、法眼康祐を東佛所と云ふ。これ等は皆京都七條佛所の一派にして、東西と其の中間とに佛所ありしを以てしか云へるなり。又三條佛所に法橋定圓あり、法眼宣圓あり、其の他法眼院康、法印院尋、法印院範、法印院賢、法印院繼、法印院審、法眼院宗、法印院信、僧院乘、法印院忠、法眼院瑜、法眼運賀、法印運助、僧運覺、僧舜慶、法橋快兼、僧惠圓等あり。

康慶は文治年間に興福寺南圓堂の不空絹索觀音像並に四天王像、六祖師の像を、又建久八年八月に東大寺四天王の內增長天像を作る。快慶は建仁三年運慶と共に東大寺南大門の二王像を、又建久六年同寺の二天の內多聞天を、又同八年八月同寺の四天王の內廣目天像を、定覺と共に觀音像を、高山寺の本尊釋迦像並に十三重塔の本尊彌勒菩薩像を造れり。其の他快慶作と傳へ來れるもの少なからず。運慶は快慶と共に東大寺南大門の二王像を、建久八年八月同寺四天王像中持國天像を、又高山寺の盧舍那佛像、同寺の四天王中多聞天像、東寺の二王中密迹金剛を、蓮華王院の中尊並に二十八部衆(燒失して今日現存するもの稀なり)等を造れり。而して今日現存する俊拔にして剛健なるものは、概ね運慶の作として傳へらるゝに至れるを以ても、其の技倆の如何に秀拔なりしかを知るに足るべし。定覺は建久六年に東大寺の二天の內持國天像を、建久八年八月に同寺の四天王の內多聞天像を、又快慶と共に同寺の二丈五尺の觀音像を半身づつ作りて後に接合せりといふ。湛慶は東寺の二天の內那羅延堅固、又同寺の增長天、高山寺の金剛力士、梵天像、帝釋天像、毘沙門天像、又高野山遍照院の彌陀三尊像等を造る。康運は高山寺の四天王の內廣目天像を作り、康圓は白毫寺の閻魔

王像を造り、建保三年卯月廿六日春日大佛師康辨は、興福寺の天燈鬼龍燈鬼を作る。康勝は敎王護國寺中門の持國天像及び貞永元年八月の鑄造に係る法隆寺金堂の阿彌陀三尊銅像を造る。其の光背の文下の如し、貞永元年八月大佛師法橋康勝銅工平國文。

遺品

二王像（第百四十三圖）　奈良　東大寺藏

二王は敎法護持の爲めに寺門に安置せらる。其の左を密迹金剛と云ひ、右を那羅延堅固と云ふ。此の像は建久年間に運慶、快慶の兩手になれるものにして、東大寺南大門に安置せらる。蓋し二王中の最も巨大なるものなるべし。其の長け二丈六尺五寸、其の雄威なる面貌と剛健なる體姿とは能く相調和し、加ふるに其の彫法は俊拔にして一々寫生に基き、筋骨より姿勢に至るまで、善く靈活の妙あるは他に其の類を見ざるなり。これ運慶が得意の作にして、彼れが手腕は實に斯る忿怒部に屬する剛健の作にありとす。

文殊菩薩像（第百四十四圖）　奈良　興福寺藏

此の文殊菩薩の像は維摩像と共に興福寺東金堂に安置せられたる木彫着色の座像にして、長け僅に三尺一寸、彫法頗る剛健にして、其の面貌雄壯なるも自ら穩和の風を具ふ。而して之れに向へば悚然として狃るべからざるものあり。これ所謂凡工の企て及ぶべからざる所にして、最もよく文殊の諸德を表現せりと云ふべし。思ふに快慶、運慶等一派の當代名工の手になれるものならんか。

維摩居士像（第百四十五圖）　奈良　興福寺藏

此の像は文殊像と共に興福寺東金堂に安置せらるゝ所の木彫座像にして、長け三尺、體軀衣紋より臺座等の裝飾に至るまで、悉く寫生に基きて造りたるを以て、全體能く調和し、且峻嚴侵すべからざる風あり。想ふに李龍眠等描く所の圖樣と頗る相近似せるものあるを以て之れを見れば、當時の佛像等は宋朝の餘韻を加味したる所なきにあらじ。此の像の彫法趣致品位等より云はゞ、或は運慶一派の名工の作になれるものたるや疑はれじ。

十一面觀音像（第百四十六圖）　山城　法金剛院藏

第百四十三圖　運慶　快慶作　二王像

第百四十五圖）雜摩伽士像

第百四十四圖）本阿彌光悦作文殊菩薩像

第百四十六圖（十一面觀音像）

此の像は山城國葛野郡法金剛院に安置せらるゝ十一面觀音木像にして長け凡そ二尺七寸餘、其の形狀態度の穩當なるは勿論、衣紋に盛上げの紋樣を畫き、光背は透彫に鍍銀を施し、蓮座には無數の瓔珞を垂れたり。是の如く臺座光背の裝飾に至るまで、共に能く本尊の工巧に伴ひて精美緻密を極めたるは、前代未だ見ざる所にして、人をして具さに當代意匠の全般を窺ふことを得せしむ。此の像は元應元年に製作されたること、臺座の記銘によりて明かに證するを得べし。

第五節　建　築

當代に於ける佛寺建築は二樣の方面より視察すべきものあり。一は卽ち前代の後を承けて依然其の樣式を保ち、連綿として當代の中期に及びたり。彼の山城に於ける知恩院の勢至堂、蓮華王院の木堂(三十三間堂)、海住山寺の五重塔の如き是れなり。二は卽ち新たに宋朝の影響を蒙りて勃興せる禪刹伽藍の流派にして、其の遺物は神奈川縣鎌倉圓覺寺の舍利殿に於て、之れを見ることを得。こは要するに足利時代に大成せる禪刹建築の根源をなすものにして、當代の初年より起り、全期を通じて漸次に進歩したるものなるが如し。而して彼の藤原氏攝關時代の系統を承けたる一派は、眞言天台の諸派に行はれ、當期の中葉以降に至りて漸く變化の徵候を萌し、其の末年に及びては著く禪刹一派の趣味を混じ來り、其の曾て溫和優美を以て勝りし前代の特色は變じて雄健奇拔の性質を帶び、手法縱橫時に或は常規の外に逸するものあり、之れを南北朝時代のものと名づくべく、足利氏幕政時代のものとも名づくべし。この例には河內觀心寺金堂、近江西明寺及び金剛輪寺(俗に松尾寺といふ)本堂、奈良東大寺鐘樓、山城上の醍醐の經藏等なり。

此の時代に於ける日蓮、淨土眞、時諸宗の伽藍建築の形式は、今日に存するもの皆無なるを以て、之れを知るに由なしと雖も、思ふに是れ敎義上の必要より建築物の配置等を各自に撰定せるに止まり、其の建築形式の手法の上に就ては、別に斬新の發明なく、只從前の樣式を適用したるに過ぎざりしものゝ如し。

神社建築に關しては多く知る所あらず。されど依然として前代の形式を墨守せるに過ぎざりしが如し。

非宗敎的建築に就て言はゞ、大內裏の建築は極めて少時の間復興せられしも、復忽ちにして湮滅に歸し、里內裏は初期は閑院內裏にして、中期以降は富小路內裏に移り、南北朝に至りて、北朝は東洞院土御門殿を皇居とせり。其の規模及び